

とは一生を通じても和解する機会がないようになってしまふのである。恐らくこれは私の性格の中に、かう云ふ何か變なものが潜んでゐる故であらうが、その店でも私は一番々頭をしてゐた次郎吉と云ふ男から、先づ第一に憎まれた。次には小僧仲間の故參である、清どんと云ふ男から、私はさんざこづき廻された。次郎吉はその時分雷門の助六と云つた、——今はむらくとたしか云ふ——落語家の兄であつた。髪の毛の白い陰險な奴だつた。それでもさすがに、年を老つてゐる丈けに、打つたり擲つたりはしなかつたが、針でさすような意地の悪い事をするのである。それからまた、女の腐つたような、くどくどしい小言が絶えずその口から流れてくる。同じ使ひにしても近所であるとか、又は何か軽い物を運ぶ時にはほかの小僧をやり、遠い所や重たい物を運ぶ時には私に云ひつけるのである。雨のしよほく降る日に、私はその男の爲に三十間堀にあつた報知新聞まで、商報の出てる新聞を五百枚取りにやられた事がある。縄でからけた重い新聞を背中に背負つて、ぬかるみの道を私はよたくと歩いて來た。二二三丁歩くと、紙の重みで繩が肩に喰ひ込んで來て切られるように痛むのである。ぬかるみの泥は下駄と足の間に入つて、力を入れて歩むたびに下駄は、するつくとぬけさうになる。新聞を置いて一息つきたいと思つても、どこもかしこも濡れてゐる。新聞を汚せば店へ歸つてから、どんな

に怒られるか判らないと思ふと、私は我慢してほつりくと歩いてゐた。中通の道具屋か何かの飾窓の前の鐵の棒にその新聞をもたらせて、ほつと一息つきながら私はめそく泣いてゐた事もあつた。

雨の降る日は私の頃、どの位る呪つたものであらう。たゞにそれは小僧をしてゐる時ばかりでなく、貧しい労働をするものに取つては、この道の悪い陰氣臭い、じめくした日がどの位る苦しく呪はしいものであるかは、本當に苦しんだものでなければ判らない事だらう。私はそれから後ち、もう雨の降る日には一步もそとへ出なくとも好いような状態になつてからでも、夜中にふと眼が覺めた時、雨の音を聞いてぶるくつと慄えた事がある。そして、自分の理性が漸く我に返つて來ると、

『あゝ雨が降つても外に出なくつてよかつたのだ』と安心するようになった。然しそれはたゞ私自身の身の上の事だけである。今もこの呪はしい雨の爲に、私が嘗て苦しんだと同じように苦しむ人の多くを思ふ時、私は心に濟まないような不安を感じる。

雨が降るとその店では、判取廻りと云ふものに小僧を出した。それは平素車力が方々の得意に荷を持ち運ぶ時、送り状態だけを持つて行つて、先方の受取を取つて來ない爲に、判取帳を持たせ

て得意を廻らせて、その受取を確めさせるのであつた。得意の範圍は可なり廣かつた。私が初めて判取に廻らされたのは、十月の末で冷たい雨がしとくと降つてゐる日であつた。古顔になつてゐる清どんと云ふ小僧は、その日になつて、

『今日は判取に歩くんだ。お前なんかきつと途中で泣き出すぞ』と豫め引導を渡した。人間と云ふものは本當に可笑なもので、自分が嘗て苦しんで來た道は、あとから來たものにも、同じように苦しませなければならぬといふような性分がある。昔の老人は、俺達は若い時には歩いて東海道を上つて來たものだ——とか、何處そこの山を何日か、つて越した——とか、今は便利な汽車でそれを越す者を呪ふように呷く事がある。その愚しさは哀れむべき氣もするが、これは本當にいやな、人間の持つてゐる、呪はしい性分である。誰が印刷機械の發達した今日に、字引の引寫しをする馬鹿がるよう。自己の努力の無益の浪費を拒み、下らない苦痛を避け、そして自分の生命に糧となり力となるものを取るべく進むのが、向上の念のある人間の取るべき方法である。私は今でも、この清どんや、昔の老人のような固陋な、自分の殘忍性を満足させて喜ぶような馬鹿な奴を澤山見る。そして私はかう云う代物の存在を今も呪い、且つその絶滅を常に心に祈るのである。

引導を渡された私は、判取帳を前と後ろに二冊ぶら下けて、彼の後ろに従つて店を出た。十六才になる骨組の頑丈な清どんは、わざと足早に歩いて行つた。私はあの番傘の重たいのと、判取帳が胸にぶら／＼して歩みを妨たけるのに閉口しながら、ちよ／＼と走るようについて行つた。最初は京橋の高橋に出て、それから深川の大江町を通り、本所を越して四つ目に行つた。その頃には、樺の齒を入れた私の足駄は、一方が一寸なれば一方が一寸五分と云ふ風に、削つたように曲つて減つた。蒲鉾形になつた道路のなぞへになつた片側を歩いて、どうかしてその下駄を平に持たせて歩かうとするのであつたが、例の通りぬかつた水が間に入つて、ずる／＼とすべるのに苦しんだ。清どんの下駄の齒も、同じように減つてしまふと、彼は洗足になつてすた／＼歩いた。そしてぐ／＼してゐる私にも洗足になれとすゝめた。

田舎で洗足になりつけて育つた清どんの足の裏は、小砂利の多い道を平氣でどし／＼歩いて行つたが、家にゐた頃可なり亂暴に暮してゐても、洗足になつたことのない私には、小砂利の上を一足踏むでも頭の心までずうんと響き渡るように痛むのだつた。私はかうして今ま書いてゐても、あの意地の悪い、不愉快な痛みを思ひ出す。それは双で切れた痛さでもなければ、刺された痛みでもない。鈍くして鋭いように骨までこたえる痛さだつた。ぬかるみの柔かさうな土の上を

よつて歩いて、何處に隠れてゐるのか小さな石が足の裏に當つては飛び上つた。遂に私はすぐむように腰をかゝめて歩いてゐた。歩みがだん／＼後れると清どんは先の方に立つて待ちながら『おい、何をぐづ／＼してゐるんだ』と怒鳴りつけた。私はもう判取帳も重い番傘も投げ捨て、泣き出したくなるのであつたが、今朝清どんから云はれた事を思ひ出しては、齒を喰ひしばつて清どん位が何と云はうとも構ふものかと考へながら、そろ／＼と痛む歩みを續けて行つた。

『こ奴は本當に圖々しい野郎だな』と清どんは幾度か口惜しさうに怒鳴つた。彼が口惜しがるのを見るのは私にも愉快であつたが、歩みの進まないのは自分でも苦しかった。私の意久地なしを笑ふ前に、私が十三歳の少年であつた事を、どうか常に頭に置いて讀んで貰ひたい。その頃は自分でも、一ばしの人間となり切つたように思つてはゐるが、今日になつて私でも十三歳位の少年を見れば、如何に小さくかよわいかよく判る。そのちつほけな子供が、あの大きな番傘と、厚い判取帳を二冊持つて、雨の日を六七里も歩かされるのである。これが又た馬鹿々々しい商賣の呼吸を覺える修業ださうだ。何と殘虐な下らない事であらうかは、恐らく誰れでも感ずるだらう商賣の呼吸と云ふ事は、かうして一軒の大きな店に、本人の爲には何にもならない無駄な勞力を提供させ、彼等はそれを利用して富を作り、こちらは性質をねぢけさせ、品性を下劣にし、嘘を

つく事を感じ、おべんちやらと媚を呈する事のみが、成功の方法であると云ふ、卑しい觀念を確實に保持せしむる丈けの事である。私が早くそれと氣のつかなかつたのも愚かであつた。然しそんなところに迷いこんだのもよく／＼の不運な事だつた。

その日は四つ目から更に南千住に出た。そこで私達は、おかみさんから頼まれた、鮎のすゝめ纒と云ふ荷を一つ殖やした。それから雷門を通り、清島町を通り、萬世橋に出て家へ歸つたのはもう夜の八時近くだつた。足の裏は、疊を踏んでも痛むほど脹れ上つてゐた。店へ歸つた時はけつそりして口もきけなかつた。

『どうだい、生意氣な事を云つても今日は參つたらう』と清どんは、弱り切つた私の顔を見て氣持のよさ／＼に笑つた。私は黙つてゐた。——店でもその頃は、小僧ははだして歩くものだと言ふような、先つき云つた自分達の過ぎて來た勞苦の道を人にも推しつけるような、馬鹿な考へからさう云ふ風習を作つてゐた。然しその翌年になつてベストが流行つて、洗足で歩く事を嚴禁された時私はどんなに喜んだか知れなかつた。

山の手で育つた邸者と云ふ事が、そこではまた私を苦しめる種であつた。それは丁度私が幼い頃、町の者と遊んではいけないと、父や母が町の子を輕蔑したことを、逆に私に返されたような

ものだつた。山の手で育つた奴は理窟を云ふ、生意氣で不従順だ、さうして結局子供らしくない奴だと云ふ定評を私は受けてしまつた。夜になつて用がなくなつてから、私達は一寸新聞を讀んでも生意氣だと云つて怒られる。たゞ算盤と習字だけは、彼等の便利の爲に、習ふ事を許された一切の世間的智識を養ふと云ふ事は、やがて彼等に何か不利益な物を齎らすと云ふ事を、彼等はつきり知つてゐたのに違ひなかつた。がさくした慌しい、何の興味もない日が續いた。

山形へ行つてゐた時のように、私はまた明け暮れにだん／＼母を思ふ事が多くなつた。取り分け家にゐるころ、私の爲めに、一通りでない苦勞をかけたことが、私の心を云ひようもなく苦しめた。母からも時折便りはあつたがどれを見ても、父のゐない家を守つて行く勞苦が、そのはし／＼に現はれてゐた。私はその手紙を見るたびに、一二年この方母を惱ませた私の所業が今の母にどれ位深い悲哀を與へたかを考へた。そして時々母がもう、今の苦痛に堪えかねて、私が幼い時に企てたように、自殺するような事が、ありはしまいかと、そればかりを苦に病んだ。一週間に一度位づゝ母に手紙を書いた。そして自分は満足して面白く働いてゐると云ふような氣休めを書く事を覺えたのもその頃の事だつた。母が死にはしまいかと云ふ妙な杞憂が私の心にはだん／＼深く蔓つて行つた。丁度その時分、下町の方にもはじめて水道が敷設されて、鐵管の口か

ら瀧のように水が出るのを私達は珍らしがつたものであつたが、私は一度あの蛇口から溢れ出る水を、指先で押え止めようとして、どうしても水の壓力にかなはなかつた事があつた。その不思議な強い力が私にふと、その源を流れてゐる大きな川を思はせて、何と云ふ事もなく慄え上つた事があつた。その後私は水道に對して妙な恐怖を抱くようになつてしまつてゐたが、夜になつて風呂に入りながら、水道から流れ出る水を見てゐると、どう云ふわけか私は母が、その水源に今頃、身投げをしないだらうかと考へ出して、急に悲しくなつて飛び出した事があつた。——その前の年の暑中休暇に、私は友達と井の頭の池まで、遠足に行つた事があつた。遠い道に日が暮れて雨が降つて、眞暗な上水べりを、おづ／＼と歸つて來た事のある、その時の恐怖が私の心に再現したのかも知れないが、——私はその晩すぐに母に手紙を書いた。三四日して母から無事の返事を受け取るまでは、私は矢張りそのつまらない恐怖にとらはれてゐた。

つまらない苦しい日々の生活の中で、最初私に幾分かでも樂みを與へてくれたのは、月に一度づゝある店の晚餐會と云ふものだつた。小僧の樂みは『喰ふ事と寝る事だ』と云ふ云ひ慣はしがあつたが、本當に何の自由もない私達は、たゞ喰ふ事と寝る事ばかりを考へてゐた。その店は食物には案外贅澤であつたのと、本所まで使ひに行くと五錢づゝの使賃を老年の内儀さんが呉れた

ので、私達はそれで買喰をした。晚餐會の時には、店の者一同に、あひ鴨とか、牛肉とかを取り寄せて、思ふが儘に喰べさせた。小さな私達に酒も呑ませた。私はその晚餐會の來るのをどの位の待ち受けてゐたか知れなかつた。

だん／＼私もその店に慣れて來た頃になると、その若主人の内證の使ひを云ひつかるようになった。若主人はなるたけ店に番頭のゐないような時に、

『おい、一寸、一寸』と手招きして二階へ呼び上げた。それは大抵、藝妓家か料理屋へ、手紙を持つて行つたり、拂ひの金を持つて行く使ひであつた。その時はもう、いつものようにてく／＼歩いてゆくのではなく、若主人の専用になつてゐたような、金公と云ふ車夫の車に乗つて、急いで行かなければならなかつた。私はその行く先々で、幼い時から憧憬れてゐた藝妓と云ふものを眼のあたりにまじ／＼と見た。御神燈のかゝつた、拭き込んだ奇麗な格子の中、そこにはいつも優しい下駄が並んでゐた。私は少しおど／＼しながら格子を開けると、

『どなた』と云つて小さな女の子が出來て來た。はじめはどこかの小僧と思つて少し見下げたような態度をしたのが、その手紙を出すと思つて急に丁寧になつて、

『どうぞ御休みなすつて』など、云つて、茶と菓子を持つて來てくれる、見えすいた態度さへ私

には嬉しかつた。薄暗い部屋の中には、箆筒や長火鉢や、赤い布のかけた鏡臺や眞鍮の器のびか／＼光る神棚が、どれもちま／＼と形よく置いてある。私の姉位の年をした女が、しどけない風でそこを横切つて行く。何も彼もが不思議なまた懐かしい世界のように思はれた。私は又た返事であるのか受取だか状態に入れたものを貰つて家に歸つて來た。すると若主人は、

『内證だよ』と云つて、そつと五十錢づゝくれたのである。そしてそれは又たぢきに、近くの魚河岸の、鮎や天麩羅となつてしまつた。朝から晩まで、自分には何にも興味のない事で、あちらこちらと走り廻されてゐる子供には、のれんの間からちら／＼見える、鮎の赤いのや甘さうな煙をたてる天麩羅の匂より外には心を引かれるものはなかつた。そして、早く歸らなければ怒られると思ひながら、そののれんをくゞつて瞬間の味覺に酔つてゐる間だけが、私達の天國だつた。

その中に私はだん／＼使ひが遅いと云ふ事と、小理窟を云ふといふので店の評判が悪くなり始めた。然し私にしてみれば、おち／＼と店に坐つてゐる暇もないほど、次から次へと追ひ廻されてばかりであるから、使ひに出れば、橋の上に人だかりがしてゐれば、つひ覗きたくもなつてくる。そして、下の方でいつ釣れるのかも判らない糸をたれてゐる人の釣竿を、熱心にぢつと見守つてゐる。釣する人が竿を上げると、私ははつとする。そして、針の先に餌のないのを見

ては同じように失望する。せめて一疋釣れてから、とよもやに引かされて眺めてゐる事が多かつた、その時分に、私を一番慰めてくれたのは、今はもう影もなくなつた、萬兩國橋の本所の方の袂に、でろれん左衛門の小屋があつた、葎簧張りで小屋の外を圍つた上に、盞色か何かの幕が廻してあつた。小屋の中には細長い腰掛けが置いてあつて、いつも仕事を休んだ労働者風の人達で一杯になつてゐた。私はその葎簧の蔭に立つて左衛門を聞いてゐた。最初は一寸、一口だけでも聞いて行かうと思つて入るのだつたが、岩見重太郎が勇ましく刀を振ふ話だの、不思議な術を使ふ自雷也の話聞き初めると、もう少しもう一寸と思ひながら、いつか時の經つのを忘れてしまふのであつた。やつと話がくさりついて、貝を吹いてゐた男が金を集めに來る頃になると、私は漸く我に返つて、慌て、馳け出すのであつたが、その位の事では後れた時間は取り返す事は出來なかつた。日本橋よりの方の兩國の袂には、大きな繪紙屋があつた。十日目位づゝにかけかへられる、三枚續の武者繪や錦繪も、空想に耽りやすい私に、道草賣の時を與へた。今はあるかないか知らないが、その頃には大道で人形芝居や寫繪を見せる館屋があつた。小さい人形や、芳野紙に寫る切り抜の人形は、物慣れたこは色につれて、生きてゐる物のような活躍した。釣鐘の響柏子木の音、凡てそれが芝居の通りに行なはれる、その前に立つて見てゐると、私はいつか本

當の芝居に來てゐるような氣になつた。楽しい物はみんなそとにあつた。そして店の中は慌しくぎごちなく、たゞ苦しいばかりであつた。

その店の小僧は二た月に一度づゝ、本所にある本宅の方へ勤めることになつてゐた。本宅の前には焚場と云つて、黒砂糖を製造する工場もあつた。けれども荷物の出し入ればかりしてゐる本宅の方には小僧の用事も少なかつた。質屋のように薄暗い店の中にちつと座つて、時々にかゝつてくる電話口に出ること、奥の使ひと云つてゐた、臺所の用事に出るほかは之れと云つた用もなかつた。私はその暗い店に座つて、終日エフ板に錐で穴を明ける事を、最初に云ひつかつた。エフ板と云つても知らない人もあるかも知れないが、それは田舎出しとする荷につけてやる木の荷札である。杉の木の細長い板を取つて、蜜柑箱の隅において、錐でとんと叩いてから、ぎり／＼つともむだけの事であるが、四五十枚もむ中に、掌は赤く脹れ上つて、五本の指のつけ根に豆が出來た。それでも構はずもみ通してゐると、やがて豆はつぶれて血がにじんだ。そしてそれはだん／＼と大きくなつた。人間の身體と云ふものも、中々強く出來てゐるものである事を私はその時感じた。

ちつとしてエフ板をもうんでゐると、堪らなく退屈になつて來る。すると私は自分の頭に様々な

世界を描いて楽しんだ。それでも私の前途には、その頃はいつも光明があつた。まだく長い七年の年期を終つたら、獨立して商賣を始めれば、ぢきに金が儲かつて来る。勿論自分は、黒い長袴纏を着て、車力もすれば得意廻りもするのである。はじめの中は母が私の世話をしてくれる。寒い日に外を廻つてくれば母は必ず温い物を作つて私を待つてくれるだらう。その中にだんく金さへ儲かつて来れば、どんな美しい女でも妻に貰へる。さうして店も立派にして——と、私はその時の自分の店をまさくと頭に描いて見た。

時とすると私はまた、検査が終へたら船に乗つて、外國へ出掛ける自分を頭に描いて見た。南洋の熱い所へ、原料糖の買い出して行くのである。小學校で地理の時間に話を聞いた、大きな椗のような椰子の實や、幹に穴をあけて甘い汁を吸ふ何とか云ふ木、皮膚の黒い土人の姿、それ等を考へてゐる中に、私は自分が商賣に出かけるのである事も忘れて、いつか冒険譚中の人となつてゐた。私はそれ以前にも、空想勝ちな少年だつた。それ以後にも矢張り空想勝ちな青年だつた。現在とは聞かれれば、矢張りさうであるのかも知れない。けれども人は、生活に苦しい時に最も多く空想の中に逃げ込むものである。現實を顧る時に、自分の周圍に自分の力で出来さうな事は何一つなくなつた時、私は空想の中に於て、偉大な仕事も、思ふが儘の戀愛も、何のさし障りも

なく爲し遂げてゐた。その時分に私はよく『ほんつく』と云はれた。自惚ではないが、私はさう大して間拔の方ではない。それは一面に自分の性質の小さいのを示すいやな事だと思つてゐる。けれども私はその頃は、たゞ空想の中ばかり潜り込んでゐた爲に、こんな綽名を貰つたのであつた。やがて私はだんくと、使ひに歩く道でも専ら空想に耽る事を覺えるようになってしまつた。遠い處に使ひにやられて、單調な道を歩く時には、私は自分で承知して空想の中に浸つてしまつた。遠くにある電信柱に目標をつけておいて空を仰いで勝手な想ひに耽り始める。やがてその柱のそばに来たと思ふ頃に、この邊だな、と思ひながら自分に返る。柱がまだ遠くにある時は失望した。いつか知らない中に目標を通り過ぎてゐた時には喜んだ。單調な苦しい生活を、空想ばかりが色づけたり、楽しませたりしてくれた。私は嘗て『道草』と云ふ小説に、この空想の心持を書いて見たが、充分満足するほどのものではなかつた。私の筆がもつと熟し、事物を見る眼がもつと正しくなる時があつたら、そして充分の自信を持てる時が来たら、もう一度それを書いて見たいと思つてゐる。——こんな事を書いてゐる中に、私はまた少し餘計なことを書きたくなつた。これも空想家である私の道草と思つて許して貰ひたい。——私は小さい時から里神樂が好きであつた。いや神樂と云ふよりも、寧ろあの囃子が好きであつたのだ。時々は眠りを誘ふよう

に物悲しくなる笛の音、それは私に幼かつたときいた子守唄を思はせる。賑かでありながらどこか寂しい鉦の響、はしやいだ氣持を現はすかと思ふと、笛の絶間にゆるやかな感じを與へる。太鼓、壯重に鳴る大太鼓、凡てが私には懐かしく氣持が好い。私は時とすると凡ゆる優れた音楽よりも、囃子を愛することがある。それには無論、少年時代の追憶、ブランダスが人生の手金と云つた、楽しくもまた悲しかつた様々の回想が、私にそれを懐かしく思はせるのであらう。日曜學校で見た、幻燈の心にしみ渡るようは青い空と共に、はやしの響は私には最も慕はしいもの、一つである。村松梢風君がいつか、加賀の太守か何か、馬鹿囃子を一度聞いて、あらゆる音楽を斥けて、囃子に没頭した物語を書いた事がある。私は、あの囃子の中には、ブリミティヴではあるが、さうした云ひ知れない魅力があると信じてゐる。——いや私はこんな話をしようと思つたのではなかつた。——そこで私はいつか、去年の夏であつたかに、久し振で一晩神樂を見て、長年の渴望をいやしたものだ、その時、例の馬鹿が大國主の命の命を受けて、里の方へ眞水を汲みに行くところを見た。——その時の神樂は兎と鰐の話であつた——馬鹿は手桶を下けて村里へ歩んで行く。然し空想家にしてほんづくである彼は、歩きながら、先づ自分がその井戸傍に行つた時の事を考へる。そこには村の女達が既に水を汲みに來てゐる。彼は自分で手拭を冠つて腰をし

なはせて、女が自分に撈揆する様子をして見る。そこで彼はまた自分に返つて撈揆する。やがて二人は話を始める。お神樂では神代にも、手拭もあれば煙草もあつた。女は吸附け煙草をしてくれる。馬鹿はそれで有頂天になつて話しこむでしまつてゐる。はじめて彼は、自分は主人の云ひ附けで、皮を剥がれた兎を洗つてやる爲に水を汲みに來たものだと言ふ。二人はだん／＼親密になつてくると馬鹿は女にいちやつきだす。女は怒つて馬鹿の顔を打つたので、彼は、はつとして我に返ると、たゞ一所に立ち止つて、手桶もそこに置いたまゝ自分の空想の中に戯れてゐたのであつた。馬鹿は後れた事に氣がつき、歸つてから主人に怒られはしまいかと云ふ身振をして、慌てゝ手桶をぶら下けて、轉けつまるびつ馳け出して行くのである。私はこの神樂を見てゐる中に、小僧時代の自分の姿をその中に見た。今でも『空想家馬鹿の半日』と云ふ、小品を書いて見たいと思つてゐる。——

本所の店に來てから私はその近所に貸本屋を發見した。私がある頃愛讀したのは、怪談の書物だつた。本所の七不思議、お竹藏の傘の一本足、など云ふのが、つい近くであるだけに殊に私の興味を引いた。現實に疲れたものは、不可思議な架空の世界に遊びたがる。私はエフ板を採みながら、側に本を置いて無暗に讀み耽つた、そして興味の頂點に達して來ると、電話に出たり、使



ひにやられるのを恐れて、便所の中に逃げこんだ。そこで私は三十分でも一時間でも、自分の心の堪能するまで読み耽つた。私はまたそこで、禁制の煙草も吸つた。汚い話であるが、便所はその頃の私にとつては唯一の娯樂所であり、避難所でもあつたのだ。私はまた本所の河岸通りを愛した。薪屋の置場の立ち並んだ河岸ぶちには、高く高く、家のような形に薪が積み上げてある。それは丁度古風な田舎家を思はせるような姿であつた。川の水もこちらのは、日本橋のように濁つてはるなかつた。藏の裏も棧橋に出て眺めてみると、川上の方は撞木橋あたりまで眺められる満潮の静かに満ちた水の上を、葛飾の方へでも行くのか、小舟がゆつたりと通つて行く。竿の先から滴る水は、日の光りにきら／＼輝いてゐた。私は山形で讀んだ讀本の『水の行方』と云ふような事をよく思ひ出してゐた。

何と云つても一番嬉しかつたのは、藪入の時である。年に二廣しかないその休日が、私達にはどんなに嬉しいことであつたが、幾ら言葉を費したとて、それは結局無駄に過ぎまい。使ひに行く途中で左衛門を聞き、繪双紙を眺め、大道の人形芝居に見入つてゐたからとて、すぐにそのあとから小言を云はれる恐怖がおそつて来るのである。けれども藪入の日ばかりは、何も彼もが私に許されてゐる。壓縮されたようなその一日を、どんなにして暮したら好い事かといくら私は心を

碎いた事だか知れなかつた。

忙しい然し勇しい大晦日の晩が過ぎてしまつて、一年に一度ゆつくり寝坊の出来る元日が来る。店には緋の毛氈を敷いて屏風を立て廻す。私達は雑煮の餅をたらふく喰べ、漸く一日骨休みをすると、其翌日は初荷である。店の者は午前一時頃から起き出して、河岸藏には晝の様に明るく提灯をつけて、車に荷を積み始める。山のように積み上げた砂糖俵にも、柄の長くついた赤いほうづき提灯を、何十本となく突き立てる。そして四天にした荷車の梶棒には聲自慢の車力が二人揃つて、『ほい來たほい』と勇しく掛聲をかけて暗い静かな町を、赤い火で飾りたてた車が進み始めるのだ。何臺か續いた車のかけ聲が、夜の町に響き渡つて行くのは、車の後について行く私達にも、勇しく面白い事に思はれた。が、行く先々の得意で酒を飲まされて、やがて夜が明けてそろ／＼疲れ始める頃には、町並に飾つた笹の葉に、正月の風が吹いてゐる。空には風が上り始め、街では娘子供が羽根をついて遊ぶ楽しさうな姿が現はれる。それを見ると私は一遍に、勇しかつた威勢も何もなくなつて、不自由な小僧の身の上を、心の中に嘆くのだった。——然しその頃からもう楽しい藪入が眼の前に迫つてゐる。たゞその日ばかりを心に描いて、いやな思ひをまぎらすのだった。

小僧に出てからはじめての藪入の前の晩に歡喜の頂上に達してしまつた私が、どんなに心を躍らせ、どんなに時の經つ事の遅いのを恨みながら、終夜一睡もしなかつたと云ふような事はこゝに書くまい。仕着せに貰つた、二子縞の綿入と、小倉の角帯と千草色の股引と、新しい足袋と下駄とを枕下に並べて、夜中に幾度びそれを楽しさうに眺めたであらうか。——そして四時半と云ふまだ眞暗な、冬の町には、寒い風の吹いてゐる頃に、私はもう起き出してしまつたのだ。田舎に家があるために、一日では歸れない清どんは、

『何だもう起きたのか』とぶつ／＼云つた。けれどもその際、そんな事は私にはもう問題でなかつた。私はさつさと顔を洗つて、昨夜土産に貰つた大きな砂糖袋を風呂敷に包んで店を出てしまつた。しかし町にはもう、藪入の小僧の懐をあてにしてゐる車夫がちやんとうろついてゐた。私は旦那のように威張つてその車に飛びのつた。走れ走れ、と心の中で叫びながら、薄暗い代官町の堀端を抜けて行つた。

早起きであつた私の家も、私がついた時には漸く起き出したばかりであつた。私は慌て、馳け込みたい氣持をぢつと押へて、玄關に立つて、

『ご免下さい』と大人のような聲を出した。奥の方で、『はい』と云つたのは母であつた。私は甘

く行つたと心に喜んだ。そして玄關に出て來る足音がして障子をさつと開けた時に、私は、『やあー』と大きな聲を出して笑ひ出した。

『まあ、お前かい』と母も私の惡戯を嬉しさうに笑ひながら、今日は來るかも知れない。それとも明日かしらとも思つてゐたのだよ』と云ひながら、角帯をしめた、私の姿をしげ／＼と眺めて、

『すつかり小僧さんにおなりだねえ』と云つた。まだ床の中に入つてゐた弟も、

『やあ、兄さんが、兄さんが』と飛び出して來た。仲の姉も嬉しさうに私を歓迎してくれた。

一番上の姉は、彼女が今でも有難さうに様をつけて呼ぶ、徳川の家に行儀見習とかに行つてゐたので不在だつた。

その一日を私はどんなにして暮したか覺えない。たゞ無我夢中に喜んで、弟達と遊び廻つてゐたのであつた。私はもう今までのように子供ではないと自分で思つてゐた。弟達にも兄ぶつて、玩具を買つたり、繪双紙を買つてやつたり、見知り越の近所の人のところへ行つても、

『へい、左様でございます』とか、僕がと云つた代りに、『あつしが』とか云ふ事を得意らしく喋舌つてゐた。しかしそれでも町に出て、角帯をしめた姿を友達に見られると、極りの悪いような

氣持もした。

夕方になると、私は澁々と店に歸らなければならなかつた。また苦しい日があと半年た、なければ、再びこの楽しい日に逢えないのだと思ふと、堪らなくいやになつて來る。更にその苦しい日が、それから先きまだ七年も續くのだと考へると、頭は一層暗くなるのであつた。そしてつまらなさうに、母にも弟にも別れを告げて、寒い町をのそくと歸つて行くのだつた。藤村の藪入の詩に、深川あたり何とかの夕暮れ、と云ふ文句があつたが、私はあの弱い調子が嫌いである。藪入の子供の歡喜や悲哀は、もつと強く現はされなければならないものと思つてゐる。

一年ほど経つ中に、私はその店ですつかり評判を悪くしてしまつた。子供らしくないと云ふ事と、小理屈を云ふのと、使ひが長く便所に入ると長い事などが、その原因であつたらしい。私の方も、だん／＼と圖々しくなり、悪いことも少しづつ覺えるようになって來た。私の居た店の隣りは、切り鳥賊を作る家だつた、主人夫婦の外に一人の小僧がゐて、朝から晩まで、鳥賊切りの機械をが／＼廻轉させてゐた。藏の後ろの棧橋に出て、私が隠れて油を賣つてゐたときである。隣の小僧は、自分の家の主人がけちで、飯を杯三以上喰ふと怒る事や、風呂にも十日に一度位しか入れてくれない事を話して、私の店の食物の好い事や小遣を澤山貰える事を、ひどく羨しがつてゐた。私は最初、たゞ其小僧が可哀想だと思ふ心から、白砂糖を一斤ほど盗み出して紙にくるんでやつたのだつた。すると其翌日、私がまた棧橋に出てるるとき、彼はあたりを見廻しながら私を呼んだ。そして、何か大きな紙に包んだものを私の手に渡してしまふと、黙つて、あたふたと、藏の中に入つて行つてしまつた。私も自分の藏の中に入つて其包みを開けて見ると、それはまだ切らない鳥賊の束であつた。砂糖と鳥賊の取引は、それから月に二三度づつ、棧橋の上で行はれた。

私はさうして小遣も相當に貰つて暮してゐたが、こちらの覺えて行く生意氣な贅澤は、小遣の額を超越した。その若主人は、奇麗な箱に入つた、エンチアンテレスをいつも吹かしてゐた。夕方になると、重箱を持たせて、中華亭へ金麩羅を買ひにやられた。今ならば四五圓にも當る、一圓の金麩羅は、重箱の中に五つか六つしかないものであつた。六七才になつたばかりのその娘は、シユークリームの中のクリームだけを匙で喰べて、その皮を私達に喰べさせた。そのほか何々と數えたてたら切りがないが、芝居は月に二三度行き、毎日、々々、お祭のようにして暮してゐる、その家の人々の華美な生活が、私の慾望を絶え間なく煽り立てた。

私は自分で買つて吸ふ、バツトル、アツキスや、サンライスよりも、店先に轉がつてゐるエンチアンテレスやキングフイツシャーの方が甘い事を知つた。中華亭の金麩羅とまでは行かなくと

も、魚河岸の隅に出る駄天麩羅よりも、高七の天麩羅の甘さも知つた。店の方にある時は、貸本も借りられないので、少年世界とか、御伽噺の書物とかを買つて、便所の中で讀まなければならなかつた。そして凡てそれ等の事をするには、時々貰ふ小遣だけでは足りなくなつた。遂に私は店の金箱から、或ひは銀貨を一つとか、時には五十錢の大きいの位をちよいと失敬するようになつてしまつた。それは遂に發見されないで済んでしまつたが、然し、若主人の弟であつた人は氣附てゐるようにも思はれた。それで私はだん／＼に、店の方に使はれる事が少くなつて、本宅の方にばかり置かれるようになつてしまつた。ほかの小僧達は、本所の方には商賣が覺えられないと云つて、店でこき使はれる事を喜んでゐたが、私はその本宅の方の、ひまな生活を喜んで、甘んじてその左遷に従つてゐた。

本所の店に来てしまふと、使ひに出る機會も少なく、従つて私の慾望を刺戟するような物を見ることもないので、私はまた落着いて空想と貸本の耽讀の中に暮してゐたが、その頃になつて、店の方では大騒動が始まつた。私が本所へやられる一寸前に、半季の決算があつて、その日には店も休みで私達も用はなく、夜は御馳走があり、決算後には歌舞伎座か明治座を見せて貰へる、楽しみな日であつたが、その日となつて、先代の高島屋に似てゐると噂をされてゐた若主人が、

三四萬圓の使ひ込みをやつてゐた事が、發見された。それが爲に私達のあてにしてゐた御馳走はふいになり、若主人はどこへか姿を隠してしまつた。二三日たつてから、漸く居所を發見されると、そのまゝ本所の店の奥二階に、若主人も幽閉されてしまつてゐた。今までの自由な派手な暮らしから、一時に窮屈な奥二階に唯だ一人してほつねんと暮してゐる彼の爲に、私は變な憤慨と同情と義侠心とを起してゐた。

然し彼の周圍にあるものは、私よりも利口であつた。私が内證で若主人の使ひをしてやる事を知つてゐる奥の人達は、豫め乳母の口を通じて、

『もし若旦那が何か手紙を出すようだつたら、黙つて受取つて私によこして下さい』と云はせた。今まで餘分な小遣を買つた、内證の使ひをした日の事を考へると、私はその手紙を黙つて出す方が本當だと考へた。然し乳母に云はれた事を考へると、矢張り乳母の手に渡した方が、若主人にも乳母にも利益になる事になりはしまいかとも考へた。私はまだ受取らない手紙について可なり苦心した。その翌日二階から降りて來た若主人に呼ばれたとき、私はぎよつとしたが、それは小舟町の方にある盆栽を、手入れをする人がないから元の植木屋に賣つて來いと云ふ用事だつた。四五百圓出した盆栽は、一ヶ月ほどの中に、八十圓でなければ受取れないと植木屋は云ふのであ

つた。私は憤慨しながらも、その金を受取つて来て、若主人に渡した。彼は私が話すことを聞いて、

『そんなものだよ』と寂しさうに笑つてゐた。私の同情は一層昂まつた。けれども悪い事にはその翌日となつて、遂にその時が来た。若主人はまた二階から降りて来ると、そつと私を呼んで、『これを出して来ておくれ』と一本の手紙を渡した。私はすつかり當惑してしまつた。店の表てから半丁程さきにある、ポストと店の間を四五回往復した。ポストの前に立つと、入れてしまはふかと思ふのだが、その時になると乳母に云はれた事がまた頭にふつと浮んで来る。店の前に来て、奥へそれを持つて行つてしまはふかと考へると、今までも内證の使ひをしてゐた事が心を責める。私がさうして間違々々してゐる時に、横の路次から、子供を連れた乳母の姿がひよつと現はれた。

『何をしてるの、そんなところで』とほんやりした私に、けんさうに尋ねたとき、私にはそれが、天命で、もあるかのように思はれて、澁々とその手紙を出して乳母に渡した。

『まあよかつた』と云つて、乳母はほくく喜んで、奥の方へ行つてしまつた。その日から私は若主人に逢ふ事を成るべく避けてゐた。

一週間ほどたつてからのことだつた。私は暗い梯子段の下で若主人に逢つた。すると彼は電話室の中へ私を連れて行つて、

『こないだの手紙は、確かに出したかい』と低い聲で、なじるように尋ねられた。私は何とも云へない苦しさを感じながら、

『え、確かに出しました』と判然答へた。若主人はそれつ切り何とも云はずに、私の顔をぢつと眺めてから、そのまゝ立ち去つてしまつた。その夕方か、夜となつてからか、彼は誰にも氣附かれない中に家出をしてしまつた。店の者は四方八方に飛び廻つて彼の行衛を探した。間もなく彼はまた、彼の遊び友達であつた、同じ問屋仲間の別荘で發見された。——その後若主人は、格別私を恨むような風も見せなかつたが、私はそれつきり彼から祕密の使ひを頼まれることはなくなつた。——その時の私の立場を思ひ、また若主人の身の爲めにも、私のした事は決して間違つてゐたことゝは今でも思へない。且つそれはどうしても仕方なかつた事であるようにも思はれる。然し私は感情に於て、確かに彼を裏切り彼を欺いた。取り返しつかない不愉快な印象が長く私の心に刻み込まれてしまつたのである。

その後、若主人は本所の店から賣場の方へ通ふようになつた。小舟町の店の方にゐた、若い細

君と二番目の子供は、隣りの隠居所へ呼びよせられた。老人夫婦の眼から見たら、それほど放蕩を細君が黙過してゐたと云ふ事も、手落のように思はれたのであらう。その頃まだ二十二三だつた若い細君も、或る意味に於て、老人夫婦の監視の下に置かれてしまつたのである。

若主人の一族が、隠居所の方で生活を初めると、私はその二番目の娘の守や、使ひ歩きの爲にいつもその方へばかり呼ばれてゐた。晝の中は若主人もゐないし、夜になつても歸らない事が多いので、若細君は、いつも屈托勝な顔をして暮してゐた。私は最初の中その隠居所に呼ばれるのを好い事にして、小さな娘を椽側で遊ばせながら、日向ほつこをして、その邊に置いてある、雜誌や小説に讀み耽つてゐるが、だん／＼にその細君の寂しい生活を憐れむような氣になつて來た。丁度その頃その細君もトラホームにかゝつて、藥研堀の眼醫者に通つてゐるが、いつの間にか私の眼にも同じ病氣が出來てしまつた。それで私も毎日細君の伴をして、眼醫者に通ふようになった。それは私にはどんなに楽しく嬉しいことであつたらう。私はまだ自分が小さな人間であることや、自分の家も貧しくなつてしまつたことを悲しみながら、矢張り愉快に彼女のあとについて行つた。時々乳母も、二人の娘も一緒に行くことがあつた。さう云ふ時は歸り途に、人形町の大觀音に參詣したり、或ひな兩國の廣小路をぶら／＼と遊びながら歸るのであつたが、たゞ

それだけの事が、どれほどに、私の心を喜ばせた事であらうか。私は取止めた心でもなく、たゞふわ／＼とひそかに彼女に戀してゐたのであつた。その若い細君の面立はどちらかと云へば輪廓の大きい、少ししやくれた方であつて、たゞ色が透き通るように白いことが、凡ての缺點を隠してゐるので、大した美人と云ふほどでもなかつたが、私はその主人の妻に戀すると云ふ事が、不倫であると云ふ、舊式な道德に責められながら、尙ほ彼女の風貌を胸に描いては楽しんだ。秋になると隠居所の庭には目白が來てさへすつた。私は子供に取つてやる口實の下に、柿の枝に籠をさけて目白をつかまへた。是初の一二羽は、私が餌をやることに慣れない爲に、殺してしまつた。にこ毛を立て、丸くなつて木の上に眼をつぶつてゐる鳥を見るのは悲しかつた。どこの子供もするやうに、私は庭の隅に死骸を埋めて、細い木片れを墓標に立てた。漸く慣れた鳥を、餌をやる時にふと、取り逃してしまつた時は、それよりも一層悲しかつた。秋も更けて來た寂しい夕方に鳥は薪屋の置場に高く積んだ、薪の家の家根で心細げに鳴いてゐた。どうかして捉えたいと振り仰いでも、薪の屋根は徒らに高く、澄み切つた夕方の空が、薄ら寒く白々と光つてゐるばかりだつた。屋根に止つて、不安らしくあたりを見廻してゐた目白は、やがてまた心細さうな聲を残してどこかに飛んで行つてしまつた。

土藏の横に作つた葡萄棚の柵の間に長い竹竿をつき出して、その竿に登つて、よく熟れた果を選りながら、取つて喰ふことを覺えたのもその時のことであつた。僅か三四ヶ月の間であつたが若い細君の手許で暮した楽しい時日が、その砂糖屋の店に來てから一年ほどの中に、慌しい苦しい生活の爲に、がさ／＼に耗り減らされ、もみくちやにされてしまつてゐた私の心にどれだけの濕いを與へてくれた事だか判らない。私のその人に對する子供らしい戀愛は、たゞ常に彼女を胸に描いて楽しむと云ふこと以上に發展のしようもなかつたが、それでもその當時は、全く従順な平和な少年となつてゐた。しかし、愉快な事と云ふものは長く續かないものである。——若主人の使ひ込みが動機となつて、店の生活が著しくつゞましくされてしまつた。今まで店で食事をさせてゐた人足達にも、辨當代の若干を出すようになり、店員がたゞ一つの慰安であり樂みであつた晚餐會も廢止になつた。藏の前で荷造をしてゐる人足は、俵に乗つて走らせてゐる藝妓が通ると、後影を見送つて唾をはきながら、

『手前達のお蔭で、俺達まで苦しくなつたんだ怪物め』と店の方へ聞えよがしに罵つてゐる事もあつた。それで私のその香氣な、駄々つ子じみた生活も終りを告げて、自分ばかり戀してゐた若い細君のそばから引き離されて、再び小舟町の店の方に呼び返された。

然し樂しかつた三四ヶ月の生活は、私の心にその慌しい乾き切つた店の生活に對する嫌忌の情を深く起させた。私はこんな生活をしなければ、商賣の呼吸と云ふものは覺えられないものかと云ふ事に疑念を抱き始めた。それにその頃、私の家の方の生活にも色々な變化が起つて來た。總領の姉はその年の始め頃、水彩畫家であつた大下藤次郎の所に片附くし、次の姉も、小舟町の店からつひ近所の親父橋の袂で時計屋をしてゐた、半田と云ふ男の所に嫁に來てしまつた。急に娘を二人とも手離してしまつた母は、どれほどか心細く寂しく思つたことであらう。それにまた父の所からは、自分もこの氣候の悪い臺灣で、いつまでも家庭と離れて暮して居る事は飽々した。貧しくとも好いから子供達の顔を見ながら、生活の出来るようにしたい、と來る手紙毎に書いてよこした。父が東京に歸つて來れば、もう収入の道なくなる事は判つてゐたので、母はそれまでに私に反感を起させるほどつましくして残した貯金で、富士見町の方に小さな煙草店を買つた狭い家の二階は貸間にして下宿人を置いた。それで母はどうかして、一人の妹と二人の弟の教育をして行きたいと思つてゐる——と私の所にも手紙で云つて來た。

それは丁度、この店の生活に、どうかして別れを告げたいと思ひ初めた私に、母に對して、店から暇を取つて貰いたいと要求する、絶好の機會を與へた。實際に私は又た、商賣の呼吸と云ふ

ものは、何もこんなに苦しまずとも、覺えられるに違ひない事を信するようになった。それは小學校時代の同窓の友達でも、彼等の家で何か商賣をやつてゐれば、彼等は矢張りそこで働いてゐた。私にしても、家が商賣をしてゐないからこんな小僧に出たのである。けれども家で商賣を始めたとなれば、私でも矢張りそこに母と一緒に働きながら、商賣の道を覺えられない事はない。それに私はもう『いらつしやい』と云ふ事も『今日は何か御用は御坐いませんか』と云ふ事も、その他の何でも商人らしい口を利けるようになってゐる。私が鑑詰か何かを仕入れて、毎日麴町の方の邸町を歩いたつて、必ず自分の喰ふ事位、いやまだ店の儲けになるほどは賣つて見せるさうして私はかう云ふつらひ苦しい思ひをしなくとも、ちやんと立派になつて行けると信じた。私は長い事かゝつて、それを母に手紙を書いた。——どうか私の暇を取つて下さい。私は小僧に來てゐる積りで、本當によく働きますから——と。

然し母はそれを許さなかつた。——何事も辛棒が大切です。今お前がそこを出たら、辛棒甲斐のない、意地のない子だと云つて、親戚から笑はれるし、私までも悪く云はれなければならなくなる——そんな意味の返事を母はよこした。あゝ辛棒！昔の人間はこんな事ばかり考へてゐたのだ。自分の嫌いな事を辛棒して、人間が一體何になるのだらう。自分が好きでするならば、鹽

をなめて金を残す奴も本人には愉快である。彼ははたから見ると苦しいのを辛棒してゐるのではないのである。私にはまた、自分に好意のない親類の者位が笑はうと、そんな事は問題にはならないのだ。私の叔母は學校に通つてゐる頃も、私が怠けて成績の悪いのを意地がないと云つて罵つた。然し意地とは一體何なのだ。辛棒と同じように自分の嫌いな事を我慢してゐる事か。自分の本質に背き、徒らなる苦痛に堪える事、それが辛棒であり、意地であると彼等は考へてゐたのである。愚かな人々よ、彼等は彼等の崇拜してゐた偉大な宗教家も、實業家も、またその他の藝術家も哲學者も政治家も、凡て偉大になり得たものは、彼等の本質に忠實に生きたが故であると云ふ事を知らなかつた。さう云ふ偉大な人々が、自己の好む所に没頭するが爲に、その他の苦痛らしく見える事も彼自身には意に介するほどの事でもなかつたそれが、辛棒とも意地とも見えたのであるよなことは、母や叔母には、理解の出來ようわけもなかつた。——

母から許しは得られなかつたが、私の小僧生活に對する、嫌忌の情、その店の人々に對する反感は、たゞ日増に募つて行くばかりであつた。自體私と云ふ人間が、奇妙な性格を持つてゐて、何でも人から教へを受けると云ふ事が好きでなかつた。學校に行つても自分の好きな本を讀みた

い時に教師は算術を教へた。こちらが算術がやつて見たい時に、彼等は私に畫をかゝせた。そんな



な事が一體私に何の足しになるだらう。——それから後も私には教師とか、先生とか云ふものは出来なかつた。自分の讀みたい本を讀みたい時に讀み、研究したい事物に就て、研究したい時にすると云ふほかに學問の道と云ふものがあるであらうか。——私にはたゞ徒らに自分の自由を束縛され、理解のない小言を云はれ、智識に培ふ手段もなく、ガタ馬車の馬のように追ひ廻される生活が、どうしても堪えられないほどいやになつて來た。その頃の商人と云ふものは、前にも云つた通り店員を無智に育て、獨立の氣魄を奪ひ、馬鹿で野呂間で、主人の家を離れたら生計の道も立てられないような人間を作り上げるような目的の下に、一切の店制が組織されてゐた。敏活な商業上の才能は、店主だけが持つてゐれば好いのである。店員は彼れの命に従つて虚勢された馬のように従順に働けば好いのである。この二つが甘く合致した時に、その店は榮えて行くのだ。大店の大番頭とか白鼠とか云ふものは、この馬鹿げた意氣地なしの典型であつた。一生有達の上る機會のない彼等は主人に對しては幫間のように媚を呈し、目下の物に威張り散らすことに依つてその憂さを晴した。日本橋の大店の空氣と云ふものは塵溜のように汚れ腐つて、そこにはけちな陰險、奸佞、阿諛と云ふような微菌が、薄汚なく活躍してゐたのであつた。

私は砂糖の背負ひ歩きをしても、煙草を齧つて廻つても好い。どうかしてもう少し自由な明る

い楽しい世界に住みたかつた。その後も母に幾度か暇を取つてくれと頼んでやつた。けれども母はどうしても聞き入れてはくれなかつた。

かうして又た一年近い日がたつた。その間にも私は、雪の降る日に日本橋から九段まで馬車にも乗れない使ひにやらされて、富士見町にあつた家へ寄つて、母に暇を取つてくれと談判しても聞かれないので、泣く泣く店へ歸るとまた使ひが遅いと云つてどやされた事もあつた。意地の悪い清どんと喧嘩をして、火箸をその股に突き差して、大怪我をさせた事もあつた。焦立たしく物悲しい、渴き切つたような日がかうして過ぎて行つた。私の身中に眠つてゐた智識も、いつと云ふことなくだん／＼に眼を覺して來た。どう云ふ動機があつたと云ふのでもなく、いつの間にか私は、小僧をやめて、もう一度學校に入りたいと思ふようになってゐた。

十五の春に父は臺灣から歸つて來た。歸ると間もなく父は私を店に尋ねて來て、私にもつとどこか外の、會社風の所に入る氣はないかと尋ねた。その頃は、可笑な話だが會社と云へば銀行が代表してゐたくらゐる、まだ會社の勢かつた時である。小舟町の店の前には第三銀行があつて、飯田町にゐた伯父はその監査役か何かをやつてゐた。俵から降りて銀行の裏口から入る伯父の姿をちらりと見た時、私はかけ出して行つて挨拶して、自分はこゝの店にゐると云ふ事を話した事

がある。すると伯父は如何にも迷惑さうに『ふん』と云つたまゝ、急いで銀行の中に消えてしまつた。自分の甥が小僧をしてゐると云ふ事を彼は不名譽とでも考へたのであらうか、私はそれつきり、銀行と云ふものが、嫌いになつた。父にさう云はれた時も、銀行にでも出ると云はれるのではないかと思つて、會社なんかへ行くのはいやだと云つた。そして、自分をもう一度學校へやつてくれと頼んだ。然し父はそれには何とも答へずに、

『まあ、お前もよく考へておきなさい』と云つて歸つてしまつた。

一度いやだと思ひ出すと、私はどうしてもどんな犠牲を拂つても、その事を辛捧出來ない性質だつた。私は毎日どうして飛び出したら好いか、飛び出して後はどうすれば好いのか、そればかりを考へてゐた。そんな物思ひにばかり耽つてゐる私は、店の用を云ひつけられても満足に行ふよりは、佛頂面をする事が多かつた。雨の降る日に判取に歩くつらさを思つて、風のない天氣の好い日を選んで私は遊び半分に判取に歩いた。店の者の評判は日増に悪く、私は孤立の状態になりながら、どうかして暇を取る工夫に耽つてゐた。七年の年季中に暇を取ると、それまでの食扶持を拂はされると云ふ脅し文句も可なりに私を苦しめた。

どんな客が來てゐるときだが忘れたが、私は『勝さん』と云ふ番頭に云いつけられて店へ茶を

運んで行つた。その時は本當に私は悪意も何もなかつたが、茶盆を置かうとした時に後から、『信どん』と私の名を呼ばれたので、ついつかりと中腰になつたまゝ、茶盆を置いた。穩和しい男であつたが勝さんは虫の居所でも悪かつたのか、又は私の平素を憎んでゐたのか、

『何だそのさまは』と云ふが早いか、立ち上つていきなり私の頭を擲りつけた。私も癪にさはつたから、

『何をするんだ馬鹿野郎』と怒鳴りつけて二階に馳け上つてしまつた。私は實際残念だつた。その店がいやになり切つてゐた私に、それはまた一つの導火線ともなつて、斷じて家へ歸らうと決心した。そして自分の行李だけを片附てゐたのであつたが、そこへ勝さんは上つて來て、『俺が悪かつた』と謝罪つた。然しこちらはもう勝さんの問題ではないのである。黙つて荷を片附けると、私は店を出てしまつた。家へ歸つて何と云はうかと云ふ事も、可なり私の心を苦しめたが、日本銀行の石垣の前を歩きながら、どうしても學校へやつて貰ふのだと、心に決めた。さうして宿入に行くとき通りつけた道を通つて、四谷の家へ歸つた。父は臺灣から歸ると同時に、こんな小商内は不愉快だと云つて、煙草屋の店をやめて、再び四谷で暮してゐた。

その晩は父から、今の生活の苦しい事を聞かされ、それにまた私自身にも恐らく學才がないだ

らうと云ふような疑問から、妙な事を聞かされて、ほかに好い口があるまで辛捧してゐると云ふ變な理窟を聞かされた。私はその時、自分の親の家であり、親も現在の店に不満足なら、その店をやめてほかの勤め口の見當るまで家に置いてくれるのが本當だと考へた。氣の弱い母は、乳母に迷惑がかゝりはしないかと氣を揉んだ、私は乳母の迷惑を恐れて、自分の子の氣を察しない母にも不満足だつたが、二人から散々色々な事を聞かされたので、遂にその翌日父に連れられて店に歸つた。勝さんは一層閉口して父に謝罪つてゐた。

然したとへそれは小さな事にしろ、自己解放の喜悅の瞬間を味つたものには、一切が自分の意志にも感情にも反する、そんな馬鹿げた所にいつまでもちつとしてゐられるものではない。それから後ち一ヶ月ほどの間だと云ふものは、私はその店で、いやに他人扱ひをされながら不愉快な日を送つてゐた。番頭達ももう、餘り激しい小言を云はない代りに、何事にも無關心な、ゐてもゐなくつても好いと云ふような態度を取つた。どこまでも女々しく出来た人間共は、たゞ姑の嫁いびりのような方法に出たのである。こちらも何も彼もがいやになつて、どうでもなれと思つてゐた。それに人間の身體にも何か、ある一定の時期になつて、目覺しく發達すると云ふ事があるものか私は十五歳になつてから、めき〜と身體が壯健に頑丈になつて來た。それが私に云ひ知れない

自信を興へた。

とう〜最後の時が來た。初夏の日の夕方だつた。私は店の前を掃除してゐた。荷造りをした藁屑や砂埃がはきよせると箒の先に山のようにたまつて來る。埃をしづめる水を撒いてもごみの方が多い爲に水はすぐに吸ひ取られて、箒先から煙のようなほ〜りが直ぐにたつた。その時常どんと云ふ手代は、私のする事を憎々しうに眺めてゐた。彼はこの頃の私の行動に訝なからぬ反感を持ち、許すものかと云ふような氣概をいつも見せてゐた。それを知つてゐた私のする事は、確かに彼にからかふように見えたらうと思はれる。私も彼がちつと見はじめてからもう水を撒かなかつた。

『なぜ水をまかないんだ』と云ふ怒聲は遂に彼の口から洩れた。

『まいてるぢやないか』私はつんとして云つた。

『その言葉は何だ』と自分も車夫の俸のくせにしておいて、彼は自分の體面をでも傷けられたように罵つた。彼を振り仰いで見た私の顔には、嘲笑の色が漂つてゐたに違ひない。常どんは、『畜生』と足を揚げて蹴ようとしたが、私は素早く身をかわしたので、彼はやつと柱につかまつて、倒れさうな身を支へた。次に來るべきものは私にわかつてゐた、飛び降りて來られてつかま

れば、いやと云ふほど擲られなければならない。苦痛を忍ぶのも、希望のあつた中だけの事である。私は彼の一撃を喰はない中に、塵取に一杯になつてゐる藁屑と砂とを彼の顔に叩きつけた。『あつ』と云ふ聲を聞いたばかりで、私は夢中になつて逃げ出した。『九二年の間だ、つまらない苦勞をしたその砂糖屋、奉公と云ふ事が如何に愚劣で馬鹿けた何にもならないものであるかと云ふ事を、私の人生の門出に於て、第一に教へてくれたその砂糖屋とは、それつ切り別れてしまつた。その店はそれから後ち七年ほどして潰れてしまつた。若主人の豪奢な生活が、その財産を可なりいためてしまつた揚句に、日露戦後の會社熱に煽られて失敗したのが原因らしい。その頃の店員共は、今はどうなつたか判らない。それは年期奉公に辛棒し通した人達と云ふものも、必ず立身の出来るものと云ふものでもないこと、いや、普通にすら生活の出来る事を保證されない事を説明してゐる。然し一度び出發點を誤つた私も、迷宮のような流浪の生活に、更に一步を進めたのであつた。

## 第五章

幾度か云ふが、記憶と云ふものは、本當に不思議なものである。遠い以前に過ぎて來た日のことでも、それが昨日か一昨日か、或ひはまたかうして書いてゐると、つい一瞬の前につたことのようにさへ思はれる事もある。けれどもまたいくら考へても、その當時過ぎて來た日のことが既にもう自分と全く縁を絶つた暗黒な深淵の中に隠れ去つてしまつてゐて、思ひ出すすがさへ失つてしまつてゐることもある。私はそれほどに砂糖屋の店を嫌い、それほどに我家に於ける自由の生活を懐れてゐたのであつたが、その十五歳の夏の日を、如何にして暮してゐたか、不思議にも忘れ去つてしまつてゐるのである。

かう云つたら或ひはその當時、私がこゝに書くべく、自己を耻ぢ、人に憚るようなことをその當時行つてゐたのではないかと疑ふ人があるかも知れない。けれども私は無論その當時も、平凡な一個の少年に過ぎなかつたが、然し、世に誇るべきほどの事をした覚えもなければ、また、この後にも書かねばならない事を思ふたびに、自ら耻ぢ自ら悔ゆるほどの事をした記憶もない。十

三歳の年の事をあれほど多くあれほど鮮明に寧ろ煩多と思はれるほど記憶してゐる私にとつては、自分でも何だか不思議である。或ひはまた私はその長い間の不自由な苦痛に充ちた生活から離れて、一息ほつとついた爲めに、無我夢中で暮してゐたのかも知れないとも自分で考へさへもする。

二度目にまた飛び出して歸つて来たときには、父も母ももう餘り何か苦情を云はなかつた。それでももう一度店に歸れと父から云はれたとき、私は斷じて嫌だと斷つた。總領の姉の嫁いでゐた、義兄と逢つて話をしたのも、その頃のことだと思つてゐる。それ以前にも、父がまだ臺灣から歸つて來ない時分の事で母もまた煙草屋を始めなかつた頃だつたが、四谷の同じその家で、姉と結婚したばかりの彼に逢つたことはあるが、その時はたゞ初對面の挨拶をしたゞけであつた。義兄はその頃目白坂の上に、新しい畫室を建て、住んでゐた。畫室には大きな書棚があつて、丹念な義兄が古い雑誌や、近松物を合本させたのや、博文館の全集物、その他の色々な書物が一杯につまつてゐた。貸本家の本を漁りつくした私は、その書棚から本を出しては讀み耽るのが、彼の所へ行く唯一の樂みだつた。

義兄と私とは、性質が恐ろしく違いもするし、またどこかそりが合はない點があると云ふのか

又は氣が合はないとでも云ふのか、その後も彼れに色々世話になつた事もあるが、彼も私を餘り好かなかつたし、私も彼には餘り敬服もしなかつた。殊にいつでも感情を殺して、理知的に冷たく振舞はふとする態度、しかもその癖に恐ろしく自己の趣味にばかりとらはれてゐる、感情以外の生活は出來ないのであるが、變にぎごちない彼の生活が、私には何となく親みが持てなかつた。先方では常に私のことを、だらしのない不器用な人間だと云つて罵つてゐた。妙に粗雑な事の好きだつた私には、器用と云ふことを蔑視する傾きがあつた。器用を尊重する義兄に對して、それだけでも何となく反感を持つた。女のように細いすんなりとした指先で、小面倒らしい仕事を事務的にすらくと片づけて行く、小取廻しの好い義兄の仕事を捌く有様を、私はいつも變な眼で見つてゐたのであつた。

然し、その當時の彼は私の一族にあつては何と云つても唯一の新しい智識者であつた。私は彼れに自分ももう少し勉強をしたいと云ふ希望を打ち明けた。そして父にそれを容れて貰へるようになつてくれと云ふ事も頼んだ。義兄はたしかその時分に出來た、大倉商業へでも入つたらどうか、あすこなら、年限も短いし、卒業後も就職の道も早からうからと云ふようなことも云つた。私はそれでも好いと云つた。そして自分はもう、その學校に入れるように思ひ込んで、生れて初

めて勉強と云ふものをし始めたのであつた。私が二年間小僧に行つてゐた間に、同級の友人はもう中學の三年になつてゐた。私はどうかして彼等に後れまいと思つた。母に頼んでカシヨナルの獨案内を買つて貰つたり、女學校に通つてゐたすぐの姉から、幾何の教科書などを借りて来て、眞夏の暑い日を、入學試験の準備に耽つてゐた。今もなほお話にならないほど不完全であるとは云へ、たとへそれだけでも、自分の生命に智識を取り入れることが出来、そして今でも矢張りそれによつて、幾多の刺戟や興味を感じつゝ、自分の貧しい生活の内容を、多少でも豊富にするこゝとが出来たようになつたのも、その時になつて漸く一步を踏み出し始めた努力のお蔭であつた。私は私の親戚共や周囲の人間が何と云はうとも、砂糖屋の店を飛び出したと云ふことが、私の全生涯に取つては、重要な意義のあることだつたと思つてゐる。若しさうでなかつたら、私は矢張り、その頃の同輩と同じように、運が好くつて一軒の小賣店の主人となり、人生には砂糖の値段の高下と、うまくその商機に投じて行くことより外に、價值も意義もないように思ひ込んで、仕入の方法、顧客の注意を吸収する方法、など、云ふことに没頭してゐたかも知れなかつたのだ。一切の興味と意義をたゞそのみの中に認め、そのみに依つて生きてゐられると云ふことも、或ひは幸福であるかも知れない。より多くの事を知つた爲めにたゞ一つの事に没頭することも出来ず、懷疑と迷路と懊惱の中に、一生を苦しむ通すと云ふ事は、或ひは不幸な事であるかも知れない。然し豚や猫の幸福な生涯と、よし苦痛が多くとも人間の生活と——もうよさう、こんな事は書かなくとも餘り判り切つた事だ。それでたゞ私は、金持にもなれなかつたし、高名な文學者ともなれなかつたし、それが爲に苦痛の多い凸凹の岩道を裸足で歩くような年月を過して來たが私としては砂糖屋を飛び出したと云ふ事を、自分で喜んでゐるのである。

義兄はその後ち、父に私の希望を話してくれたようであつたが、それはとう／＼容れられなかつた。その理由を私に話してくれるとき、家にはもう私を教育するだけの金がないと云ふことが第一のことらしく話されたが、私の考へではまだその頃は、私一人位を學校にやる事は必ずしも出来ない事ではなかつたらしい。私は自分の友達で、貧しい武力屋の倅や車夫の子供で、中學にも通つてゐる人達のことを考へた。或ひは彼等の父親が、餘り社會から虐待され輕蔑されて暮して來たために、どうかして自分の子供だけは、立派に育て、相當の者として社會に出したいと云ふ要求であつたのかも知れなかつた。それともまた自分の子供の才能を餘りに過信した結果かも知れなかつた。然し、何れにしても私の家より貧しい彼等すら、自分の子供を學校に通はすことが出来るのである。私だつても行けない理由はないと思つた。さうして今度は直接に幾度か父に

迫つた。

父も最初は教育費のない事をしきりと云つた。然し餘りしばしば私が自分の要求を主張した時に、『お前の小學校時代の成績を考へて見なさい。お前なんかとても學問をしたと云つて、何も出来るものではない。それよりも、何でもどしどし働いて、金でも儲ける事を考へなさい』

と云はれてしまつた。父の眼には私は、商賣の呼吸を覺えるような性格に映つたものであつたのだらう。そして小學時代の成績を云はれると、私も全く弱つたが、

『これからはきつと勉強しますから、どうか學校へやつて下さい』とそれでも押を強く頼んだ。

『駄目ぢやと云ふたら駄目なのぢや、それにお前はもう自分の妹や弟の事も考へて見なければならんぢやないか、私はまだあれ達も教育して行かなければならんし、お前のような見込のないものをどうして學校へなんかやつておける』と父は冷かに云つたのであつた。

子供の前途に對する見込！ 父の見た眼が正しかつたか、間違つてゐたかは、私にとつては何うでも好い。然し、この見込と云ふことが、その後もどの位私の心に色々な事を考へさせたか判らない事だ。後になつてまた書くであらうが、私がどうしても商業生活がいやになつて、學問をしない、と云ひ出した時も、私はこの見込の一語で撃退されてしまつた。更に、父の助力を仰がないで、自分一人で勉強すると云つた時も、それも父は許さなかつた。——一體親は、自分の子供を生んで置いて、縁日で買つた植木か何かでもあるように、見込があるから肥料をやる、見込がないから手入もしない、と云つてそれで済むものであらうか。私は植木屋が客に買ふことをすめたようにして、父に買はれて來たものでもなければ、自分で生れる事を要求したものでもない。父と母との偶然の戯れが、私と云ふもの、存在を齎した。そして私は又た一個の人間として、その原因が非目的であつたにも不拘、凡ての人と、父と母とも同じように、或る要求を持ち、目的を持ち、或る事を苦み、或る事を喜んでゐる。私に見込がないと云ふばかりで、親は私の要求、私の目的を、それほどに拒む権利があるのだらうか——私はそんな事をいつも深く考へさせられた。父にして見れば、苦しい生活の中から學費を出して、見込のない私を教育すると云ふことは無益な苦痛を増すばかりのように考へたのであらう。が、私にして見れば私の欲する道に進みたかつたのであつた。

私はどう云ふ風にして、その一夏を過したか、はつきりした事は憶えてゐない。その頃はもう遊ぶべき友達もなく、唯だ一人してほつねんと、自分の身の定まらない妙な不安と學校に行くことを許されない失望の中に、つまらない日を送つてゐたようだつた。そして秋になつて、入學の

季節が過ぎてしまつたとき、私はもう父に頼ることを断念しなければならなくなつた。

父はまた私が毎日爲すこともなく、ぶら／＼してゐるのが堪らなく不平のようであつた。そして、新聞を讀んでは私の行くべき奉公先を探してゐた。一日増にもつれて行く、父と私の間の感情の不和になるのを見て、母はいつも苦んでゐた。父も流石に自分でも年をとつたし、私ももう十五歳になつてゐるので、昔のように擲られるような事はなかつたけれど、朝の起きようの遅い事から、顔の洗ひ方までも彼は苦情を云ひ通した。二人は仇同志で、もあるように反目して暮してゐたのであつた。

その中に父は新聞の廣告を見て、私に日本橋の大澤と云ふ羅紗屋に小僧に行けと云つた。私は最初拒んだが、母も兎に角行つて見ろとすゝめるので、父と連れ立つて出かけて行つた。その店は室町にあつた。羅紗問屋の主人と云ふのは、血の冷たい、利益にばかり敏い、猶太人のような人として、私の記憶の中に残つてゐる。最初に父が私を連れて行つた時に、彼は

『奉公と云ふものは大切のものです。私は田舎から出て来て奉公をして、東京には伯父一人だけしか親戚と云ふものもなかつたが、その伯父は私が藪入に歸つて行くと、東京へ来て甘い物なんか喰ひつけては決して出世をしない。お前ももう麥飯の味を忘れたらうからと云つて、藪入の日

には麥飯を喰はせ、歸る前には脚氣にならないようにと云つて、三里に灸をすへてくれました。

子供と云ふものはその位にしてしつけないければとても駄目ですから』と利益の中で叩き上げて來た、下らない彼の哲學を父に聞かせてゐた。嚴格好きの父にはそれが餘程氣に入つたらしく、自分の子供を人間として認めないこの主人に、

『尙分よろしく』と頼んで父は歸つて行つた。

然し私はその店の何も彼もが氣に喰はなかつた。細君は何でも婦人病にかゝつてゐるとかで、いつもつまらない暗い顔をして暮してゐる。主人は夜になると大びらで、妾の家へ出かけて行く。店の中はがさ／＼して、麥飯哲學の主人の喰はせる不味い物の爲めに、小僧は餓鬼のようになつて、一つの甘喰を奪ひ合つて喰べてゐた。私は出来るだけ怠けて暮した。使ひに行けば遅く歸り、腹が減ると勝手に飯を喰つた。晝間でも眠くなると、二階に積み上げた羅紗の上に横になつてぐう／＼眠つた。さうして丁度十日目位に、私の晝寢をゆり起した主人は、すぐにその場で私に家へ歸るように云ひ渡した。私は黙つて荷物を纏めて家へ歸つた。父は怒つて、

『謝罪つて歸りなさい』と最初に云つた。

『あんな店はいやです』と私ははつきり断つた。



『生意氣なことを云ひなされるな、私の命令を聞かんのなら、家へも置く事は出来ん』と云つて父は私を脅やかした。

『出来んと云つたつて、茲以外に僕の家はないのですからね』と私も憎々しく答へた。誰も一度はその頃の年になれば考へる事であるが、——私は何も自分が生れたくつて、父や母に頼んで生んで貰つたのではないのである。それなのに生んで貰つた恩を思へとか、教育して貰ふ恩を思へとか云はれるのは、どんなに心外な事であつたか判らない。まして此の頃の父は、私の進みたいと思ふ道には進ませもしないで、丁度何か厄介者でも拾ひ込んで來たような態度を常に見せるのだ。父の云ふ言葉なんかは、私にはもう何の權威もなくなつてしまつてゐた。勝手にしろ、と云ふような烈しい憎悪ばかりが、私の心の中にはだん／＼に強く焼きついて行つた。——私はふてくされたようにさう云ひ返すと、その儘自分の部屋だつた狭苦しい三疊に引取つてしまつた。變な事を云ふようだが、かうしてその時の事を考へてみると、私は少年の時から、妙な形ちをした部屋ばかりに奇妙に縁が多かつたように思はれて仕方がない。父によく押込められて、抓りあけられて苦しんだ、三疊の部屋と云ふのも陰氣な妙な部屋だつた。父が臺灣へ行つてしまつてから住んでゐた家の玄關には、モザイクの色硝子が、ケバ／＼しい陰鬱な蔭を疊の上に落してゐたのが、

私の頭に重苦しく残つてゐる。叔母の家の裏に越した時には、一段低くなつた隠れ座敷のような部屋があつた。そして今この私の生れた家と云ふのにも、玄關の右手の扉を開けるとそこに半疊敷ほどの板敷があつて、その次の板戸の奥に三疊敷の狭い部屋があつた。窓の前の庭の土は、いつも白くきら／＼と光るほど焼けてゐて、その向ふには古ほけた物置と、古い薄の大きな株が、丸く高く茂つてゐるばかりであつた。私は毎日その古ほけた物置と薄の葉のそよぐのを眺めて、陰氣臭い少年の幽鬱に閉ぢ籠つて暮してゐたのである。父も母も私の兄弟達も、私がつと小さかつた時、三疊の部屋や薄暗い離れの家で物悲しい顔をして、何と云ふ事もなく考へに沈み込んでゐたり、赤や紫の硝子の色に、少年の心を悲しませたり、今またかうしてその離れ切つた部屋の中で、たゞ一人あてもない物思ひに耽つてゐるような事は、少しも知らなかつたのだ。彼等の眼には子供と云ふものは、豚のように無智で、自分の性格や社會的の生活などと云ふ事に就て、何にも考へてゐない者としか映らなかつたのだらうか。それでなければ、親と云ふものが、あれほど傲慢に僭越に、自分の希望や興味やまた功利的の目的を、自分の子供に強る道理はないのである。その癖彼等は自分が勝手に作つた子供の才能が、自分等の目的に副はない事を憤つたり、或ひはまた、たゞそのみに於て、極めて銳利であつたり進歩したりするように希望して、自分の

主張や命令には、羊のように穏和しく従はしめようとするのである。子供も自分と同じように、血の通つてゐる人間であると云ふ事を忘れてゐたのかも知れないのだ。だから結局彼等の希望通りの子供が出来上つたとしたならば、要するにそれは、豚のように頭が空つほで、羊のように従順なものとなつてしまふのだ。然も彼等は尙その上に、才智の煥發や、大膽や勇氣のある事を望んでゐるのだ。何と云ふ得手勝手な事だらう。私は今こんな事を書いて、もう老齡事に堪えない両親に、今更見せてやつたつて何にもならない彼等の反省を促さうとか、または之れによつて彼等の無智で利己的であつた事を攻撃して復讐の快感を味はうとか云ふ考へは毛頭ないが、然し今も尙ほ私の周圍にかう云ふ親達を數多く見るたびに、私はさうした彼等の態度に限りなき憎惡を感じるのだ。――

それから後と云ふものは、食事の時に顔を會はせても、父は黙つて私を睨みつけてゐるようになつてしまつた。私もぢつと黙つて父の怒りに對抗した。重苦しい妙な氣持がいつでも家の中に漂つてゐた。そして母一人がそのために苦しんでゐた。それは私にも一番苦しい事だつた。

その話があつてから半月ほど後のことである。或朝例の通り不愉快な食事が終つてしまふと父は、

『今日の新聞に三井で小僧を募集してゐるから行つて見なさい』とまた命令的に云ひ出した。今の三越呉服店のことを、その頃はまだ三井とか駿河屋とか世間では呼んでゐたのである。然し私はどう云ふものか、小さな時から呉服屋だの小間物屋だのと云ふ商賣が好きでなかつた。どこへ行つてもさういふ店には顔色の青白いぐにやくした男がゐる。私は何よりもそれが嫌いだつたので、

『僕は行きたくありません』と簡単に答へてしまつた。その時は父も不機嫌らしくそのまゝ黙つてゐた。けれども、それから後も父は私に三井へ入る事を頻りとすゝめた。父の意見では、同じ奉公に行くなら、あゝ云ふ大きな店が好き、將來社員となつても立派に暮して行く事が出来るし、また商賣さへ覚えれば獨立することも出来るだらう位のことであつた。同じ福澤主義でも大伯父は、學者とか藝術家の事を長袖と云つて輕蔑するし、官吏や會社員などと云ふものは、いくらえらくとも結局雇人に過ぎないつまらないもので、たゞ獨立した商人や工業家や農夫のみが理想的生活だと云ふ風に、偏つてはゐるが徹頭徹尾獨立主義を持つてゐるが、長い間だ官吏生活を續けてゐる父のそれは、官吏となる代りに會社員になれと云ふ位にしか過ぎないものだつた。

父は私が自分で嫌いだと云つてゐるにもかゝはらず、いつの間にか彼自身で三井へ出掛けて行

つて、小僧監督に會つて、入店の手続きとか昇級法とか云ふものを聞いて來た。そして三井では夕方に店をしまへばもう小僧の用事はなく、自分の思ふが儘に勉強でも何でも出来る事や、月に一回の公休日には外出して遊べる事だの、二三年後に中店員となれば、夜學にも通へるようになる事などを話した。それからまた現在の何とか部長である藤村と云ふ男も小僧から叩き上げた人で、その給料の額はどれ程になると云ふような事を殊に力強く話して聞かせた。今ならばどんな商賣でもどんな店でも月に一回位の公休日はあるようになってゐるが、その頃の小僧の生活に、公休のある事と夜は勉強の出来ること云ふ事が、どれほど自由なものとして私の耳に響いたか判らない事だつた。然しそれも後になつて考へて見れば、日の目も見えない、土牢の中で暮してゐるようなあの店としては、格別有難い待遇でもなかつたのであつたが——さて父はそんな事を話してから、

『それに今三井で募集してゐる子供と云ふのも、十三才以上十五才以下と云つてゐる。お前も來年は十六になるから、さうすれば中年者で、何處でも使つてくれないようになるだらう』と最後に云つた。中年者——と云ふ言葉は、それまでにも私は幾度か聞いた言葉である。どこの店でも大抵一人位は中年者と云ふのがゐて、その者は、いくら才智めはしがすぐれ、目端めはしが利いてゐても、子

飼からの店員とはどこか違ふ、つまりいつでも何か輕蔑されたような特殊の待遇を受けてゐたのであつた。私はさういふ人達を幾人か見たが、自分がいまその中年者にならうとしてゐる事を、明らかに聞かされた時、云ひようのない慌しさと、薄暗い變な氣持を與へられてしまつたのだ。

今から考へて見れば、十五とか六とかいふ年齢が、この老人と壯年者によつて占領されてゐる人生に於ては、如何に弱小なものであるか、また凡ゆる事象に對して本當に眼も開けてゐなければ、自分の衷に潜んでゐる生命の進むべき道が発見されなかつたとて不思議でない事もよく判る。それにまた、此の人生に對して、眞面目に本質的に生きたいと思ふ人間にとつては、職業上の中年者など、云ふ言葉が何の權威にも價ひしないものである事も、自分の本質に即した物にぶつかるまでは、餓えようがかつえようが、仆れるまで暗い道を手探りにでも進んで行くべきが本當だと云ふ事もよく判つてゐる。——けれどもその時の私はそれだけの自信を持つには餘りに小さく弱かつた。——中年者になると云ふことを父から聞かされてから四五日の間と云ふものは、變に胸苦しい焦燥の中に、あてどもなく思ひ惑つて暮してしまつたのであつた。

町を歩くと、中學の制服を着た得意らしい同窓生の姿がすぐに私の眼に映つた。そしてそれは私の心に子供らしい焦立たしさを餘計に強くするのであつた。彼等はあゝして、丁度工合の好い

汽車にでも乗つて行くように、滑りの好いレールの上を靜かに走つて行くのだ。さうしてその前途には、凡ゆる都合の好い機會とか、立身や幸福の道が彼を待ち受けてゐるように私には思はれた。然し十五になつてもまだ何一つ取りとめて覺えた事もなく、徒らにぶら／＼してゐる私の前途には、茫漠とした霧のような不安があるばかりで、どちらに進んだら好いかも判らないのである。もう中年者と云ふ聲に脅かされてゐるのである。私はいつまでちつとかうして、自分の家で不愉快な生活を送つてゐても、父が學資を出してくれなければ、どうして自分を育て、好いのかも判らなかつた。その中にだん／＼年を取つて、愈々本當の中年者となつてしまつたら——と思ふと、幼稚な私の心はたまらなく心配になつて來るのであつた。

私は遂に父に屈して、三井の小僧となる事に決めてしまつた。——家庭に於ける父との不和な日常の生活も、早く家を出たくなつた原因であつたが、夜は自由に勉強の出來ると云ふ事と、月々一回の公休日のあると云ふ事で僅かに心を慰めながら、私は三井の小僧となる事に妥協してしまつたのだ。これは確かに私の生來の、意志の弱い意氣地のなさ加減を暴露してゐる、自分にとつてはいやであり、人に對しては耻かしい事ではあるが、その時の私として見ればさうするより他に道はないように思はれたのだ。そして、こんな風にして私はまた、色々な原因から自分が嫌い

な小僧と云ふ、日々の生活には比較的心配はないが、身體にも精神にも自由の得られない因人的安易な世界へ、再び逆戻りをしてしまつたのであつた。

はつきりとは憶えてゐないが、何でも秋の終りのような日であつた。私はとう／＼父に連れられて三井の小僧となりに行つた。今はあゝして堂々たる洋館の建物となつて、時流の魁を誇つてゐる三越も、その頃はまだ半分は土藏造の昔ながらの陰氣な呉服屋で、半分が洋風の陳列を始めたばかりといふ、徹と香水の匂ひの交り合つたような、奇妙な感じを與へる店であつた。さうしてその丈けの高い店の建物と、隣りは風月堂か何かであつた高い建物の間の審の底のような薄暗い所に、だ／＼つ廣い土藏造りの家があつた。階下の廣い部屋は晝の間は店員の食堂であつて、夜は小僧の自修室となつてゐた。私はその二階の、濕氣臭いだ／＼つ廣い部屋の隅で、子供監督の落合と云ふ男と會つて、色々小僧の心得を聞かされたのだつた。

父はその男と二言三言話をするとさつさと歸つて行つてしまつた。部屋の中は警察の留置場のように陰氣で殺風景で、前に坐つてゐる監督は、ニッケル縁の眼鏡をかけた冷たさうな男であつたが、私はもうはじめて母に連れられて本所の砂糖屋に行つた時のような寂しさも悲しさも感じなかつた。

監督は私に少時、今まで何をしてゐたかとか、學校はどの位行つたかとか云ふような事を尋ねながら、眼鏡越しに私の舉動をぢろ／＼眺めてゐたが、

『ではこつちへ來ると好い』と云つて、店の奥の倉庫へ連れて行つた。私はそこで、倉番の役を云ひつかつたのであつた。洋館風に建てられた倉の二階には、丈けの高い書棚のような棚が一杯に並んでゐて、中には色々な呉服物がぎつしりとつまつてゐた。店へ來た客の注文に應じて、その棚の反物を板にのせて運ぶ小僧達は、棚の間を忙しさうに走り廻つて、客の望みに應じたものを探し出してゐた。私達の役と云ふのは、店から戻つて來た品物を、それ／＼の種類に區分して整理する事であつた。

私はそこでまた、自分の先輩である子供一級と云ふ肩書を持つた桑次郎と云ふ小僧から店員の符牒を第一に教へられた。この店では子供の階級が一級から四級まで別れてゐること、自分より一級でも上の者の名を呼ぶ時には、名前のあとに『デン』と云ふ呼聲をつけること、同級もしくは以下の者は、『ドン』と云ふこと、そのほか、お客の事を『ゼンシ』、便所を『エンボウ』、食事を『キザエモン』と云ふのだなど、聞かせてくれた。それで私達は食事を知らせる鈴ベルが鳴ると、『キザエモンに行つて來ます』と云ひ、便所に行きたくなると『エンボウに行きます』と云つて

出掛けるのであつた。

呉服屋の番頭面の嫌いな私には、倉番は好い役だと思つて喜びながら、それから後ち一と月ほどの晝の間を、倉の二階でほんやりと暮してゐた。その時分からそこだけは、洋館風に作られて店の二階の陳列場よりも一段高くなつてゐた倉の中は、店先の雑沓とはかけ離れた世界のように、いつもひつそりと静かになつてゐた。そして硝子越しに流れ込んで來る秋の日ざしを遮る爲めに、樺色のカーテンを下してしまふと、高く広い部屋の中は、赤黄い陽氣な光で一杯になつてしまつて、棚一面にぎつしりとつまつた様々な織物から放つ不思議な香りが部屋一面に立て籠めてしまふのだつた。縮珍織、厚板のような帯地の類ひからは、妙に重苦しく艶めかしい匂ひを放ち、羽二重、鹽瀬、八橋などからは、美しい肌のような高雅な柔かい香が立つてゐた。赤や青の染料の匂ひが強く鼻を打つ友禪は、矢張り若い娘を思はせるのであつた。そのほかにも、職人とすれ違つたとふと思ふような紺の匂ひ、壁土のような薩摩紺、それ等の香りの立ち交つた中にぢつと眼をつぶつて立つてゐると、美しい女の人達が音も立てずに歩く中に、自分の身が埋もれてゐるよ

うな氣さへするのであつた。私はよく、明々とした藏の隅に立ちすくんで、さうした幻覺の快さに耽つてゐる事が多かつた。恐らく私はそんな風にして、もう全く眼覺めかゝつて來た異性に對

する要求を満足させてゐたのであつたらう。

單調な藏の中の仕事に飽きて來ると、私は何かの用事にかこつけて、店の方へ出掛けて行つた。廣々とした店の中には、脚の高い、横から見るとピラミッドのような形に見える陳列臺が幾重にも幾重にも、整然と並べてあつて、壁の際には派出々々しい友禪の大巾ものが、鈍張のように長くかけてあつた。朝から晩まで、その陳列臺の間を數知れない多くの人が通つてゐた。そしてどの人々も、硝子の蓋の中で光つてゐるお召織に見惚れたり、壁際にある友禪の色彩に心を引かれながらも、不如意な懷中をかこつて通つてゐたのであらう。凡ての設備が、たゞく一度びそこに足を踏み込んだ人達の慾念を、飾り立てた品物の上にはばかり凝固させようとするように出來てゐた。そして歩き疲れた人達は、やがて二階の休憩室におづくくと珍らしげに入つて行くのであつた。そこには僅かな物には寛容な心持を見せるように、皿の上にビスケットが盛られ、子供の中から選り抜いた、色白の美少年が如才なく茶を運んでゐるのであつた。休憩室の前には、その頃はまだ世の中に珍らしい屋上庭園があつて、庭の中の小さな池は鴛鴦が泳いでゐた。

店に來た人達は、飾り立てた品物や、新奇な店内の有様に心をそゝられて歩き廻つてゐる中を、私はまた、若く美しい人を、人を探し出して眺めながら、自分の心を樂ませてゐるのであつた。然し考へて見ると、多くの呉服店の番頭など、いふものは、恐らくみんなが、たゞこんな想念にばかり浸り込んで育つて行つてしまふのであらう。さうして出來上つたものと云ふのは、世間見ずで臆病な癖に狡猾で、女共にこびる事ばかりを憶え込んだ、妙に淫蕩なこすつからい顔つきが、生白い色をしてゐるように、表面ばかり物優しいけちな陰險な奴になつてしまふのだ。それだからその頃の此の店全體の傾向には、新らしい時代の魁になつて進まふと努力してゐる、鋭い進取的の氣風が雜然として現はれてゐるのであつたが、その店で働いてゐる店員の間には、薄暗い土藏造りの店だけが特別に持つてゐる、江戸の名残が濃んで腐れたような黴臭いお店者根性がまだ一杯に漲つてゐた。私はこゝでもまた女の腐つたようなお店者の典型をさんざんに見せつけられてうんざりした。然し考へて見れば、それも結局は時代の產物で、店員といふものを成るべく無氣力に木偶像のように育て上げて、獨立とか進取とかいふような氣魄をすつかりなくしてしまふように、長い月日の間にでつち上げて來た組織の犠牲者と思へば、氣の毒にもなつてくるわけである。がたゞ時々、凡ての出口を塞がれてしまつた、若い人達の精力が、異常に挑發されて發達した遊蕩の方に驀進して、店の品物を誤魔化したり、使ひ込みをやつたりして尻尾を出す者も月に一人や二人は必ず出て來るのであつた。しかし流石に店の方でもかうした組織に對する、

皮肉な面當てのような人達に對しては、刑事上の罪人とするような事はなかつたが、何と云つても長い間だ、厚ほつたい壁の中に圜はれて世間知らずで過して來た人達は、一度び店から出されば全く自分の能力のない事を暴露して悲惨な境遇に陥らなければならなかつた。私がゐる頃にも、外廻りと云つて、有數な得意だけを廻つてゐた藤倉と云ふ若い店員は、店にゐる間は可なり眼先の利いた利けものらしく、若い者の中でも相當に巾を利かせて前途のある男らしく見えてゐたが、千圓とか二千圓とかの使ひ込みが露見して、此の店を追はれて一月ほど經つてから、江戸橋の上を牛乳の箱車を引きながら、落魄者らしい顔をして通るのに出會つた事もあつた位だつた。私はそんな人を見るたびに、自分の前途に何か暗い不安な豫感を抱かずにはゐられなかつた。

然し夕方になつて店の入口の扉が閉されて、陳列臺の間を歩く客の影がだん／＼減つて行き、やがて蔵に運んで來る品物もなくなつてしまふと、私は漸く自分の好きな生活に歸ることが出来るのだつた。廣々とした小僧部屋の中には、明るい電燈が澤山ついてゐた。多くの小僧は各自に自分の小さな手文庫をその電燈の下に持ち出して、自分の好きな書物を読み耽つたり、或ひはまた遠い郷里の親に手紙を書いたりしてゐるのである。私はその店に來てからは、もう砂糖屋にゐた頃のように、母への手紙を書かなくなつた。少し位のつらい事があつても、月に一回の公休日

と、朝二時間の自由な散歩と、夜の讀書が私の心を慰めてくれたからである。けれどもそれと同時に、この自分の性格に少しもそぐはない店の生活と、自分の前途に向つて進む道が自分にもまだはつきりしない事が私の心を苦しめた。然しそれは、母に向つて嘆いたり訴へたりする事柄でもなく、たゞ自分自身で何とか決定しなければならぬ事なので、私は之れを書物に向つて求めて行つたのであつた。その頃に私は一番多く、偉人の傳記とか立志傳などを讀み耽つた。それからまた遊學案内など、云ふものまで讀んでみては、自分を何ういふ方面に育てたら好いのかを考へたのであつた。然しさうして手探りで、暗い道を進んで行くような眞似をしてゐる中にも、私は矢張り、小説を主として何か知ら文學物にばかりだん／＼自分の心を引かれて行くようになつてしまつてゐた。

二ヶ月ばかりの間といふものは、私はたゞかうして、薄暮の道を行くように心に何の定る所もなく暮してゐた。朋輩の間に親しい友達と云ふものも出来なかつたが、十五にしては可なり柄の大きくなつてゐた私は、以前のように古株のものから虐待されるような事もなく、たゞ新入の小僧の中では一番成績の悪い不良兒として監督から取扱はれてゐるだけであつた。涙の滲むように苦しい事もなく、飛び立つほどの嬉しい事もなく、それでゐて、何處か微かな不安の影が心の底

にじみ／＼とこびりついてゐるようなつまらない日が過ぎて行つたのであつた。

生活もさういふ風にだらけてゐて、これと云ふ目的もなく、たゞ空々と日を送つてゐたのであつたが、私はまたその頃は夜になると、虱と云ふあの不愉快な虫の爲めに、鈍い痒さで苦められてゐた事が、あの呉服店に於ける僅かな月日の間の重要な記憶として残つてゐる。そして取つても取つても取り切れないほど、あとからあとから執念く湧いてくるあの、もぞ／＼とした鈍い感じを與へるいやな虫が、その初めの頃の一二ヶ月の生活の徴象のようにさへ自分には思はれるのだ。私の聞いた所では、その時分店にゐた古顔の番頭共も、小僧の時分には矢張り同じ部屋で同じように虱の爲めに苦められたのだと云ふ事だつた。だから恐らくこの薄暗い風通しの悪い留置場のよくな、小僧部屋が建てられたはじめの頃から、虱は發生してゐたのであらう。さうして長い年月の間、入れ代り立代り來た小僧達の皮を噛み血を吸つて、幾百代か何千代か知らないが、彼等の系統を綿々として長く絶えないように引きながら、どれほど多くの小僧達を苦めたか知れないのだ。

私はあの店に入つて三日目位の夜になつて、はじめて自分の襟筋にあの蟲を發見したのであつた。それよりすつと以前に、私がまだ家にゐて駄々をこねて暮してゐた頃、一度私のサル又か何

かにあの蟲がたかつてゐたのを、洗濯の時に母に發見されて、家中の大騒ぎとなつた事があつた。けれどもその時は母がたゞ私の着物に虱がゐると云つたゞけで、幸ひに私はあの蟲の姿を見なかつた。けれども私はその時以來あの蟲が大嫌いになつてしまつた。今かうして虱のことを憶ひ出し、虱と云ふ字を書きながらも、膚が鳥肌になるほどに私はあの蟲が嫌いである。それから後も貧乏して苦しい暮しをつゞけはしたが、私はたゞあの蟲が嫌いなばかりに、風呂に入り洗濯をして、清潔だけは保つて來た。垢そのものゝように薄い不透明の色をして、もぞ／＼と鈍く這い廻るあの蟲は、何と云ふいやな不愉快な蟲なのだ。私は蛇より毛蟲より蛆より南京蟲よりも、あの蟲はたまらなく嫌いである。

襟筋がぞく／＼するので何氣なく手をやつて、その蟲を自分の身體に發見した時、私の氣持の悪さと驚きとは本當に口にも出來ないほどだつた。そして最初は自分一人の身體にこの蟲が發生したものと信じ切つたので、人知れず裸體になつて着物の検査をするのに、どれほど骨を折つたか知れなかつた。私は實際、店の客と云へば貴族や富豪にのみ限られてゐたような、まだ今ほど一般的にならなかつたあの時代のあの店の物の中に、虱が湧いてゐるようなどゞは夢にも信ずる事が出來なかつたのだ。そんな事を考へるのは、世の中の表裏を知らないと云ふものか、或ひはま



た、つまらない事大思想であるかも知れないが、それにしても、何と云ふ皮肉な事だらう。世の中に流行の魁を誇り、貧しい物に取つては一生を通じての稼ぎ高にも近いほどの高價な織物を店頭飾り、金持や貴族共がこの店に来るのは自分等の特權であるような顔をして入つて来て、あの品、この品と注文して出させる店で、それを持ち運ぶ小僧の身體には萬邊なく虱がたかつてゐたと云ふ事は、——私はそれを考へるとまたたまらなく滑稽を感じる事さへあるのだ。

けれどもまあ幸ひにして、令嬢が取り上げて眺めてゐる友禪縮緬の荒い凸凹の織目の中に薄鼠色の身體を埋めてもゐなければ、夫人の手にした羽二重の地の上を輕快に歩いてゐると云ふような事も、私のゐる中には聞かない事だつた。もしそんな事があつたらばどんな大騒ぎになつたであらう？ さうして毎晩々々あの不愉快な蟲に苦められてゐる私達の部屋を、もつと風や光線の通りもよくし衛生的な設備をして、虱の發生するような恐れのないようにしようなどとは少しも努めないどころか、虱に苦んでゐる小僧達の苦みは顧みもしないで、たゞ徒らに表べばかりの店先の裝飾に腐心してゐる重役共の態度を見ると、どうかして彼等の大切な「客」の眼に此の不愉快な蟲の姿を止めさせて、店中の大騒ぎにでもなるようなことがあれば好いと、どんなに心に願つた事だつたか知れなかつた。

「俺がもし店へ出るようになったらば、客の前で虱をほろ／＼落してやるのだが」と私は幾度もそんな事を考へた。けれども遂に私は店へは出されずじまつたので、その空想を實行する事が出来たのか出来ないのかは自分でも判らずじまつてしまつた。

それにしても、初めてその蟲を發見してからの私の周章さは、自分でも可笑い位であつた。どうして私自身の身體から、こんな蟲が發生したのか、それとも新しく入つて來た小僧達から、うつたのなら、今に小僧達はみんな虱に苦むように殖えるであらうと、後になつて見れば、本當につまらない事まで心配した。さうして人知れず自分の身體にそれとなく注意してゐたのであつたが、然し、それから後幾日もたゝない中に、その心配もつまらない餘計なことであつた事がよく判つた。それは私が自分の襟筋に、あの不愉快な蟲を發見してよく／＼始めてから二日目位の事であつたらう。私達何十人と云ふ子供が二階の廣い部屋で枕を並べて寢てしまつてから、その時はもう電氣も消えてしまつてゐたのだが、私は床の中でもぞ／＼とするあの蟲に惱まされて、いつまでも寢つかれずに苦しんでゐた。すると私と頭を突き合せて眠つてゐた、古株の正雄と云ふ小僧が、不意にむく／＼と起き上ると、電氣をばちりとひねつて、床の上にもちよ／＼と坐つた。私はちつと眠つたふりをして、何をするのかと彼の様子を眺めてゐると、彼は寢衣を脱いで襟元

から背筋の方を丹念に撫でながら、『ほつり、／＼』と音をさせて、悠々と虱狩を始め出した。私は自分ばかりにたかつた虱でない事を思ふとほつと安心した。そしてそれと同時に私は、自分と枕を並べてゐる多勢の仲間の布團や寝衣、それから晝間着る着物にまで、數限りもなくたかつてゐる蟲の姿を思ひ浮べると、毛孔の一つ一つがぞく／＼するほどにぞつとして、いきなり素裸になつて、冷々とした夜の大氣の中へ驅け出して行きたくさへなるのであつた。けれども私の隣にゐる者は、そんな事はまるで感じもしないように靜かに寝てゐるし、枕元では丸裸になつた小さな小僧が、夜着の裏を電氣の光に透しながら、まだ悠々と蟲を漁つて、時々『ほつッほつッ』と爪の間でつぶれる蟲の音をさせてゐる。私はたまらなくなつて、ひよつと首を上げながら、

『正雄デン、君にも澤山たかつてゐますか』

といきなり尋ねた。すると不思議な事には今まで悠々と落付いて蟲をあさつてゐた正雄が『えつ』と云ふと、さも耻かしいような顔をして、それでも両手を脇の下の方に廻して背中をほりほりと搔いたと思ふと、いきなり立ち上つて電氣を消して、黙つて布團の中に入つてしまつた。私は何となく正雄に悪い事をしたような氣になつて、首を縮めて黙つてゐた。暗闇の中でも、自分の顔が赤くなつたように思はれた。

それから後は、夜になつて床に入る事は私にはもう何となく不愉快な事になつてしまつた。晝の間立ち通しで働いてゐる爲めに、いつとなく疲れが出て眠る事は眠つてしまふのであつたが寝る事と喰ふ事より樂みがないと云はれる、小僧の樂みはそれで奪はれてしまつたのだ。以前に砂糖屋にゐた頃などには、夜になつて『寝ても好い』と云ふ許しの出るのが、どれほど待ち遠しく樂しい事であつたらう。何一つ自由と云ふものゝ與へられてゐない小僧の生活には、頭の中で考へるだけの空想にも、晝の間は何か知ら眼に見えない制肘が加はつてゐる。たゞ一人店先にほつねんと坐つてゐて、家の事や樂しい事に自分の思ひを凝して思はずうつとりとなつてしまつてゐるとき、

『おい信どん、何をほんやりしてゐるのだ。さつきから何度も何度も呼んでゐるのにほかんとしてるやがつて』と劍突を喰はされると、霧のような空想の世界は一堪りもなくたゞき壊されて、頭の心までうづき渡るような不愉快な思ひをしながら、いやな苦しい現實の世界にしぶ／＼と引き戻されてくるのであつた。そして樂かつた世界を破られた口惜しさと、つまらない仕事を云ひつけられたいま／＼しさに、眼に見えない繩で々も縛られたような境涯がしみ／＼と悲しくさへなつてくる。

けれども眠い眼をこすりながら、夜になつてからは分けても進みの遅く思はれる時計の針を眺めながら、漸く待ちかねた時間が来て、『寝ても好いよ』と云ふ許しが出ると、はね飛ばされたように立ち上つて、帳場格子や机を片付けて、布圍をそこに敷くと同時に、勢ひよく潜り込んだ時の樂さは、何と云つて好いだらうか、絶間なく砂利の上を引きづり廻されてゐるような、苦しいつらい日々の生活の中に、たゞ僅かに許された樂園なのだつた。疲れ切つた手足を誰れはゞかる所もなく、のう／＼と伸す事が出来るのも、たゞその蒲團の中だけだつた。一日の中に起つた苦しかつた事、可笑かつた事などを、考へ直し思ひ返して、それからそれへと悠々と自由に思ふがまゝの空想に浸り込んで行く事が出来るのも、たゞその蒲團の中だけの事であつた。さうしてやがて、疲れ切つた眼は靜かに閉ぢ、甘い眠りにさそはれて、無心の世界に入つて行く。空想さへ自由に描けないほど、身も心も縛られ切つた小僧の世界にある楽しい時と云ふものは、たゞ夜の間の情のように與へられた短い睡眠時間だけのことだつた。

それなのに、いまこの店へ来てからは、私はたつた一つのこの限りない樂みを奪はれてしまつたのであつた。夜になつて机に向つて好きな本に讀み耽つて、晝間の下らない生活も、自分の前途に對する何とも知れない不安も漸く忘れ切つてゐる時に、消燈の鈴を鳴らされるともう私は、

床に入つてから眠りに落ちるまでの苦しい不愉快さを思はなければならなかつた。——寢衣の襟、夜具の縫目の間などにひそんでゐたあの蟲は、身體のぬくみが漸く布圍にしみ渡つて来る頃になると、不透明な鼠色の身體をもぞ／＼と這ひ出させて、身體中をぶつ／＼と喰ひ廻るのだ——何も彼もが鈍く出来てゐるその不快さが、堪らなく私を惱ませる。何と云つたら好いだらうか、それは丁度死身になつて争ふほどの相手でもないが、と云つて忘れ果てもさせないほど頭の中にこびりついてゐる奴の面のような憎らしさだ。——不自由な小僧の生活の中に残つてゐた、たつた一つの樂みを奪つてしまつた、この小さな不愉快な蟲を、私はその後もこの店にゐた間、呪い通してゐたのであつた。

それから後私は、虱紐と云ふものを買つて身體につけて見た。色々な方法で此の蟲を防がうと試みても見たが、何十人とゐる小僧の身體にも根深く巢喰つてゐる無数の虫の襲撃を、この位の事で自分だけ免れようとした所で、それは結局無駄な努力だと云ふ事を悟らされただけの事だつた。それで遂に私も、心には絶間なくこの虫を呪いながら、また指先に觸れた不運な奴は憎々しさうに潰しながら、矢張り之の不愉快な夜の運命に屈從するより他に道はなかつた。

私達新入の小僧達は、それでもよく虱の事について苦情を云つたので、或晩監督は小僧全部に

命令して、虱狩をさせた事があつた。その晩は十三四から十六七になる五六十人の小僧全部が、消燈前一時間ほどになつて、大きな夜具包を一つづつ、電燈の下に抱え出して、一齊に虱狩をやり始めたのであつた。皆なは黙つて熱心に垢じみた夜具の袖を引くり返したり、寢衣の縫目を押し擴けて、のそ／＼と歩いてゐる虫を指先でつまみ出した。監督はやがて、五六人の者の間に小さな薬壘にアルコールを一杯入れたものを一つ宛渡して、取つた虱は潰さないで、その中に入れるように云いつけた。憎らしい虱を取つた時に、指先に力を籠めて潰すことは、復讐心を満足させる點に於ては愉快でもあるが、自分の身體の垢と肉で作られてゐるような、白っぽい鼠色の肉が爪先にべとりとつく事はまた餘り氣持の好い事でもなかつた。それよりも、この強烈な液體の中にぶち込んで、浮きつ沈みつものがき廻つて苦しむ様子を、硝子越しに眺める事が私にとつては、はるかに愉快であり、完全に復讐心を満足させる事なので、私はすぐに取り上げた一疋を、壘の中に投げ込んだ。そして残忍な豫感を持つて、透明な液體を電燈の火影に透して眺めて見たが、鈍い虫は、壘の底に沈んだまゝどんよりとして短かい手足をちよ／＼二つ三つ動したばかりで、苦しそうな様子も見せずに、靜かに動かなくなつてしまつた。どこまで行つても張合のないつまりない虫である。その後私は人間の中でもこの虱のような奴によく出會つた。同じように殺

したいと思ふほど憎くもないが、それかと云つていつでも間斷なく頭の心にこびりついたようにぢり／＼と、こちらの感觸を苦しめる奴だ。こんな奴は殺しても矢張り二三度手足をばた／＼させて、もがきもせずに死ぬかも知れないのだ。けれども死ぬ場合にまでばた／＼する事は、敵に快感を與へる事だと思ふと、死ぬ時だけは、虱のようぢつとして香氣らしく死んだ方が好いとも時々考へる。——何しろその晩私達は、小さな壘に取つた虱を、大きな薬壘に集めたところ、底の方一寸位の厚さと云ふものは、鼠色の虫で黒くなつてゐた。これが私達の肉を喰ひ、垢を嘗めてゐた奴と思ふと、何だか胸の悪くなるような氣さへしたのであつた。

こんな風にして私は、三井に行つた初めの二ヶ月ほどは、倉庫の二階と、夜の自修室と、寢床の虱との間でぶら／＼と過してしまつた。恐らくこのほんやりとした二ヶ月ほどの月日の間に、私の全生涯を決定すべき何物かと、私の身體の中でだん／＼に形ちを成しつゝあつたのであつたらうが、私自身はそんな事には氣も附かず、たゞ漠然とした不安と摸索の中にその日その日を送つてゐたのであつた。

かうして二三ヶ月ほどの日が経つ中に、私と一緒に入つた新しい小僧達は、倉庫の中で一應反物の地柄と名稱を記憶してしまふと、各々店へ出されて持場を定められた。小僧達にも亦色々

な撰擇があつて、人の好い穏和しい番頭につく事を喜ぶものもあれば、ハイカラな外國人係りの下になつて有頂天になる者もあつた。可笑しな事にはその小僧達も木綿部に行く事は餘り喜んでゐなかつた。それは恐らくそこに集るお客の服裝が悪く、また如何にもくすんだ年寄じみた人達ばかりがやつて來るので、彼等の眼を樂しませる事が尠かつた爲めであらう。愈々その部署が定められ出して來ると、新しい小僧達は毎晩部屋の間で一塊りとなつて、自分のついた場所のことや、番頭達の性格などをこそく噂し合つてゐた。けれども私はその仲間にも入ることは出来なかつた。と云ふのは、あとから聞いた話であるが、監督は私を店へ出すには不適任と認めてゐたと云ふことであつたが、考へて見るとその頃の私は、膝に燒焦しの穴の明いた着物を平氣で着て歩いてゐたり、口を利くのも可成り亂暴であつたから、どうも呉服屋の小僧には實際適しなかつたものだつたに違ひないのだ。そんな譯で私は、色の生白い番頭にこき使はれる事もなく、物欲しさうな客の機嫌を取るような場にも出ず、いつまでも倉の中に残されてゐたのであつた。

しかし、流石に自分と一緒に入つた子供達が、それ／＼の場所について漸く一人前になつたらしく取濟した顔をしてゐるのを見ると、自分を落伍者らしくみじめな者に思ふような氣がしない事もないではなかつたが、そんな時には、

『俺はなにもこんな店の番頭なんかにならうと思つてゐるのぢやない』と云ふような風に思ひ變へて、強て超然としてしまふようにしてゐたが、それかと云つて自分で自分の前途に對する見極めのついてゐない事が、私の心をまた暗くするのでもあつた。

そんな風にしてゐる中に、私はその薄暗い不愉快な部屋の二階で、ほんやりとした十六の春を迎へてしまつた。大晦日の晩も、砂糖屋にゐた頃のように徹夜をすることもなかつたし、眠い眼をこすりながら、初荷のあとをついて歩くような苦しいこともなかつたが、のんびりとした三ヶ日の樂みもなく、夜一夜嬉しさに眠ることも出来ないような藪入りの樂みもなく、茫然としたつまらない正月の日が過ぎた。そしてその月の十五日頃になつて、私は初めて倉から出される事になつたのであつたが、それは綿部と云つて、小僧達には唯一の鬼門とされてゐたところであつた。

綿部の主任と云ふのは、最上と云ふ四十一二の男であつた。生粹の江戸兒で、どこか利かない氣の強いところのある男で、上役にお上手を云ふでもなく、自分のいやな事は誰にもいやと云ひ切るし、癪にさわれば誰でも罵倒するような風があつた爲めに、彼の同僚は大抵相當に出世して、樂な生活をしてゐたのに、彼は名前だけは綿花部の主任と云ふ、隱居役のような所へ押し籠められて、店の人達とはまるでかけ離れた仕事をさせられてゐた。

名義だけ主任であつても、地位は同僚や後輩より恐ろしく劣つてゐる事が、彼の性癖を餘計にこぢれたものとしてしまつたものであらうか、氣質は一本氣の涙もろい男なのに、いつも恐ろしく疝が昂ぶつてゐるように、青味が、つた冷かな白眼を大きく見張り、絶えず唇を神経的にびくびくと動かせてゐるその顔を見たゞけでも、堪え切れない不平の中に暮してゐる不満が全體にありあり浮んでゐるように思はれる位だつた。彼の部下になつた小僧は、どんな者でも、彼の氣に觸れないで暮す事は出来なかつた。そしてひよつとでも彼の怒りに觸れたが最後、疝高い聲と共にいきなり鐵拳を飛ばして來るので、小僧仲間では、最上のキ印と緯名がつけられて、彼の部下になる事は、一種の刑罰のように皆が恐れてゐた。そのキ印の部下に私が廻される前には、萬次郎と云ふ小僧がその下についてゐた。萬次郎は小僧仲間でも、誰にも好かれてゐた、目から鼻へ抜けるような、利口な氣持の好い小僧であつた。それだから流石の最上も、萬次郎だけは滅多に擲るようなこともなく、自分の子供のように可愛がつてゐたと云ふことだつた。ところがその萬次郎は、正月になつて七草も漸く終つた頃、俄かに後頭部の頭蓋骨の内部に腫物が出來て、大學病院に入院してしまつた。

萬次郎がゐなくなると、今度は誰が綿部へ廻されるかと云ふことが、小僧仲間を脅かした。その時は都合よく古顔の、何と云ふ名前であつたか忘れたが、西洋人のような顔をした小僧が、萬次郎不在中の代理として、最上の所へ助けに行く事となつたので、皆はほつと安心したような顔をしてゐた。然しそれから後ち十日ばかり経つと、萬次郎の腫物を切開しなければならぬと云ふ通知が來て、監督代理の林と云ふ男が立會に出掛けて行つた。そして林は夕方になつて、萬次郎は手術を終ると間もなく絶命したと云ふ報せを持つて歸つて來た。それと同時に林は、手術當時の有様を簡單にスケッチしたものを持つて來て、小僧達に見せてくれた。それにはふだんから形ちよく出つばつてゐた萬次郎の後頭部の方だけが、如何にもそれらしく描かれてゐた。眞黒な頭髮の中の一部分だけを剃つた所が、青々と色どられてゐる。そして更にその青い中を切り開いて、明らかに出來て來た肉の赤い色の下には、もういやに白い骨が見えて、磨ぎ澄したチゼルが血にまみれて突き立つてゐる。チゼルを持つた手の後ろの柄の下には、褐色の不恰好な槌の頭がぬつと出てゐた。林は手術の時のことを色々話してから、

『この槌でこつん／＼と叩きながら、骨を削つて穴を明けて行くのだ。その叩くたびにこつん、こつん、と云ふ音がこつちの頭にも響いて來て、それはもう何だかぐら／＼として倒れさうになつてしまつた』と繪を指しながらまたつけ足した。私もその時は何だか、自分の後頭部がづきづ

まするような氣持がした。そしてそれから後は、頭が一寸痛んでも頭蓋骨の下に何か出來たのではないかと、幾度かびく／＼した事を憶えてゐる。

萬次郎が死ぬと、綿部の小僧は明らかになつた爲めに、代理はよされてその後へ私が廻されてしまつた。初めての朝、最上のところへ行くまでは私も可なり不愉快だつた。それに先代の萬次郎が變な死方をした事も、可なり私の心を苦しめたし、疝癢持の最上に使はれる苦しさも色々考へた。そして最後には——なあに向ふで擲つたら、こつちでも擲つてやるばかりだ——と心に決めて、最上のところへ出掛けて行つた。

然しそれはもう私が心配するほどの事もなく、その時は最上の方で却つて全く悄氣切つてゐた。綿部の隣には、地方掛りと云ふのがあつたが、そこにゐる連中が最上の顔を見ると、

『最上さん、萬次郎もとう／＼死んぢやつたね、ありや何だぜ、君が時々擲つたんで、それが原因で腦の中に何か出來たに違ひないぜ』

など、云つてからかつてゐた。最上はそれを聞くと、

『何を云つとるんだ』と云つて強て平然として笑つてゐたが、それでも彼の顔には矢張り、かすかな恐れと苦痛とがその度毎に現はれてゐた。正直な最上はきつと、萬次郎の死因がひよつとしたら自分の打撃にあつたんではないかと考へてゐたのだらう。さうしてそれが爲めに随分苦んだに違ひない。私に時々萬次郎の噂話をする時でも、彼は口を極めて萬次郎をほめるのが常であつた。さうして彼はどんなに怒つても、私を擲ると云ふ事は、彼の下にゐる間に一度もないほどに變化してしまつてゐた。

萬次郎の死んだお蔭で、私は第一に最上から擲られることを免かれた。それに主任一人、小僧一人と云ふこの綿部の仕事は、いつも大變暇だつた。平素の仕事と云ふのは、店の客から、婚禮の贈り物として、あの赤と白の眞綿で三角の變な形ちをした物の註文が來た時に、最上と私と二人して厚ほつたい眞綿を斜つかけに引つ張り合つてうんと伸して、ボール紙の上に巻いて、あの形ちを作るだけのことだつた。その用事のない時には、私はたゞほつねんとして机によりかゝつてゐるだけの事である。さうしてだん／＼馴れてくるにつれて、なるべく遠くの机に腰をかけて、自分の前には綿の包をうんと積み上げて、最上の方から見えないようにしておいて、懐ろに隠しておいた本を出して讀むことを覚えてしまつた。キ印の配下につくと云ふことも、こんな風で私には、必ずしもいやな事ばかりあるのではなかつた。つまらない事ではあるが、私はまた綿部へ行つてから、ひよつとした動機で、眞綿の屑を自分の肌へつけておくと、虱を退治ることが出來

ることも發見した。どんな動機で小さなマリのような綿屑を、自分の肌につけたのだか、今ではすつかり忘れてしまつたが、これは私がそれ以前に、白い毛布の中へ這ひ込んだ蛋が、ふさふさとした毛に蔽はれてしまつて逃げることも出来ないでゐるのを見た事があるので、そんな事から考へついたのであつたかも知れなかつた——この偶然の試みは非常に成功したのであつた。二三時間たつてから私とその綿屑をひよつと取り出して見た時には、蜘蛛の巢のように細くねばつたあの纖維のかたまりの中へ、ぬくみを慕つてやつて來た奴が十疋ほど、眞白な綿の中に鼠色の斑点になつてゐた。虱はそのもちのようになつて、鐵條網よりも密に強い糸の中へ入つたが最後、もがけばもがくほど手足をからまれて、遂には身動きもならないようにさへなつてしまつてゐた。何のことはない、蜘蛛の化物にからまれた、八戒よりも間拔けたぶざまな姿である。私は根氣よく、繭のように奇麗な綿の中から、汚い虫をつまみ出しては一つ一つひねりつぶして、夜の樂みを奪つた者に對する復讐心を満足させた。その後ち長い間だこの綿屑を入れてゐる中に、收獲はだんく減つて、漸く一疋か二疋位づゝしか網の間にかゝらないようになつてしまつた。そしてそんな時にはなんとなく物足りないような氣さへするのを、自分でも不思議に考へてゐた位であつた。

綿部へ入つてから半月ほどすると、店の陳列場を擴げる爲めに、私達はそこから更に奥の計算係りの部屋に同居させられる事になつてしまつた。地方掛りと云ふものも、店にはまるで交渉なしに行はれる仕事であつたが、それでもそこには小僧達が飛び廻つてゐたり、店の方で小僧を呼ぶ聲高い番頭の聲が聞えて來たりする爲めに、どこか呉服屋らしい所にゐるように思ふには充分であつた。けれども今度の計算係りと云ふのは、店の奥のすつと奥の、簞の底のような所にあるのであつた。日々の店の賣上げから仕入れまでの、細かい出納の計算をする爲めには、靜かな所でなければならなかつたのであるが、それにしてもその部屋は餘り暗く靜かだつた。東と南の方の廊下の向ふには、生糸や筵包の入つてゐる大きな蔵で圍まれてゐて、僅かに光線の通ふ西の方にも、一間と隔らないところに店藏が突つ立つてゐた。私達は幸ひにも、その西側の窓のそばに机と椅子を置くようにされてゐるが、それでも少し暗い日には、晝の間から裸火の瓦斯を灯さなければならなかつた。それにその部屋に集つて來る計算の係員と云ふのは、店先にゐる店員とはどこか空氣の遠ふ智識的の分子の多い人達であることが、第一に私の心を喜ばせた。彼等は朝その部屋にやつて來ると、十分か二十分茶を飲んで何か話をして、それから机に向つて黙つて算盤をはぢき、大きな帳面に丹念に數字を記入してばかりゐた。それだから部屋の中はいつも簞の



奥のように静かにひつそりとしづまつてゐた。

私の方の主任である最上も、その部屋に越して來たてには、喋舌る對手もないので退屈らしく暮してゐるが、やがて彼も机の上に新聞を擴げて讀んで見たり——それは一般の店則に背く事だつた——徒ら書をして見たりして無聊を慰めるようになってしまつた。これはやがて私にも、公然と本を讀む事が出来るようにしてくれることゝなつた。それで私はキ印と人の呼ぶ最上の下についた事を悲むどころではなく、二時間づゝ與へられてゐる朝の散歩から歸つて來ると、待ち兼ねたように計算係りの室に飛び込んだ。さうしてまだ係員の誰もが來ない殊に静かな時の中に、無暗に本を讀んでばかりゐたのであつた。

いけなかつた事は一月の末になつて、小僧全體に夜學の教課を與へられる事が始まつたのであつた。それ以前にはこんな事はなかつたさうであるが、どんな頭の工合の悪い奴が考へ出したものか、終日吳服物の中に埋れて、眼にはその模様や柄柄ばかりを眺めさせられ、鼻には反物の包ばかりを嗅ぎ、耳にはその名ばかりを聞かされてゐる子供達が、夜の間だけでもほつと自分に返る時に、今度はつまらない薄記だとか裁ち方だとか算盤だとか、どこまでも反物の匂の抜け切れないものをつめ込ませてくれるのだ。が然し之れは先方にすれば店員には人間と云ふものゝ必要

はなく、骨の髓まで友禪や双子の匂のしみきつたものばかりが入用だからの事であらうが、かうして自由の時間を奪はれた私には、尠からぬ不平があつた。私は夜學の時間が始まると、机の上で居眠りをする事によつてその臭氣から逃避した。その結果は、二ヶ月目の終りに試験のあつた時に、裁ち方は一つ身物の背を何尺に切るのかも知らず、薄記は下手で汚い數字を書くのがいやで失敬し、算盤だけは得意であつたがそれも面倒なので答案を出さなかつた。斯くて私は再び小學校に於けると同じように、揭示場に成績不良の告知を貼り出された。尤も揭示場のお厄介になつたのはその時が初めての事ではなく、煙草をのんで見つかつたり、小説を讀んだり、買喰ひをしたり晝寢をしたりした爲めに、數回禁足の惡名をそこに暴露してゐたのであつたが。

そんな風で三月になつて小僧の昇級のある時も、私一人は遂に依然として子供四級の舊位地に留めておかれた。けれども私にはそんな事はどうでもよかつた。綿部へ入つてから三月ほどの間に、私の志望はだん／＼に文學の方へ固まつて行つた。いつどんな本を讀んで、どんな時にぴたりと形を成したと云ふのでもないが、いつとも知れないその短時日の間に、私はもうすつかりとその方に進むべく、自分の志しを決めてしまつてゐたのであつた。その頃私は休暇の度毎に、義兄の家に行つて二階の書棚にある本を無暗に引きづり出しては耽讀した。そして歸りに必ず何

冊かの本を借りて來た。兄の家には私の讀むのにふさわしい色々な本があつた。武藏屋本の近松物も揃へてあれば、帝國文庫も揃つてゐた。古い太陽の合本で、オセロを讀むことも出來れば、スタンレーの探險記のあつた何とか叢書でトルストイの小説も讀んだ。判つても判らなくても私はたゞ讀みたいまゝに無暗に讀んだ。

文壇では矢張り紅葉や露伴が一番盛名を馳せてゐたが、私はどう云ふものか、紅葉よりも露伴が好きであつた。露伴のものと云へば、小説から、枕頭山水のような記行文に到るまで悉く傾倒して讀み耽つた。そしていつの間にか誰れよりも露伴を崇拜するようになってしまつてゐた。然しこの硯友社や露伴のものが多く出た、春陽堂だの嵩山房だので代表されてゐた思潮のほか、新聲社によつて代表された、新しい文學の啓蒙的出版によつても私は多分に養はれたものであつた。一つには露伴、紅葉の作品は、貸本になつてゐる爲めにこれを讀むのにも便利であつた故であらうが、新聲社の出版目録を眺めては、次から次へと買つて行く事が私には何よりの楽しみだつた。恐らくその頃の新人だつたであらう、天隨、姑射など云ふ人の白露集と名づけた美文集の廣告文に動かされて、朝の散歩の度毎に、幾度か新聲社を起しに行つたこともあつた。簡潔で剛毅な男らしい、それでゐてどこか虚無的の響きのあつた嶺雲の文章は、私の最も愛讀したものであつた。

前にも云つたように、どんな書物を讀んでどんな風に感化され、どんな機會に自分が文學者になりたいたと心に決めたのかは、はつきりとした記憶がない。けれどもこのいつの間にともなく固まつて行つた私の希望は、少時の間にすっかり根強く心の底で固まつてしまつてゐた。けれども私はそれを、大叔父や父に相談して見たところで、無論駄目だと云ふ事を知つてゐた。大叔父は晝かきの義兄を長袖だと云つて輕蔑してゐるし、父が許さないと云ふ事も直覺的に知つてゐた。長い間だ綿部の薄暗い部室の隅で、ほんやりとして店倉の鼠色の壁を眺めながら――どうしたら自分は文學者になることが出来るだらうか、苦學？弟子入？どんな道を踏めは好いのか、さうしてまた文學者になつたらどんな生活が出来るのか、と考へるときには必ず金儲けに没頭する商人とはまるで違つた貧しい生活がすぐに私の頭に浮んで來た。然しその當時の私には、貧富の事はてんで問題にならなかつた。たゞ自分が好きである文學に従つて、美しい自然に浸り、美しい幻影を追つて暮してさへ行ければそれで好いのだと考へた。それは一つにはその頃の文學が多く自然の美を歌ふことに努めた影響を受けたのかも知れない。それからまた、幼い時から色々と家庭のいやな葛藤を見せつけられ、苦しい小僧の生活を續けたりして來た爲めに、知らず識らずの間に

この小ウルサイ人事の交渉を厭ふようになってゐたのかも知れなかつた。が然しまたそれと同時に、私の道徳的要求も、どうにかしてこの自分の志望を肯定しようと苦しんだ。年少の時から自分の周圍に藝術に依つて生活する者を持たず、人生はたゞ、官吏となるか、軍人となるか、商人となるか、學者（これもその頃は主として先生となる事位の考へより外に出でなかつた）となるかしなければ、此の世に生活して行く事も出来ず、またその權利もないようにばかり教へこまれて來た私は、どうにかして文學のみによつて生きる生活を肯定し、そしてまたそれによつて生きたかつた。文章は經國の大業、と云ふような文句も多少は私の心を喜ばせた。けれども私の欲してゐるのは、經國を目的とするような文章の道ではなかつた。美は人生に於る最高の何とか、と云ふような文句も私の心に僅かな慰めを與へてくれた。然し私の欲してゐたものは、もつと確かな、もつと安心の出来る道だつた。藝術と人生の間の争ひは、かうしてだん／＼に芽を伸して來た。そして正直に云へば、今でもその問題はまだ解決がつかずに残つてゐる。無論形は様々に變つて來てゐることであるが――

けれども、何と云つても判断の根底をなすものは、善惡よりも好惡が先に立ち、そしてまたそれがより強い決定を與へる。私はどうしても文學者になりたかつた。呉服屋の番頭になつて、こ

の沈滞した空氣の中に一生を送ることなどは、考へるだけでもいやであつた。もつと潤いもつと深い自然と人生の中に出て行きたかつた。そこには私達の見たこともない隠れた美しい物があるに違ひない。さうして私はそれを發見し、それを歌ひたいのだ、と云ふ氣持ばかりが私を支配した。そして遂にもうそれ以外に進む道はないと心に決してしまつた時、私は義兄に會つて、それとなく文學者になりたい希望をほのめかした。

義兄はその時私に、田山花袋の事を話してくれた。彼は花袋とはたゞほんの知合ぐらゐの間柄であつたらしいが、花袋が兄の家にちつと閉ぢ籠つて、獨學で外國語の自修をした事や、また稀に見る努力家であることなどを話して、

『今にあの人はえらくなるだらうよ』と云つてゐた。その頃の花袋は『ふるさと』は餘程前に出してゐたが、まだそれほどに名を出してゐるなかつた。有名になつた『重右衛門の最後？』もそれから二三年後に出たものと思つてゐる。

明らかに頼んだことではないが、義兄がさう云ふ先人のことを話してくれるのは、私の志望に必ずしも不賛成でないと考へた。けれどもまだ、それほど親しみもなかつた義兄に自分の事を頼むのは何となく氣後れがしたので、店へ歸つてから私は義兄に手紙を書いた。それには自分がど

うしても文學者になりたいこと、それに對する勉強の方法はどうして好いか判らないが、兎も角誰か先輩の家の書生にでも世話をして貰ひたい、それもいけなければ自分でどんな苦學をしても好い。自分の家もあゝしてだん／＼貧しくはなつて行くが、父母もまだそれ程に行きついた年でもないから、自分が彼等に迷惑さへかけなければ、自分は自分の目的にだけ進ませて貰へるように話して貰ひたい——と随分長い手紙を考へては書き、考へては書きして、胸を躍らせながら、二日ばかりかゝつて戀文でも書くように、誰れにも見られないように苦心して書いた。さうしてそれをポストに入れた時、自分があゝして繪も描いてゐるし文學者に友人も多いあの義兄は、一議もなく私の希望に賛成してくれるだらうと考へた。

義兄から返事の來るまでの間を私はどんなに希望を持つて待ち焦れてゐたやら。義兄が誰か先輩に話してくれるか、或ひは父を納得させて、自分の希望通りに歩けと云ふゆるしを得たら、私はすぐにこの風だらけの不愉快な店から暇を貰つてしまふだらう。さうしてそれから、と私の空想は文學何とか法によつて得た智識を追つて進んで行つたり、たつた一人で苦學したり文章を學んだりする自分の姿を描いて見たり、それからそれへと果しもなく擴がつて行き、さうしてやがて夢のような美しい自然の中に溶け込んでゐる自分の姿に酔ふ事によつて、頭がほうつとなつ

てしまふのだつた。けれども自分勝手な美しい空想も長くは續かなかつた。四五日すると義兄からの返事が來た。それには——お前が文學を愛すると云ふことは決して悪いことゝは思はない、けれども自分の家庭を考へて見ろ、両親の老ももう既に近よつてゐるし、お前のあとには弟妹も澤山ゐる。両親が彼等を教育することが出来なかつたらお前がしなければ誰がするだらう。文學者の生活と云ふものは、自分の知る限りに於てはそれは悲惨な苦しいものだ。それでは兎ても弟妹の教育などは及びもつかない、だからお前は彼等の犠牲となつて先づ自分の身を立てる事を考へろ、それから後ち文學でも何でも自分の好きなことをやるが好い。それに藝術と云ふものも、職業的な玄人になれば型にはまつたようになつて墮落するものだ。本當に文學を愛するなら、矢張り自由な素人の地位にゐる方が遙かに好い——と云ふ意味の事を懇切に書いてくれた。

義兄は非常に常識を尊重する人であつた。最もいま考へて見ればこれは、その當時の一種の思潮でもあつたように思はれる。コンモンセンスと云ふ英語が何よりも第一に尊ばれ、雑誌などでも英國流の家庭本位の生活法を説くことによつて社會に清新の氣をもたらさうとしてゐる時代だつた。堺枯川などでさへまだ『家庭何とか』と云ふ雑誌で、しきりとその氣風を鼓吹してゐたのも此の頃のことゝ思はれる。堺の友人である山縣五十雄とか、そのほかかう云ふ人々を多く友人

に持つてゐた義兄が、爾く常識本位であつたと云つても左まで咎むべきことではないかも知れない。そしてまた、この常識鼓吹的の啓蒙教育によつて——義兄も悪趣味排斥の爲めに水彩畫講習會などをやつてゐた。つまり藝妓買ひをやめて水彩畫でも樂めと云ふ大變健全な目的を持つてゐたものだ——一般の思潮もたしかに幾分か進んだには違ひない。

けれども義兄のこの常識的な忠告も、本當の事を云へば餘り常識に富んだ話ではなかつた。第一に、如何に努力しても人間は自分の好かない道には餘り進歩するものでないと云ふことを彼は忘れてゐた。次にまたこの世智辛い世の中では、自分一人の身を立てる事ですら、仲々困難であり、然もそれが學校を出たり好い手蔓があつても非常に大變な事であるのに、小僧上りで二十二三の年輩までに、自分の弟妹を教育するようにならうなどは、それこそ一層困難な事だつた。況んやそれが自分の欲しない道に進む者にとつては殆んど不可能な事であつたのだ。最後に藝術は、素人の方が好い、などと云ふ事は、こゝではまあ問題にするのはよしておく。私が最近に叡山にゐた時に、京都の大學の生徒が私にくれた話の中に、二高を出てから哲學科に進みたいが生活の事を考へて躊躇してゐた生徒が、河上博士の所へ『哲學科に行きたいが、哲學では仲々飯が喰へないから、どうしたら好いかと思ふ』と相談に行つた時『人間の干乾と云ふものはまだ

ないようだ』と博士が答へたと聞いた時、私は義兄の忠告をまた思ひ出して妙な感じを與へられたのであつた。

今でも多くの文學者など、いふ奴には、後進の者に向つて決して文學などやるな、と云ふような事を云ふ變な者がゐる。彼等は自分の携つてゐる文學そのものを、それほど意義のないものとしてゐるのであらうか、それとも自分のような人間だけはこゝに來て暮してゐられるが、お前達はよせと云ふことなのか、私にはどうしても判らない。凡そ何商賣をしてゐる人にでも聞いて見給へ、自分の商賣が一番好いと答へる奴はまあ稀れだ。これは假令人間一般に通じた、ある感情であるとは云へ、文學とか繪畫とか、或ひはその他の學に従ふものであつては、私はこんな答へは許されないことと思つてゐる。人間と生れて來た限り好悪や判斷は各自の隨意である。その人にとつては總理大臣になるよりも、玉乗になる方が好きだと云ふ人間がないとはどうして云へよう。自分の好む道であればこそ、餓ても凍えても、凡ゆる艱苦を冒して進むだけの勇氣も湧いて來るのである。殊に從來の藝術家等には、自分等ばかりが人類文化の最高頂に參してゐるのだと云ふ誇りが強かつた。それなれば更に一層、その險難の道に敢て進まうとする人々に獎勵や鼓舞を與ふべき筈であつたのだ。

が然しその頃は齋藤綠雨なども、勿論皮肉の意味でもあつたであらうが、凡ての藝は素人なるがよし、など、云ふ事を云つてゐた時代であつた——いつの事だつたか私は義兄にその短文を一例として示された事を憶えてゐる——尙その上に、幼い弟や妹の犠牲になれと云はれると、それをも無下にはねつける、もう一段上の藝術觀や道德觀を私もはつきりとは持つてゐなかつた。義兄の手紙に對しては、私はそれつ切り何も云つてやらなかつたが、然し私の希望はどうしてもその位のことでは断ち切ることは出来なかつた。それから後も私は毎日どうかして自分の志望を遂げる手段や方法に就て考へてゐた。然し前にも幾度か云つた通り、小僧をすれば世間が判るなど、云ふが、それは偏つた世の中の一隅を見ることは出来るかも知れないが、決して廣い世間を見るように養はれるものではなかつた。私は自分が自分の志しを遂げる爲めには、どう云ふ道を選んだら好いのか少しも判らなかつた。さうしてかう云ふ奴隸的の境遇に長く育つた人間の常として、誰か人に頼らなければならぬように、いつも考へが落ちて行つてしまふのだつた。

私は自分の尊敬する文學者と、また自分が考へてゐる志しに對して、同情も理解もある人を色々と撰擇した。そしてさう云ふ時には、いつも私の頭に幸田露伴が浮んで來るのだつた。紅葉の文章の美しさや、艶のある物語にはいつも心を引かれることが多かつたが、しかし、私の中に妙

に固まらせられてしまつてゐる、戀愛を憧憬しつゝ、常に輕蔑するようになってしまつた變な性癖が、どうしても紅葉を心から尊敬させなかつた。露伴の事を考へると、どこか恐いような所のある人のやうに思はれた。けれどもそれだけにあの人は、男子の希望や野心に對しては、より深い同情のある人のやうに思はれるのであつた。長い間だ考へた後、私はまた遂に思ひ切つて露伴に弟子入を頼む手紙を書いた。その手紙を書く間は本當に面と向つて何か頼むやうな耻しさと恐ろしさを持つて書いたことを今でもよく憶えてゐる。さうしてその手紙をポストに入れる前にも、幾度か躊躇したり考へ直して見たりして、二三日かゝつてやつと思ひ切つて函に入れた。

それから後は毎日々々、露伴から何とか云つて返事が來はすまいかとそればかりを待つて暮した。けれども遂に返事は來ないで二十日ばかりの日はたつてしまつた。然しそれでもまだ私は、あの人から拒まれたものとは思つてゐなかつた。どうかしてあの人に會つて自分の望みを打明けたら、必ず肯き入れてくれるに違ひないと考へた。そして四月の中旬過ぎ、私の公休を買へる日に露伴を訪問する事に決心した。春陽堂であつたか、嵩山房であつたかへ手紙を出して、露伴の住所を問ひ合せて寺島村にある事を確かめた。何と云つて頼んだら、自分の希望をすぐに容れてくれるか知ら、とまた毎日そんな事ばかりを考へて暮してゐた。そんなことを考へる時には、不

思議にあの人の作であるいさなどりが頭に浮んで来た。どう云ふわけだか今でも判らない——

とうとう私の公休の日がやつて来た。その日は朝から春雨がしとくと降つてゐた。四月も末に近かつたが、晴れてゐたらあの向島も随分大變な雑沓であつたらうが、雨の爲めに土手の上には人影も見えず、茶店の葎簀を巻いて立て掛けてある上に、雨は寂しさうに降りそゞいで、櫻の花がちらちらと散りかゝつてゐた。竹屋の渡だつたか、小松島であつたか、蒸気を上つてからのそんな景色が妙に私の心を喜ばせた。私はまたさまざまな空想に浸りながら、雨の中をゆつくりと歩いて行つた。砂糖屋にゐた頃に、雨の日にこの土手を歩かされたことなども、私の頭に浮んで来た。そして文學に志したと云ふことがたゞそれだけでも、非常に光榮なことのようになさへ思はれたのであつた。

露伴の家は、寺島の土手下の角にあつた。途中で聞きく、やうやくその家の前に出て、幸田と云ふ標札を眺めた時に、私の勇んでゐた足取はびたつと止まつてしまつた。門の扉を開けるのが、何となく恥かしく、また悪いことでもするように思はれて、容易にそこに近づくことが出来なかつた。最初は門の前を二三度往来した。その次にはまた標札を眺め返して、更に遠くの方まで歩いて行つた。何と云ふ理由もなく、どきついて来る胸を鎮めようと思つてゐたのであつた。

漸く最後に、遠くの方から勢ひよく戻つて来たときに、門の扉をがらりと開けた。門から玄關までは思つたよりも僅かなので、またどきつとしたのであつたが、玄關に近づいた時、そこにもう露伴がゐたのには更に一層どきりとした。私は何でもどもりく、いつか手紙を出した宮島と云ふものだと云ふことをやつと告げた。露伴はその時丁度玄關の椅子に腰をかけて、美しい奥さんに髻を刺つて貰つてゐた所であつた。が私の名を聞くと、

『あゝさうか、まあ上つて待つてゐるが好い』

と云はれたので、私は玄關の次の間に上つて小さくなつて坐つてゐた。庭の方では何だか水鳥の鳴く聲が聞えてゐた。何と云ふこともなく、たゞわくわくしながら、水鳥の聲や玄關の物音に心ばかりを取られてゐた。

少時してから髻をそつたばかりの露伴は血色の好い顔をして、その部屋に現はれて来た。私はまた改めてべこべこお辭儀をして、

『先日は大變勝手なことをお願いして』とやつと口の中で云つた。自分の心持では、是非自分の希望を容れて貰ひたいと云ひたかつたのだが、それはとうとう云へなかつた。

『あゝさう、手紙を見てよく判つてゐる。それで、何か小説でも書いたものでもあるのかね』と

訊かれた時に、私はまたぎくりと參つてしまつた。小説を書くことなどは、私がこれからどれだけの學問を勉強し、世路を閲してからでなければ、とても出来ることではないと自分で思ひ込んでゐた。いま自分の考へてゐることは、その小説を書けるようになる爲めに、どうして進んだら好いか、導いて貰ひたいと云ふことよりほかにないのである。そこで私は、

『いゝえまだ、とてもそんな』と間諷々と答へてしまつた。

『いや、さうかね、そんなら好いのだよ、然し君ね、小説を書くようになる爲めにも、矢張り色々の事を知らなければならぬ。たゞその文學的の才能があると云ふばかりでは、決して好い文學が出来るものではないのだ。だから學問もしなければならぬし、また世の中の事を色々知つてゐなければならぬ。つまり、一本の矢があつて、それが文學的の才能としたところで、それには矢張り好い羽根をつけなければ、眞直に狙つたところへは飛んで行かない。學問や世間の智識が即ちその羽根だ。だから君が今さうして吳服屋の小僧をしてゐるならば、その小僧をしながらでも勉強をする事も出来るし、また世間のこともよく判るようになる。人間と云ふものは、一つ事をするにも何でも知つてゐなければならぬものだ——』とそれから堯だか舜だかの事を例に引いて、色々と言き聞かせてくれた。そして最後に、

『さうやつて勉強して、何か書き初めてから私に見ろといふならいつでも見てあげる。だからまあ、今のうちは小僧でも何でも好いから、たゞ文學者になる爲めの勉強だと思つて一生懸命に勉強するが好い』と云はれてしまつた。

私はそれから漸く思ひ切つて、今の境遇では夜も勉強の出来ないことやまた文學者になる爲めには、どう云う風に勉強して好いのか見當さへつかないような事を、おづくしながら話して、『どうかあなたのそばにおいて、色々と言へていただきたい』とやつとの事で喋舌つたのであつた。

『いやまあ、兎も角、もう少しさうして勉強してゐる方が好い。さうして何か一つ書いたら持つて来て見せてごらん。それからまた私も考へるから』ときつぱりと云はれてしまつたので、私は露伴の家弟子となることは、一應望みを断たなければならなくなつてしまつたし、それ以上何も云ふことも出来なくなつてしまつた。

『それではその中に、何か書いたら見ていただきたいと思ひますから、その節は是非お願ひします』

と云つてお辭儀をした。



『そんなに何も急ぐことはないのだ。何しろ今のうちは勉強が大切だからしつかり勉強するが好い』と云ひながら、露伴は玄關まで送つて来てくれた。

今になつて考へれば、實際に文學的の才能があるのか判らないものを引き受けて、自分の家に置いて養成すると云ふことは、誠につまらなく變な事であるから、露伴の云つたことも私にはよく判る。けれども、こちらはただ文學者になりたいから勉強したいと云ふ希望なのである。しつかり勉強しろと云ふ位なら、勉強させてくれてもよささうなものだと云ふような、單純な疑問も胸に湧いた。けれどもかうして斷られても、私は露伴に對しては、實に心からの感謝を捧げ、さうして何だか勇氣までも興へられたような氣になつて露伴の家を出たのであつた。一つには自分が日頃から尊敬し崇拜してゐた人に會つて、親しくその人の話を聞くことが出来たのが嬉しかつたのかも知れなかつた。けれどもそれと同時にまた、何れその中に、自分でも立派なものを書いてつて見せたならば、あの人も必ずうけ容れてくれるに違ひないといふようなことも考へてゐた。

そこにはまだ糸のような雨がしとくと降つてゐた。土手下の川面は雨にけぶつて、遅れ咲の花の梢からは、ばら／＼と傘の上に落る雫に交つて、白い花片がちら／＼と散つてゐた。甘いセ

ンチメンタルなそれ等の情景が私の幼い空想の中に工合よくもつれ合つて、夢のように溶け込んでしまつてゐた。何を考へながら歩いたのか忘れてしまつたが、私はふらくししながら、吾妻橋の邊まで我を忘れて歩いて來てしまつてゐた――

露伴を訪問した時には、何か新しい光と力を得たような喜びを感じたのであつたが、店に歸つて來てみれば、境遇は格別新しくなつてゐたわけでもなく、私にとつては一番大切な夜の時間の大部分を、裁ち方とか算盤とか云ふことに取られてゐることが、却つて一層不滿の種になつた。それから後の私は店の仕事に對しては、また一層怠けるようになつてしまつた。父に私の希望を云つてやつた所で、店から暇を取ることに賛成してくれさうにもなく、それかと云つて飛び出してしまふような口實になることもないのであつた。私はたゞさうして怠け、するけることによつて自分の暇を造つて、その間に少しづつ、でも自分の好きな本でも讀むことより外に、自分を慰める道はなかつたのだ。

その頃になつて丁度店ではまた更に、新しく子供を募集しはじめた。その時の募集の目的は、新しく出來た休憩室で來客に茶の給仕をする者を求める事にあつたらしい。十人ほどの新しい子供が入つて來たが、どれもこれも色白の女のような美少年ばかりであつた。明かにもうそろそろ

と青年期に入りかけてゐた私は、その新しい子供の中の大野と云ふ少年に、いつとも知れず戀するようになってしまつてゐた。同性の間に於けるこの不思議な愛も、矢張り言葉以外の何かによつて、いつともなくお互ひの間に會得の行くようになるものである。私の戀もそれから後ち間もなく、望みを遂げる事が出来たのであつた。計算室の裏の藏の前の廊下は夜になると物凄く真暗な淋しい所となつてゐた。私達二人はよくそこで會つた。變なことを云ふようだが、大野は本當に女にしても稀れにしか見ることの出来ないような美しい顔を持つてゐた。眞白な透き徹るような皮膚、眞黒な細い眉、切れの好い澄んだ目附と、ほんの少し受け口にはなつてゐたが、その眞紅な唇のあたりには、浮世繪にある女のような艶かしい美しさが漂つてゐた。私は彼を得た時には、本當に戀の勝利者のような喜びに酔つてゐた。さうして妙な苦痛と歡樂とが私をさいなむに任せてゐた。晝は用もない店にわざ／＼出掛けて行き、休憩室に働いてゐる彼の姿を窺かに眺めて喜んだ。夜はたゞ彼が自分のそばにゐる時ばかりが、私の心が落着いてゐた。

然し大野は結局、下町の職人の息子であつた。彼の風采が、洗練され盡してどこか頹廢してゐるように、彼の心も同じように頹廢してゐた。彼が私の愛を容れたのは、結局私が亂暴で、小僧仲間を我を通してゐる事に、何等かの頼りを得たかつたのに過ぎなかつた。彼は、體力に於てか

それともまた地位の上に於てか、何かしらの力さへあるものであつたらば、どんな男の要求をも容れ始めた。私は一度、大野と二人で計算室の側に隠れてゐて、私がさきに扉を押してそとに出て來ると、私の姿が消えるや否や、川田と云ふ子供一級のいやな奴が、獸のような燃える眼をして、扉の中に飛び込んで行く姿を見た。そして二人は永い間だ出て來なかつた。嫉妬と共にいやな醜惡な感じが私の頭をメチャ／＼にした。その翌日私は大野を責める氣で昨夜の事を尋ね始めた。けれども彼には、それは何でもない事らしく、川田の事も、そのほかにもう一人の子供の事をも平氣でべら／＼と喋舌くつた。しかしその時の私は川田に對しても、そのほかの一人と云ふ仲間に對しても、不思議に嫉妬を感じなかつた。それよりもその瞬間に、大野に對して、いやな、なんと云つて好いか、なめくじにでも觸れたような、嫌惡と輕蔑の念を感じた。それつきり私は彼と口を利くこともなくなつてしまつた。そしてその中に、月々に二三度づゝ陳列場へやつて來る何河内とか云ふ華族の娘に、あてもない戀をするようになってしまつた。私がある晩冗談に、その娘のことを店の小僧に話したところが、ひょうきんなその小僧はその後その娘が來るたびに遠い計算室の中にある私の所まで、にこ／＼しながら知らせに來てくれた。さうすると、私も彼の好意を感謝しながら、のこ／＼と店に出かけて行つた。その人はいつも母親らしい上品な老婦

人と歩いてゐた。陳列棚の間を楽しさうに笑ひながら歩いてゐる、彼女の姿をたゞほんやりと見てゐるだけで、私も楽しかった。幼い頭で、私は何だか、白百合のような感じのする人だとも思つてゐた。今から思へば氣障なようだが、事實だつたから仕方がない。

私がそんなことをして、自分の仕事にはまるで怠けて暮し、店則は勝手に破つて煙草を吸つたり買喰をしたりして、何度か禁足の罰に會ひ、その度毎に便所のそばに掲示されてゐる中に、監督の信用は益々失つてしまつてゐた。小僧の昇級があつた時にも、私だけはまだ依然として子供四級の舊地位に置かれてゐた。さうしてまたこの不信用は監督ばかりから得たのでなく、又た別の方面から、變な風に、逆に信用されることになつてしまつた。その頃、店の小使の中に一人、何となく獯猛な顔をした男がゐるが、ある朝彼は私に向つて、

『君の今度の公休日はいつだい』と突然尋ねた。

『まだきまつてゐないのだ』と私が答へると、

『さうか、ぢやあ決つたら知らせしてくれ、どつかへ一緒に遊びに行かう』と云つて變な笑方をした。私は彼が私に好意を持つ事が不思議に思はれたが、大して氣にも止めずゐるた。すると三四日してから、計算室の裏の方で誰かど、

『盗人、盗人』と大きな聲で怒鳴ると共に、多勢の人の足音がどや／＼と起つて來た。私も早速飛び出して見たが、その時はもう盗人の影も見えなくなつてしまつてゐて、みんなは、失望と安心とをゴチャまぜにしたような顔をしてほんやりと立つてゐた。

『どうしたのです』と私が尋ねると、店員の一人が、

『なに、私がこの裏便所へ來たら、便所の中へ包みをかゝへて入る奴があるから變だと思つて見てゐると、中の方でぱり／＼紙を破く音がするのだ。それからひよつと隙間から覗いて見たら、生絲の大包みを破いてゐる所なのだ、それで大きな聲で怒鳴つたら、裏の戸を無理に押し明けて逃げて行つた』とまだ恐ろしさうな顔をして話してくれた。その盗人の事を色々尋ねたら、先達て私に公休日を尋ねた小使だつた。恐らく何か私を相棒にでも引きすり込む魂膽でゐたのかも知れなかつたと思つた。

それからまた、私と同時に入つた小僧で、それ以前に本所の精巧社にゐた事があると云ふ子供がゐた。越後の方の裁判官の息子だとか云つてゐるが、國には許婚の娘がゐると云つて、女文字の手紙を見せては、時々妙にセンチメンタルな話を聞かせた。私は妙にその子供に同情した。そしてさう云ふ相手を持つてゐる彼は幸福だとも考へてゐた。まだ寒い時分の晩だつた。私は何の

氣もなく店の方へ行くと、がらんとして人氣のない店の、向ふの方からその小僧がふら／＼とやつて来た。二人はたゞひよつと笑ひ合つてすれ違つたが、二足か三足行き過ぎて何の氣もなく後を振り返ると、その子供の袂から、絞り染のしごきが疊の上に長く垂れてゐるのを、知らずに引きすつて歩いてゐたのである。私は何となく、可笑しくもあれば可哀相にも思つた。

『おい君』と私が呼びとめた時は、彼はまだそのしごきに氣づかずに、

『なに』と平然として立ち止つたが、

『それはどうしたんだい』私が長々と疊の上に尻尾のようにたれてゐるしごきを指差した時に、

『えつ』と云つて彼はどきまぎしながらそれでも慌て、袂の中へその布をたくし込んだ。そして私のそばへ寄つて来て、

『ね、君、ね、本當はね、國から丁度僕の知つてる人が出て来てるんだよ、それでね、それにやりたいもんだからつひ持つて来たんだけど、すぐに店へ返しておくから誰にも云はないでくれ給へね』と泣くようにして私に頼むのだつた。

『誰にも云やしないよ、そんな事を、氣をつけないと目つかつたら大變だぜ』と云つて、私はそのまゝ行つてしまつた。その後彼がそのしごきを店へ返したかどうかは私は知らない。けれども

それから後の彼は、妙に私に好意を持つて呉れたことだけを憶えてゐる。

陳列棚の数がだん／＼に殖えて、今までのように番頭の持場と云ふものが少しづつ減つて來ると、誰が云ひ出したともなく、此の後はもとのように小僧が入らないから、小僧の人減しをするのだと云ふ風説が立つて來た。多勢の小僧は、それでも何となく不安らしく朝に晩に集るとは、こそ／＼とその噂をし合つてゐた。殊に新入の小僧達の中に、それに對する不平の氣が高まつて來た。——今になつて陳列棚の殖えることも、人手のいらなくなることも、店では豫め判つてゐたことである。それなのに自分達を募集して雇つておきながら、向ふの勝手で解雇するのは怪しからぬ事だ——と云ふのがその多くの主張だつた。さうしてもし向ふで解雇する位なら、こちらから暇を取つた方が、氣持も好ければ名譽でもある、と云ふような、單純な反抗熱がだん／＼に昂まつて來た。丁度東雲のストライキと云ふ歌が流行つてゐた頃のことである。私達はストライキと云ふことに、これと云ふ確かな理由もない興味を持つてゐた。

火鉢の廻りや小使部屋の隅で、こそ／＼と話し合つてゐる中に、私は一番餘計に憤慨した。それには無論、そんな事の理由でこの店を出ることが出来るのも有難かつたが、また一つには、一度に皆なが出てしまつて、大きな顔をした監督とか、眼鏡の底から小僧達を睨めて歩く、日比翁

助なぞと云ふ人間が困るのを見るのが痛快でもあつた。そして私は一日も早くみんなして揃つて飛び出すことを主張した。それには朝の散歩時間に、皆が出て行つてしまつたまゝ、歸つて來ないのが一番好い方法だと云ふことまで運んで行つた。けれども中には、容易に態度を決しないものがある爲めに、愈々出ると云ふことが、一日々々と延びて行つた。私はだん／＼ぢれて來て、大勢集る度毎に、聲を大きくして皆の決行しない事を詰りはじめた。誰がつけたのだから、私が行くと、ストライキの親玉が來たと云ふようになってしまつた。

ひよつとしたら自分だけには出されないかも知れない——とか出されずに残つたら、それは將來の自分に利益するだらう——と云ふような利己心は、十五六の子供の頭にも確かに根を張つてゐたのだ。それが爲めに、飛び出すことも容易には決行されなかつたに違ひない。ぐ／＼と不安と焦燥の中に暮してゐる中に、一面には反抗の氣も強くなると共に、一面には誰が出されるのかを明かにした方が好いと云ふようなことを云ひ出すものも出て來るのであつた。私はいつもそれに反對した。出るのならみんな出るのが好いのだ。向ふで云ひ渡しをするまで待つことがあるものか、といつも主張した。變な氣分は、壊れるか壊れないかの境目位まで段々に緊張して來た時だつた。ある晩突然、營業部長から子供一同に話があるから、店の表二階へ集れと云ふ命令が

來た。私はそこで、向ふが先手を越して、成績の悪いものだけを解雇するのではないかと考へた。もしさうだつたらば、何でも好いから言ひただけの文句を云つてやるつもりで二階の方へ出掛けて行つた。

私達が監督の指揮でそこに整列してゐると、すぐに營業部長がやつて來た。皮膚の色の美しく光つてゐる、鋭い眼をした瘡ぎすの男であつた。小僧達は彼の一眼を何よりも恐れてゐた。私に取つては恐らく虫が好かないと云ふ種類の人間に屬してゐるたのか、私にはそれが癢にさわつて堪らなかつたのであつた。その男も、あの店の急激な發展當時に餘り働きすぎた故か、その後随分ヒドイ神經衰弱に陥つたとかで今では否として名前も聞かなくなつてしまつた。——

ところがその晩の彼は、小僧達の前に出ると、いつもと違つた温顔を示しながら——近頃小僧の間に、店の發展上大勢を一時に解雇すると云ふ噂があるが、それは嘘だと否定して、みんなが熱心に働いてくれるから、店も追々に繁昌して行くの、重役も喜んでゐるのと煽てたり、今後は店の方でも諸君の待遇を氣をつけてよくしようと思つてゐるから、どうか尙熱心に働いて貰ひたい——と云ふような事を話して、さつさと引き揚げて行つてしまつた。小僧達一同の顔には、不安の去つた喜びの色が浮んだ。話を聞いてゐる中に私は、『餘計なことをしやがる』と云ふ氣にな

つてゐた。そして仲間の顔に晴やかな色の浮んだのを見た時には、變にけつそりと失望した。勿論大した理由のあつての事ではなかつたけれども、矢張り向ふで解雇すると云ふような事のあつた方が面白いと思つたのであつた。

その翌日の晩飯には、辨松から口取とか鹽焼とか云ふような、子供の喜びさうな物を取りよせて、小僧達だけに御馳走した。毎日々々、小饅の煮つけや鯖の味噌煮のようなものばかりを、連續的に喰はされて弱つてゐる私達には、それは全く意外な御馳走だつた。そして急に店でこんな御馳走をしてくれる眞意が判りかねてゐる中に、またみんな二階に集れと云ふふれが出た。それで御馳走で多少浮かれてゐた私達が二階へ上つて行くと、そこには高座が作つてあつて、すぐに何とか伯圓だか伯知だつたかの教育講談と云ふものを聞かされた。講談のくさりが終わると、風月堂の大きな蒸菓子が入つた包みを一つ宛監督が與へてくれた。凡てが意外で、私達には何の意味だか少しも判らずに、たゞ御馳走と話と菓手に喜んでゐたゞけであつた。ところが翌日の新聞を見ると、三井呉服店の小僧生活、とか何とか云ふ見出しで、昨日記者が偶々、三井の小僧の生活を見に行つたら晩飯には辨松の口取なんかゞつけてあつた。これは小僧の生活としては、少し贅澤過ぎやしないかとさへ思はれる位だつた——と云ふような事が書いてあつた。けれども教育講

談や、風月の菓子については何にも書いてなかつたのであつた。狡猾な營業部長と、お坐なりの新聞記者とが集つてした仕事であることもそれで判つた。私達のストライキと云ふものも、煙のように揉み消されて、逆に世間へ對する店の廣告に使はれたゞけに終つてしまつた。

五月の末頃になつて、冬物の寄せ切れの見切賣りと云ふものがあつた。私達がまだ寝てゐる朝も暗い中から、店の前には盛裝した女達が黒山のように立つてゐた。七時頃になつて、店の扉が開かれるとその人達は、大水のように雪崩れ込んだ。私はすぐに、下から廻つて二階の寄せ切場へ行つて見た。廣い疊敷の部屋の中には、寄せ切れの小さな山が、五六十個所に固めて盛り上げてあつたが、雪崩れて來たそれ等の女の人達は、決勝點に入る競争者のような勢ひでその山を目がけて走つて來ると、てんでんにいきなりその山の上に身體を蔽つ被せてしまふのだつた。何の事はないベースボールのすべり込みでもやるような勢ひと形ちであつた。それが凡て女だつた。中には美しい娘も藝妓も細君もゐた。白髪の生えた婆さんもゐた。かうして好く見ればカルタ遊びのやうにも見え、悪く見れば餓鬼道の淺間しさを見せつけられるような争奪戦は、廣々とした寄切場の中で眞黒になつて行なはれるのであつた。そしてうまく切地の山を占領した者達は、身を以て覆ひ、袖で隠して自分の獲物が確實に自分の手に入つたのを確かめるまでは、息をこらし

てぢつとしてゐるのである。それからやがて彼等はそろ／＼と切地の上に取り上つて、又た四邊をよく見廻してから、今度は股の下膝の横など、云ふ所から、一枚々々切地を取り出して自分の欲しさうな物は小脇に抱え、必要のない物は傍に投げ出す選擇が始まるのだ。すると切地の山は他人に占領されてしまい、手持無沙汰で人込の中をうろ／＼と歩き廻つてゐた者の群がその傍に集つて来る。彼等の顔には持てる者に對する羨望と嫉妬の念があり／＼と醜惡に現はれてゐる。そして選り残しの切地が投げ出されると、また先を争つて奪ひ會ふのだ。何と云ふことはない、野良犬の集りのようなさもしい姿である。かうしてその日は終日寄切場で、いやな争ひが繰り返される。その間には、美しく飾りたてた女の人が、萬引の手元を發見されて重役室の方へ引張つて行かれたりするのであつた。虚榮の虚飾のと云ふ字を通り越してしまつたこの淺ましい貪婪な状態を眺めた人ならば、恐らく誰れでも美しく飾り立てた女の着物に對して、何か變な氣を持つようになつてしまふに違ひないだらう。それから後の私も、店へ来る客に對して益々いやな反感を持つようになつてしまつた。その感情は今日までも残つてゐて、三越の白木のと云へば、今でも不快な氣が起つて来る。

夏になると綿部の仕事は、蚊帳部に變つて行くのであつた。けれどもそこで私はたゞ、七八と

か八八とか云ふことや、麻の蚊帳のほかにも、絹だの紗の蚊帳のあることや、緋縮緬の裾をつけた物があることなどを憶えたに過ぎなかつた。店の仕事は怠けるだけ怠け、藏の二階でも便所の中でも、人から隠れる所さへあれば、二十分でも三十分でも煙草を喫ふのと、本を読むのに苦心して暮してゐた。が、かうした肉體的にだらけた生活をしてゐた爲めか、私はその夏になつて、はじめて脚氣に冒された。最もこれは大して重い症状でもなく、たゞ少し足に水氣を持つだけのことであつたが、私はすぐにそれを云ひ立て、病院にやつて貰つた。醫者は大抵の病氣に對して重く見たり云つたりするものだ。そのお蔭で私は二三日小僧部屋の二階で寝てから後ち、養生の爲めに家へ歸して貰ふことになつた。——その時分私は寝てゐながら、高山樗牛の文藝評論と云ふ本を読んだ。その中の短い文章の冒頭に、曉の星や夕の星の光を浴びる事が出来ないのは、囚人が奴隸のような情けない生活だ、と云ふようなことが書いてあつた。薄暗い建物の中で生活してゐて、光線を浴びない爲めに顔はいやに青白くなり、晴々とした氣持になることも出來ず、月一回の公休日に、心から日の光に憧憬れてゐた私は、その文章を読んだ時恐ろしく昂奮してしまつた。養生の爲めと云つて家に歸ると、私はその冒頭の文章をまた冒頭において、小僧生活の非衛生的なことや、重役達が店の裝飾や發展の爲めにばかり腐心して、少しもそれ等に就て顧みな

いことを憤慨した文章を書いて——恐らく幼稚な妙なものであつたらうと思つてゐるが——高橋と云ふ重役宛に出してしまつた。けれどもそれに對して返事の來なかつたことも、また何の反響のなかつたことも云ふまでもない事だ。

自分では、たとへ病氣の爲めにしろ、一度家へ歸つた以上、二度とこんな店へ戻るものかと云ふ考へでゐたが、父にはたゞ脚氣のことだけを話して、當分養生に歸つて來たのだと云つておいた。父も病氣に對しては苦情も云へないので格別何も云はなかつた。それに好かつたことは、父はその頃、親戚の者が關係してゐた、妙な無盡會社のような仕事の爲めに、月に二回宛神奈川の方へ出張してゐた。父の留守中だけは、私も家にのそくとして暮す事が出來てゐた。けれども父が家に歸つて來ると母との間に争ひが絶えなかつた。私はその事を明らさまに語ることも出來ないし、語るべき必要もないであらうが、父と母との體質の相違が争ひの原因となつてゐたらしく、そのほかに、日に／＼傾いて行く家の事や、いくらあがいても、再び昔の地位には戻れさうもないことが、父の氣をいら立たせたものらしい。父が家に歸つて來た時には、酒を飲んですぐ暴れた。時には夜中に刀を振り舞はすようなことさへあつた。父と母との争ひに對しては、私はなるべく觸れないように努めてゐたが、それでもたまには堪え切れなくなつて、飛び出して行つ

て、父と激しく争ふような事もあつた。

私の脚氣は、重くはないと云ひながら、家へ歸つても矢張り水氣は引かず、向ふ脛を指で押すと水のたまりさうな穴がへこむので、十日ほど經つてから、青梅にゐる義兄の所へ行くことになつた。

その頃義兄は、青梅の宗建寺と云ふ寺を借りて、靜かに製作に耽つてゐた。義兄とはそれほど親しくはなかつたが、多摩川の岸邊で一夏を越すことが、私の心を喜ばせた。今かうしてその時分の事を考へると、その年頃の感情が本當に幼稚であつたのか、今の感情が全く硬化してしまつたのか、何れが本當の事か私には判らない。けれども國分寺から小さな鐵道に乗りかへて、はるか平野の向ふに長く長く連る大きな山脈を眺めた時の、かねてから三井の薄暗い店の奥で憧憬れてゐた自然に目のあたり接した喜びの感じは、私にはどうしても忘れ難い追憶の一つとなつてしまつた。

義兄の家には、私と同じ病氣の學生が二人來てゐた。一人は帝大の醫科の生徒で、一人は早稲田の豫科にゐると云つてゐた。私は毎日、兄の書物を借りて讀み耽ることゝ、多摩川邊を散歩する事を日課にしてゐた。夕飯の後などに色々と話が出た、私はどうしても文學者になりたい、



と云ひ出すと、義兄はよく大橋乙羽の事を私に話して聞かせた。どこか田舎の本屋の小僧をしてゐて勉強して、博文館の店員から養子となり、そして算盤と共に文學も捨てないでゐる乙羽の事を、私の模範としろと云ふように私には聞えた、その癖兄はまた、乙羽と云ふ男は無學だから、橋を隔て、一利那ありと書いたとか、帝國ホテルの宴會で、アイスクリームにソースをかけたとか云ふ事を話して冷笑した。義兄自身の父は、かなり大きな米屋だったとか云ふ事だった。自分も小さい時から商賣は嫌いで父と争ひつゝも繪の方に進んだのだともよく話してゐたし、文學を愛しながら算盤も捨てない乙羽を決して心から尊敬してゐるようにも見えなかつた。そんな事を考へると、義兄は要するに、私の才能について疑ひを持つてゐたものとしか思はれなかつた。私はそれが不愉快だつた。義兄から母や弟や妹の事を云はれ、ば、私はそれに反對することは出来なかつたが、然し、今に自分も必ず文學に生きて見せるから、と云ふような氣は持つてゐた。

義兄と私との間には、その頃からもう何か、眼に見えない隔りが出来てしまつてゐた。私はだん／＼に義兄と口を利くことが少くなつて行つたが、然しそれと同時に、多摩川邊の自然をまたより多く愛するようになってしまつた。その頃の私の文學に對する態度は、美しい自然を謳ふことの中に一切を認めてゐた。幼い私の眼には人生に於ける凡てのことが醜惡に、忌はしいものと

してより映らなかつた。そしてたゞ自然ばかりが美しく私の眼に映り、心を樂ませてくれるのだつた。私はよくあの岩の多い多摩川の岸に来て、深い木立の蔭に涼みながら、澄み切つた水の流れに見入つて時を過すことが多かつた。そしてどうかしてこの美しい自然の美を心ゆくまで歌へるような人になりたいといつも心に願ふのだつた。が然し、それほどに憧憬れてゐる美しい水の流れや夏の夕照や、暮れ行く雲に心の溶け入るほどに眺め入つてゐる時にも、心の底にはどこか云ひ知れない物足りなさがあるのをいつも感じてゐた。つまり私はその美しい自然の底に、まだ見も知らない戀人の姿をあてもなく探ね廻つてゐたものであつたのだらう。飽くほどに自然に眺め入つたあとでは、甘い憂鬱と強い寂寥がいつも心の中に起つて來た。

一と月ほど青梅にゐるうちに、脚氣は餘程よくなつて私は東京に歸つて來た。家に歸つてからも、店へ戻る氣のまるでない私は、例の狭い部屋に閉ぢ籠つたまま、書物ばかりを讀み耽つてゐた。前にも云つたように、その頃の思潮の全體がさうであつたように、今から思へば私の思想も感情も餘程遊戯的であつたように思はれる。けれどもその當時の私にとつては、それが眞剣に生きる事に値ひしてゐた。美しいものゝ爲めに生き、美しいものゝ爲めに死にたかつた。私の信念はたゞそれだけで純一になることが出來たのだつた。文學をやりたいと言つても、どんな風にし

て、どれほどの素養の出来た時に小説を書く事が出来るのか、まるで見當のつかなくかつた私は、たゞ手當り次第に無暗に雑書を耽讀した。硯友社によつて代表されてゐた、一種の思潮が衰えかけて来て、新しいものゝ流れがその底から擡頭しようとしかけてゐることも、今までの小説のようでは駄目で、何かしらもつと深い鋭いものを欲してゐることも、おほろけに感じてはゐたものゝ、私自身にしては、何う云ふ風に進むべきかも判らなかつた。それにまた、新しい雑誌を買つて讀む金もなく、思想の流れを示してくれるような先輩もなかつた。こゝでもまた薄明の中を歩くような心元なさで、たゞ文學、文學と心に思ひながら、その日その日を過して行くより外はなかつた。

私のさうした煮え切らない、心の中ばかりでもがいてゐるような生活の態度が、父の眼には恐らくもどかしくばかり映つたに違ひない。家に歸つてから少時の間は父も黙つてゐたが、やがて遂に堪え切れないように、

『お前は店へ歸らない氣か』と訊ね始めた。その時は私が病氣で家に歸つてから、もう二ヶ月近い日が経つてしまつてゐた。歸るものなら早く歸らなければ、店の方から解雇される事は判つてゐた。私は

『あんな店へは歸りません』と答へた。

『店へ歸らないでお前は何をやる氣だ』

『僕は文學がやりたいんです』とその時初めて私は、自分の希望を父の前に打明けた。それは父の反對を恐れたわけでもなく、たゞ恐らくは無理解な父から、變に輕蔑されたり何かする事が、自分のその大切な望みを、汚されるように考へてゐたからであつた。そして結果はその豫想の通りだつた。

『なに、文學』と云つて父は『ふゝん』と笑つた。『文學をやると云つて、お前はどうして暮す考へなのだ』と更に意地悪さうに父は尋ねた。私はそれでカツとなつて、

『小説を書くんです』と答へてしまつた。然し、正直なことを云へば、その當時の私は小説を書くことに依つて原稿料が貰へるものなのか、印税と云ふものがどんなものなのかそんなことはてんで判らなかつた。文學者と云ふよりも、詩や小説を書くものがどうして暮してゐるのかも確かに知つてゐなかつた。またその當時の文學者の生活は、今から見れば遙かに苦しいものでもあつたらしかつた。藤村が文學者獨身説などを唱へたのも、それから一二年後のことであつたらう。兄の實際的な忠告も、そんな所に根ざしてゐたのかも知れなかつた。けれどもその時の私には、

そんなことはどうでもよかつた。小説を書いて暮したいから、小説を書くと言つたのだ。すると父は

『ふん、小説』とさも呆れ果てたように益々せうら笑つた。そして、『馬鹿なことを云ひなさるな、お前みたいなのが小説』と云つて、父はまた、如何にも野卑な、人を輕蔑しきつたような顔をして、大きな聲でまた『あは、ふふ』と笑つたのであつた。私はもうその時の彼は父とも何とも思はなかつた。

『小説を書くと言ふのが何が可笑しいんです』

とすぐに喰つてかゝつた。

『何でも好いから、馬鹿なことを云ひなさるな、お前みたいなのが小説なんて、可笑しいから笑ふのぢや、まあ好いから、大下にでもよく聞いて見なさい』と云つて、父は決して眞面目な答へを與へなかつた。私も勝手にしろと思つた。

『大下の兄さんにはもう話してあるのです』と云ひ捨てたまゝ私は立つて自分の部屋に歸つてしまつた。妙なセンチメンタルな悲しさが頭の中を暗くしてしまつた。八月の末の白粉花の咲く時分だつた。私はたゞ一人してほつねんといつまでもぢつと考へ込んでゐた。

父はその後ち私には何にも云はなかつた。一つ家に住んでゐる父と子の間には、親子の親しさと云ふものがなくなつてしまつてゐた。そして父の私に對する不満は、母の方へ打突かつて行つた。その頃の私の家の中の混亂した生活を考へると、今でも頭が痛くなる位である。一週間ほど神奈川の方へ行つてゐた父が歸つてくると、その晩は必ず家の中が戦のような唸り聲や泣き聲で一杯になつてしまふのだつた。初めの中はたゞ黙つて酒を飲んでゐる父が、だん／＼酔が廻つて來るにつれて、それからそれへと果しもない小言がはじまるのだつた。殊にその小言から、怒罵に行き果ては母が泣き、小さな弟や妹達が恐怖におびえておろ／＼して、遂には母が癪を起すまでになる原因と云ふのが、いつもつまらない事ばかりであつた。それは恐らく父が母に對する止みがたい不満が、何かさう云ふ小さな機縁をかりて勃發したものかも知れなかつた。不満か誤解か、その眞相は今の私にもよく解らない。けれども父の激しい怒りの度毎に、父に對する母の嫌惡の情も激しくなつて行くらしかつた。

その頃の山の手の家にはまだ電燈が引かれてなかつたので、私の家では空氣ランプと云ふのを使つてゐた。こんな事を書いて今この讀者には判らないかも知れないが、空氣ランプの心と云ふ奴は恐ろしくデリケートなものだつた。一寸でもその切り方が悪ければ、角のような煙が出て、

その先から油煙を吐いてホヤの中を眞黒にしてしまふのだつた。父が夕方に突然歸つて來てランプをつけた時、その心の切り方が悪くでもあらうものなら、

『何故こんな掃除の仕方をしておくのか』

と大きな聲で怒鳴りつけて、それから母が何事に對しても、不注意であるか不親切であると云ふ小言が始まるのであつた。その度毎に母は泣いて謝罪つてゐた。弟や妹が一緒になつて、小さな手をついて父にあやまる事もあつた。幼年時代に虐待された記憶は私の心の中により激しい勢ひを以て復活して來た。母に對する同情は、父に對する堪え難い憎惡の念となつて來た、父と母と争つてゐる時に私が何か口をきけば、父は餘計に母に當り散す事を知つてゐた爲めに、私は強て無關心な態度を取つてゐるが、それだけにより多く私の心は痛むのだつた。父が神奈川へ出て行つてしまつたあとでは、母と二人で泣き暮したこともあつた。私は今でもランプの光の方が電燈の光よりも好きであるが、どうかして川舎へでも行つて空氣ランプと云ふものを見るたびに、苦しかつたその當時の生活が胸に浮んで來るので嫌いである。

その頃の私は母と二人になると

『しゝめ賣をしても好いからもつと平和な暮しがしたい』とよく云ひ合つた。そして母に對する

此の愛着と同情は、やがてまた父の怒りと憎みを増させる種となつた。母と子の愛に對しても父は嫉妬を持つようになつてしまつた。母が何か私の爲めに辯護すると、

『ふん、貴様はあれの云ふことなら何でも肯くのだらう、あれさへ可愛がつて居つたら好いが』と云ふような言葉さへ、父の口から出るようになってしまつた。それが爲めであるのかどうか、父には私のする事が何も彼も氣に喰はなかつたらしかつた。朝起きて石鹸で顔を洗ふのも、食鹽水で冷水摩擦をするのも、掃除をする時のハタキのかけかたまでに彼は私を非難した。然し十六歳でももう、十八九か廿歳かと聞かれるほどに、私の身體は頑丈に成長してゐた。父は私をもう擲ることはしなかつたが、父から何か云はれる度毎に、幼年時代の事が私の頭に浮んで來た。もし父が擲りでもしたら——と私も竊かに慘忍な事を考へるようになってしまつてゐた。

自分の希望に向つては満足して進まれるあてもなく、家庭は全くめちやく／＼になつてしまつてゐることが、私の心をすつかり荒ませた。私はだん／＼家にゐることが少くなり、近所にゐる友人のそこや、知合の家をぶら／＼と遊び廻つて歩くことが多くなつてしまつた。母と云ふものがないなかつたら、私はその頃からもう必ず不良少年の仲間に入つた事と今でも思つてゐる。父は憎く、家庭は呪ふべきものと思つてゐるが、たゞ母の愛だけが、ともすれば滑り込んで行きさうな

暗黒の方面へ行くことを妨げてくれた。十二三の頃には近所にゐた叔母や叔父も、たゞ私ばかりを非難してゐたのであつたが、その頃になつてからは餘り無理解で矢筈しい父の態度を非難し始めた。そしてその親戚が集つて相談した結果、父と母との不和の原因を明かにして調停をさせる爲めに、それからまた私の身の上の定め方などについても決定する爲めに、青梅にゐる兄夫婦に出京して貰ふことゝなつた。

それは何でも十月の初め頃のことだつたと憶えてゐる。義兄は午頃にやつて來た。父と母とを前において、兄は色々話をしてゐた。二人の間の争ひの原因、そんな事はあの昔風な人間に、決して明かに云ふことは出来ない事であつたらう。そして義兄はたゞその上つ面の、結果ばかりのようなものを聞かされたに違ひない。それでもその時は父も母も——これからは氣をつけて、穩かに暮らさう——と云ふようなことを云つてゐた。そしてそこへ私も呼び出された。父と義兄との前でまた

『お前はその後どうするつもりだ』と尋ねられた。私は矢張り

『文學をやりたいと思ふ』と答へた。父はいつかのように笑ひもせず黙つてゐたが、義兄はまた例の通り、何かほかの商賣をやりがらやれることを考へたら好いだらう、と云ひながら、文

學者の生活の困難なことを色々説いてゐた。然し義兄にも、すぐに私にどうしろと云ふほどの考へもなかつたらしかつた。それにまた、私が文學に志したと云ふことに、強て反對したり、壓迫して斷念させる氣もなかつたらしかつた。私はその時、

——自分でもどう云ふ風に進んで好いか判らないが、兎も角もう少し學問をしたいから、どつかへ給仕に出ても好い、夜學に行けるようにでもして貰ひたい——と云ふことを云つた。

話が少し進んで行くと、父は私が學問をしたいと云ふ事を、絶対に否定した。それは凡て、小學校の成績の悪かつたと云ふことが、その判斷の根底を成してゐた。然し私はそんな事はどうでも好い、自分がしたいのだからやらせてくれ、もしいけなければ、自分は自分でやるから、自由に自分にやらせてくれ、と云ひ張つた。

義兄はその何れに決して好いのかに苦んでゐたらしかつた。そしてとも角、今日明日に決めなければならぬと云ふことでもなし、自分も何か好い方法を考へておくから、お前もよく考へておけ、と云つて私の話はそれで終つた。

ところがその晩のことだつた。義兄夫婦は私の家に泊ることになつて、食事が終つてからも父だけはいつまでも酒を飲んでゐたが、酔が廻つて來ると父はまた何かぶつ／＼云ひ始めてゐた。

そして義兄夫婦は先に寢床に入つてしまい、私は遠い自分の部屋に引籠つてしまつてゐた。がやがて父の座敷の方から

『刀を出せえ』と怒鳴り立てる父の聲が聞えて來た。それと共に、子供達の泣聲がわーつと響いた。私は驚いて自分の部屋を出た。襖を隔てた向ふではまた父が大きな聲で

『刀をどこへ仕舞つたのだ、出さんか』と怒鳴つてゐる。——私はこんな事を書いてゐてもいやになる。誰も出す者のない事の判り切つた刀を出せと云つて脅かした、父の根性がたまらなく不快になるのだ。——それに續いて母がしきりと小さな聲で、

『大下も來て泊つてゐますのに、ねえあなた』

と父をなだめようと苦心してゐる聲が聞えて來た。

『大下が何ぢや、私の家の事は私がする。えゝ出さんか馬鹿者』と勢ひに乗つた父は、また一層大きな聲で怒鳴りつけた。母の泣聲に交つて『こはい——』と云ふ弟や妹のおろろ聲が聞えて來た。私はもう堪らなくなつて座敷の中へ飛び込んで、

『何をバカな事を云ふんです』と父の前に立ちはだかつた。酒に赤くなつてけちな暴虐と残忍の色を漲らしてゐる父の顔が、悪魔のように私の眼に映つて來た。——父を殺して自分も死んでし

まつたら、母や弟は却つて安樂に生きられるかも知れないのだ——と云ふ氣が、その時初めて私の頭に浮んだのであつた。

その時母は俄かに、

『ううつ』と苦しうな呻き聲を洩すと共に、蒲團の上に俯伏になつてしまつた。

『どうしたんですお母さん』と私は驚きながらその肩に手をかけたが、固く握りしめた兩手をぶる／＼慄はせながら、母はたゞ

『うゝうつ、うゝゝ』と呻いてゐるばかりであつた。私は慌てゝ母を隣りの茶の間にかき出して來て、ランプに明りをつけた。母の顔は眞蒼になり、手足の先まで冷たくなつて節々は伸すことも出来ないように固くなつてしまつてゐた。次の部屋に寝てゐた義兄たちは、さつきからの騒ぎを無論知つてはゐたのであらうが、強て顔を出さうとしなかつた。私には義兄の氣持もよく判つてゐるが、その時になつて初めて

『姉さん』と大きな聲で呼んだ。姉は私の豫想した通り、涙にはれた眼をしながら、しほ／＼と暗い部屋から出て來た。

『どうも濟みません、兄さんにもお氣の毒です』

と私が姉に云つた時、座敷の方では

『ふーん、何あんぢやい』とあてつけらしく大きな聲で喚きながら、ばたりと父が横になつた。——畜生つ——と私は思はず心に叫びながら、薄暗い座敷を睨みつけた。けれども母はまだ、苦しさうに呻いてゐるし、小さな者達はおろく、と度を失つて泣いてゐた。私は姉に母や弟の事を頼んで、醫者を迎へに行つてしまつた。

母の痙攣は醫者が來て注射をするとすぐに治つたが母だけは茶の間にそつと寝かしておいて、私は自分の部屋へ引き取つた。私は一晚中殘忍な想念に浮かされてゐた。そしてそれが不倫であることが私を一番苦しめた。

翌朝になつて義兄夫婦は、起きるとすぐに朝飯も喰べずに歸つてしまつた。父も何だか茫然した顔をしてゐた。家の中は妙に白けて沈んでゐた。

父の醉狂と疝癩は、親戚中の問題となつた。里方の叔母は思ひ切つて離縁しろと云ふことを主張した。私も母が出ればそれについて行くと云つた。母や兄弟達だけで暮すならば、本當に納豆屋をしても好いと思つた。けれども大勢の子供のあることを思ふと、母にもそれはとみに實行は出来ない様子であつた。色々と苦しい相談をした揚句、まだ迷信の抜け切らない人達の間では、

遂に神頼みをすることに一決した。どうにもならない錯雜した事件の末は、たゞさうでもして一時の氣晴しをするより外には仕方がないことでもあつたのであらう。——が、とも角、高田の穴八幡へ願掛けして、虫封じをして貰ふことになつたのだ。さうしてその使には、私が行くことに決定した。

父はその頃、五十六か七だつた。その人間の虫封じをする爲めに、十六歳の私が行くと云ふ事が第一に變な氣がしたのであつた。何でも秋晴のした朝だつた。私は四谷の家から穴八幡へ、父の生れ年や干支を記した書附を持つて出掛けて行つた。登校時間に近い早稲田へ行く道には、制服を着た學生達が朝日を浴びて楽しげに歩いてゐた。その中には私と同窓だつた者達も、また下級であつた者の顔も交つてゐた。私は彼等の顔をふと見ると身の引けるような耻しさと、堪え難い羨望の思とを一時に感じてくるのだつた。その時分豫科の出來た早稲田には、やがて文科大學の出來ることも聞いてゐた。私はそれ等の學校へ通ふ人々の前途が、如何に晴れやかに輝いてゐるものなのかを考へた。幾度も云ふ通り、今日になつて見れば學校と云ふものが、必ずしも正しい教へを授けてもくれなければ、またその門を潜らなければ眞實に生きる道の判らないものでない事も判つてゐる。けれども自分の志す道にさへ、何うして進んで好いか判らなかつた私には、

たゞ學校へでも行くより外には、自分の歩く方法さへ發見する事が出来なかつたのだ。

私はまた、彼等がさうして樂しげに學校へ通つて行く時に、考へても馬鹿け切つたことのような、父の疝の虫封じを頼む爲めに出掛けて行く、自分を自分で憐れむような氣にもなつた。妙なセンチメンタルな哀愁に襲はれながら、喜久井町の坂道をほつ／＼と歩いてゐたのであつた。穴八幡の森の下の、朱塗の寺が虫封じをしてくれる所だつた。暗い本堂の中には護摩の火が赤く燃えて、廊下には虫封じを願ひに來た人達が澤山待つてゐた。けれどもその人々の中を探して見ても、私のように年の行かない男の子は一人もなかつた。多くは赤ん坊とか、子供の疝の虫封じの爲めに來た人達だつた。自分の番が來て護摩の終るのを待つ間だ、朱く塗つた欄干のある空橋の上に出てほつねんと立つてゐる中にも、私はこの古ほけた空氣の満ちた寺の中に、陰氣臭い頼み事をしてゐる自分と、明るい校舎の中で新しい智識を受けてゐる人達とを較べて考へずにはゐられなかつた。

虫封じは母や親戚の者達の一時の氣休めになつただけで、無論何の効果も奏しはしなかつた。父の暴虐振りを親しく見て歸つた義兄も、その後も一度目白坂の家に私を呼んで、改めてまた『今後どうする積りか』と尋ねたが、私は矢張り

『文學をやりたい』と答へた。然し兄の意見では、

『あゝ云ふ亂れた家いつまでももたら、自分の身までを誤まるから、早く家を出た方が好いだらう』と云ふのであつた。けれども私にすれば、ほかの者は小さくて、たゞ私一人が漸く力になる母を置いて家を出るのはいやだと云つた。義兄には私がそれを口實にして、家にゐて苟安を貪りたいものと聞えたのかも知れなかつた。義兄はその時初めて、かさにかゝつたような口振りで、『あんな判らない父を持つてゐて、お前がもつとしつかりしなければ、お母さんや弟たちをどうするのだ』と壓しつけるように云ふのであつた。どうするときめつけられて見た所で、自分の身一つすらどうして好いかも判らない私には、どうして好いのか判りはしなかつた。そればかりでなく義兄のさう云う高壓的な態度に觸れた時、私の方ではまた、母と弟と云ふことだけで弱り込んでゐる私のたゞその一點だけを突き立て、私の志望を文學からそらさせようとしてゐるのではないかと云ふような僻みもあつた。そこで私は、

『今の私にはすぐにどうすると云ふことも出来ません』とはつきり答へた。そして、たゞ自分は自分だけで、誰の厄介にならなくも好いから、自分の思ふ通りに勉強したいと云ひ足した。義兄もそれには弱つてゐたらしかつた。彼も藝術に携つてゐた人である。生活と藝術との間に於ける



悩み、殊にそれが自分の意志一つでは決定されない他人のことであつて見れば、随分苦しかつたらうとも思はれる。

『然し私もよく考へて見るから、お前も何か獨立の出来るようなことをよく考へて見たら好いだらう』と義兄はなほさう云つた。そして義兄の知人で蠟細工の義手や義足を作る事を發明して、そのほかにも造花などもやつてゐる人が、一人だけ弟子を欲しいと云つて探してゐるから、そこへ行つて見たら何うかと云ふような事も云つてゐた。私は自分が手先の不器用な人間だと云ふことも話した。然しそれでも、勉強さへ出来ることならどこへでも行つて好いと答へた。

その日はそれで義兄と別れた。たしかその時だつたと思ふが、義兄は私に是非西國立志篇を買つて讀めと云つて金をくれた。父も曾て中村正直が三十歳から英語を勉強したことや、立志篇の譯文が原文に勝る名文だと云ふ話だと云ふことを私に聞かせてくれた事があつた。金を貰ふと私はすぐにその本を買つて見た。けれどもあのゴゴチない直譯體の文章は私の頭には名文としては響かないし、何とかと云ふ文人が、どれほどの借金を何年かゝつて返したとか、誰は昔は鍛冶屋だつたがどうかして出世した、と云ふような話は、一層何の興味も起さなかつた。我慢して十五六頁は讀んで見たが、あとはもう本を開いて見る氣にもならなかつた。そしてこんなつまらな

い本をすゝめる義兄の量見まで不思議に思ふようになつてしまつた。

義兄が青梅に行つてゐる間の留守宅には、竹下と云ふ人が入つてゐた。その頃の義兄の友人には、山縣五十雄とか斯波貞吉とか、何處かの高等師範の校長をしてゐた豊田某とか云ふような、その時代の一種の新思想家のような人が多かつた。彼等の思想の根柢には、明かにではないが、社會主義に近い何物かを持つてゐた。竹下と云ふ人も、教導團出の軍人で、血の氣の多い人だつたが、獨學で勉強して、一廉の見識を持つようになつた人だと聞いてゐた。青年を愛すると云ふような氣風を持つてゐて、いつも自分の家には二三人の學生をおいてゐた。そして土曜日毎に、それ等の學生とよそからも四五人の青年を呼び集めて、自分では信じない基督教的精神を根柢とした、倫理の講義のようなものをやつてゐた。

どこまでも冷靜だつた義兄は、竹下の熱情的な、時々突飛なことをやる態度を冷笑する風は見えてゐたが、それでも自分のアトリエのある家を貸しておくほどの親みは持つてゐた。私の家の亂れ切つた内情を、義兄がその人に話したものと見えて、私の父母に一度よく話しをしないと申込んで來た。父も母もすぐにそれに同意した。ある日の晝頃からその人は私の家に義兄と一緒にやつて來て、座敷の方で父母と四人で、二三時間何かしきりと話してゐた、やがて私もまたそこ

へ呼び込まれて行つた時には、母の手には小さなバイブルがあるのを見た。父も母も、しきりと恐縮し切つたような神妙な顔をしてゐた。

『まあお母さん、その聖書をよく読んでごらんさい。必ずどんなことでも忍耐する力が湧いて來ますから』と云つて、竹下は快活さうに笑つてゐた。そして私の顔を見ると、

『君は文學をやりたいと云ふ話だね』といきなり聞き出した。私はにや／＼笑ひながらたゞ『えい』と答へた。

『然し君考へて見給へ、文學などと云ふものは柔弱な青年のやる事だ。日本の文明が歐羅巴に比較してどんなに劣つてゐるか』と云ふことをよく考へたら、決してそんなことをやつてゐられる時ではない。ねえ、私のとこにゐる青年で今本所の徒弟學校へやつたる者があるが、私はそれにもいつも云ふのだ。日本ではまだ鐵道の車輪一つでも満足に鑄ることは出來ない。それはつまり、その時に使ふ砂を發見することが出來ないからと云ふことだ。だから、學校を出たら日本中を歩き廻つても好いからその砂一つをでも發見しろ、それだけでもお前の日本に對する功勞は大したものだ——と聞かせてゐるのだがね、どうだね君、文學なんかやる事は諦めて、何かもつと實際的の方面に働くようなことを考へては』とすぐに説教を聞かされた。然し私はどうもその話には

餘り感心出來ないので黙つてゐた。そして自分が尊敬するとか親友だとか話の時に交つて來る私の義兄は、矢張り繪を描いてゐるのぢやないか、と思ふと可笑くなつて笑つてゐた。それから後にも竹下は私に何か色々云つて聞かせた。そして歸る時に、

『土曜日の午後には、多勢君のような人が來るからきつとやつて來給へ』と云つて歸つて行つた。それから後一二度は、母が眼鏡をかけて聖書を読んでゐる姿を見たことがあつたが、骨の髄まで阿彌陀様で固まつてゐた母親には、聖書を読むことは難行艱修の禁を犯すことにでも思はれたのであらう。とう／＼基督教徒とはならず終つた。それに父と母との間に横たはつてゐる争ひの根柢は、もつと現實的に抉り出して見なければ、心から和解の出來るものか、全く絶望すべきものなのか判ることではなかつたのだ。争つてゐる人達自身にでも、その昔風の頭ではどうしてさうまで争はなければならぬのかもわからなかつたに違ひなく、またそれを信念もない宗教で鎮めようとしたところでどうにもなるものではなかつた。私もその頃はよく、父がもつと自然を愛し、あの廣大な自然の前に出て自分の氣を潤くすることが出來たら、こんなつまらない争ひは起るまいとよく考へた事があつた。不自然な掟で、夫婦と云ふ妙な形式の中に押し込められてゐる二人の間の争ひは、そんなものでは片づくものではない事を知らなかつたからの事である。それ

は丁度今日の押し詰つた社會の状態を、生温い宗教位で調和しようとしてゐる人達の企てによく似てゐる。どつちも幼稚で愚かな考へに過ぎなかつた。それに竹下と云ふ人は、

『自分は基督教の教義を正しいとは思ふが、神を信することはどうしても出来ない』と云ふことを口にしてゐた。恐らく彼自身は、そこに何等か自分の新智識の誇りを持つてゐたことであらうが、そんな薄弱な信念で人を宗教的に動かすことは出来ない相談と云ふものだらう。それも今日の宗教を口にするもの、態度とよく似てゐる——三日と経たない中に私の家ではまた例の通り、いやな争ひが起つてゐた。

然し私だけは土曜日毎に竹下の家に講義とも説教ともつかないものを聞きにやらされた。親と云ふものは變なものだ。自分が聞いて感心もしなければ、實行も出来ないことでも、子供には出来ると思つてゐたのであらう。友達もなく遊びに行く所もない私は、別段興味もなかつたが、土曜日には必ず出掛けて行つた。どんな話を聞いたのか、今ではすっかり忘れてしまつたが、私が一番年少で、二十歳位を頭にした青年が七八人集つてゐる所へ行くのが何となく面白かつただけの事であつた。

十一月近くなつても私は矢張りぶら／＼してゐたので、父は私に簿記學校へ行けと云ひ出した。

銀行員養成所と云ふ簿記速成所のことである。三ヶ月経つて卒業すれば、どこかの會社に入れると云ふことだつた。私はそれも好いと思つた。何しろ自分で少しでも金を取つて、夜學にでも何でも通ひたいと考へた。父の云ふ通り神田の夜學へ每晚通つた。つまらない學校であつた事と、放課時間に教師も生徒も焼芋を買つて來て喰つたりする學校だつた事を覚えてゐる。月謝は何でも馬鹿けて高かつた。それには、卒業生を會社に紹介するなど、云ふ好い加減な廣告の故もあつたに違ひない。何でも私と机を並べてゐた男が、私が三井にゐたと云ふことを聞いて、

『三井にゐるんですか、それは惜いことをしましたね』と云つたので、恐ろしくがっかりした事があつた。

それでも一月の間だ私は眞面目に通つてゐた。ところが父は、飯田町にゐた父の兄が、第三銀行の監査役か何かをやつてゐたので、そこへ行つて私の事を話したところが、

『あんな所へやつても駄目だから、せめて主計學校でも卒業させたら好いだらう。さうしたら私が世話してやる』と云はれたので、その月の終りで退學させられてしまつたのだ。養成所の方は退學させたが、主計學校へやる氣は父にはないらしかつた。

その間にも狂人じみた父の疝癪と、それから起る家庭の不和は、日に日に激しくなつて行くば

かりだつた。家にゐる時の父はいつも、恐ろしい顔をして、母や子供に小言を云ふばかりで、それが昂じて来ると破れるような聲で怒鳴り立てゝゐた。母はもう蒼ざめた顔をして、ひしやがれたように静いでばかりゐた。私も父とよく争つた。荒み切つた陰氣な空氣に私の家は閉ざれてしまつて、父が家にゐる時は笑聲一つ起らなかつた。私の心の中では不倫な想念がだん／＼に芽を伸して行つた。もしも父さへこの世にゐなかつたら、母はもつと自由に安樂に過して行くことが出来るだらうとよく考へた。さう云ふ時には母の世話をよく見てくれる大叔父や里方の叔母のことがすぐに頭に浮んだ。總領になつてゐる私にでさへ、教育することを厭つてゐる父が、何で弟達をもつと上の學校へやるものかとも考へた。そしていつも終りには、父さへゐなかつたら、必ず皆ながもつと愉快に、この世を過すことが出来るに違ひない、と云ふ結論に達してしまふのだつた。

それに私自身もその頃は、青春期に近い憂鬱にいつも襲れ勝だつた。何の爲めにこんないやな世の中へ生れて来たのか、どうしてこんな苦みに堪えてまで生きて行かなければならないのか、そしてこの先にどんな種類のものが私を待つてゐるのかを考へる時、自分の希望に向つて進むことも出来ない私の頭は、勢ひ暗くなり勝だつた。それかと云つて十二三の時なまなかに、一度熱

を持つたことのある宗教に走つて、安心を得る氣にもなれなかつた。いつもたゞ眞暗な、じめじめした不愉快な日ばかりが続いてゐた。そして性急な私は、

『こんなつまらない世の中に、何の未練があるものか』と心で呟き通してゐたのであつた。

短刀が一本欲しいと思つたが、私にはそれを買ふ金がなかつた。私は土曜日に竹下の所へ行つて知合になつた、加藤と云ふ徒弟學校の生徒に頼んで、綱鐵の握り太な、丁度墨屋が使ふような太い針のようなものを作つて貰つた。それを貰つて歸つて来ると、滑りの好いように、紙紙で奇麗に研き上げた。それを研く中にも様々な考へに耽つてゐた。思ひ出しても不愉快な想念でもあれば、私は今それを精細に書く自由もなく、また今の私には書きたくもない。

やがてその時が来たのであつた。例の通り晩飯の時だつた。原因は何であつたか忘れてしまつたし、またその時の私にはそんなことはどうでもよかつた。たゞ私が躍りかゝるきつかけさへ與えてくれるものがあればよかつたのだ。父はいつものように、長火鉢の向ふ側に坐つてゐた。私もそれまでのようにこちらの母の隣りに坐つてゐた。そしてまた譯のわからない小言が始まつたのであつた。私は強て反抗した。父の云ふ事々に口答へをした。父の怒りはやがてその頂點に達して

『生意氣云ふなら出て行けッ』

と大きな聲で怒鳴りつけられた時だった。私は夢中になつて何か云ひながら、飛びつかうとしたのであつたが、間にあつた火鉢で邪魔をされてしまった。私の手にきらりと光つたものがあるのを見た母は、驚いて私にかちりついた。必死の力は年老つた女でも、私を動かさないようにしてしまつた。父の顔にも明らかに恐怖の色が浮んでゐた。

『何をバカな事をするのぢや狂人めが』と云つたが、その聲はいつものようには力がなかつた。

『狂人つて云ふのはあなたです。お母さんばかりいぢめて』と云つたが、その時はもう私の力も抜けてゐた。そして心の片隅がえぐられるように痛み出した。

『僕は死にたいんです』と云ふと共に、大きな聲でおい／＼泣いた。母は私の上に折重なりながら、

『決してバカなことをするんぢやないよ、お前はそれでどうでも好いか知れないが私の事を考へておくれ』と云つじしく／＼と泣いてゐた。

思はしい考へもかうしてたゞ一片の空想にしか過ぎないやうに終つてしまつたが、父と私との間には、一層深刻な隔りが出来てしまつた。それから後の二日ばかりは、私は黙つて自分の部屋に

引つ込んで考へてゐた。三日目だかの朝であつた。私は玄關の處で學校のことに就て何か妹に小言を云つてゐた。その時丁度父がそこを通り合せたが、

『ふん、自分の身の始末も出来ない人間が、妹に何か云ふ権利があると思ふのか』といやに冷かに言いながら通り過ぎてしまつた。それから後二年ほどたつてからも、矢張り同じやうにこの妹の事から父と争つて家を出た事があつたが、私はその時堪え難い侮蔑を感じた。父と争つてから以來一人で考へてゐた時も、義兄の言つたやうに、結局私が家にゐると云ふことは、自分の爲めにもならなければ、徹底的に母を保護することにもならないことをしみ／＼と考へてゐた。何處へ行つても好いのだ。自分のゐる所さへ判つてゐれば、母は家にゐることが出来なくなつたら、必ず私の所に来るだらう、とさうも考へてゐた。——私は父にそのことを云はれた時、斷然家を出ようと決心した。家さへ出て、自分で働くやうになりさへしたら、自分の進む道は開けて来るだらう。何でもやる、さう考へて、私は家を出てしまつた。

何でも十二月の半頃だつた。私が家を出てぶら／＼歩いてゐる中に、朝から曇つてゐた空からは雪がちら／＼降り出して來た。家を出ると云つても、無論一錢の金もなければ、何一つ持つて來たわけでもなかつた。私はすぐに途方に暮れてしまつた。家に歸る氣は少しもないがそれかと

云つてどこへ行くと云ふあてもなかつた。寒い風が吹き、冷たい雪がちらちらと降つてゐる中をほんやりと歩いてゐた。そして私は、新聞配達にならうか知ら、それとも口入屋へでも行つて見ようか知ら、と考へながら歩いては、ふと今夜泊る所もないことを考へると、また俄かに途方に暮れてしまふのだつた。

私はさうしてぶら／＼歩いてゐる中に、ふと、日本橋にゐる姉の所へ行つて見ようと云ふ氣になつた。姉の所へ行つて今夜一晚を泊めて貰はう、そして明日になつて雪が晴れたら、何うにかする事も出来るだらう。とさう考へるより外に仕方はなかつた。小僧暮しを三年近くも過して来て、世間と云ふものに觸れて来たような氣もしてゐたが、それは結局檻の中へ押し込まれてゐたと云つて好いか、眼隠しをつけられた馬車馬が無暗に鞭で引ばたかれて来たものかに過ぎなかつたのだ。今かうして自分一人ではつきりと世間と云ふものに對した時、それはたゞ茫漠とした深い霧が眼前にもや／＼と展がつたのをはつきりと感じただけである。その深い霧の底には恐ろしいものや楽しいもの、また美しいものも醜惡なものも雜然として、へし合ひながら、落ち込んで行く私を待ち受けてゐるように思はれるのであつた。

雪は幸ひに激しくも降らなかつた。四谷から日本橋まで、小僧時分の宿入りに往來をしつめた

道を、時々陰氣な空を仰ぎながらほつ／＼と歩いて行つた。

人形町に近い親父橋の袂のところで、小さな時計屋を出してゐる姉の店へついたのは夕方近い頃であつた。雪に濡れて傘もなしで来た私の姿を見ると、

『どうしてこんな日に来たの』と姉は驚いたような顔をした。

『今日ね、一寸遊びに来ようと思つてぶら／＼家を出て来て、途中で降られてしまつたんです』と私は笑ひながら、家出をした事をごまかした。

姉は私にこの頃の家の有様を色々聞いた。

『穴八幡様へ虫封じをしたんだつてね、矢張り利いて』など尋ねた。私がおの後の事を話すと、

『お父さんにも本當に困つたものね、だけどお母さんだつて、あゝ何でも云はれる度に、はい左様でございます、つて切口上で返事をしてたら、お父さんの怒るのも無理がないと思ふことがあつてよ』と姉はさうも云つてゐた。『それで、信ちゃんや三井もよしてしまつてこれから何うするの』それにか／＼返事をして、家出をして来たことがばれてしまふと困ると思つたが、仕方がないから私は、

『小説を書くようになりたいと思つてる』と答へてしまつた。

『まあ』と云つて姉は驚いたような顔をしたが、『だつてそれなら學校へでも行かなきゃいけないでしょ』と尋ね返した。

『え、さうです。だから僕は新聞配達か何かして苦學しようと思つてゐるのだけど』

『そんなことをしたら、身體が悪くなつてしまふわ』と氣の弱い姉はすぐにそれを否定した。私はそれ以上の事は餘り何にも云はなかつた。姉が久し振りで下町へ來たのだからと云つて、近所から何か取つてくれた晩飯が終つてからも、仲々私が歸らうとしないので

『信ちゃん今日は本當に遊びに來たの』と不思議さうにたづね始めた。泊めてくれと云ひ出すには、どうしても本當の事を云はなければならなくなつたので、

『本當はね今朝家で』と私はその時のことをすつかり話した。さうしてもう家へは歸るまいと思つてゐる事も打ち明けた。

『さうして自分でどうするつて云ふの』

『だから新聞配達でも何でもしようと思つてゐるんです』と同じような事を答へた。色々姉も私にとめてみたが、結局姉にも好い考へが浮んで來なかつた。

翌朝になつて雪は晴れてゐた。私は一晩考へた揚句、東京にゐれば、兄弟や親戚の家をつい頼みにしたり、薄汚くなつた恰好を知つてゐる者に見られるのもいやであつた。中學だけでもどこかの土地へ行つて濟せてくる方が好いと思つた。けれどもどうすると云つても、第一に私は一錢の金もなかつた。旅費だけでもせめてどこからか借りて來たいと思つたが、さてさう云ふことを打ち明る人と云ふものは、私の頭に仲々浮んで來なかつた。私は長い間ちつと苦んで考へた。そしてふと思ひ當つたのは、小さい時から私を、自分の子のように可愛がつてくれた、角力の御舟鴻のことだつた。御舟鴻はその時分勝の浦といふ年寄になつて、吉原の品金といふ引手茶屋の養子になつてゐた。御舟鴻に話したら、旅費ぐらゐ貸してくれるだらうと考へた。よしんばそれが駄目でもあの男ならどこか私を、勉強の出來るような所へ世話してくれるかも知れないのだ。それを考へついた時には、私はもうすつかり自分の目的を達したように喜んだ。朝早く起き出して姉の起るのを待つてゐた。

朝飯が終つてから私は姉に、自分の考へを話した。何ういふ考へも浮ばなかつたらしい姉も、結局それに賛成した。

『どう云ふ風にきまつても一度こつちへ歸つてお出でなさいよ』と出かける時に姉は云つたが、

なる事なら、當分私はこゝへも來たくないと思へてゐた。

砂糖屋にゐた頃に、淺草や南千住の方へはよく使ひに行つた事があつたが、私はまだ吉原がどの邊にあるのか知らなかつた。姉に貰つた金で、公園前で馬車を降りてから、私は少時まごごしてゐた。人に訊くのも吉原と云ふのは何だかきまりが悪かつたからだつた。耻しいのを我慢して車夫に聞いて、やつとしばらく歩いたが、ごみくした道はすぐに判らなくなつてしまつた。私は全く弱り切つてしまつて、また向ふからくる職人のような男に

『吉原へ行くのはどつちへ行くのですか』ともぢく尋ねた。職人は可笑しさうな顔をしてゐたが、

『何でえ、迎えに行くのか』と笑ひながら、丁寧によく道を教へてくれた。何でもそれは、西の市の翌日だか、その當日だかであつた。ぬかるみのどろくした道の兩側に、熊手を賣る店が澤山出てゐる所へ來た時に、私はまた途方にくれてしまつた。どつちを見ても同じような町ばかり續いてゐたからであつた。町の角に交番があつたのを見出して、私はその前に來ると、また、

『吉原へはどつちへ行きますか』と巡査に尋ねた。巡査もまだ年の若い男だつたが、私の風體をぢろくくと眺めながら、

『吉原へ何しに行くのかね』と訊ね返した。

私は何だかはつとしたが、先刻の職人の言葉を突差に思ひ出したので、

『え、迎えに行くのです』と強て嚴肅らしい顔をして答へた。それで巡査はやつと丁寧に教へてくれた。

品金と云ふ引手茶屋は、大門を入るとすぐに判つた。芝居で見るやうな四角い行燈をつけた町を、珍しさうにうろく眺めながらその店の前まで來た時に、私はまた氣後れがしてしまつた。御舟潟の姿でも見えないかと思ひながら、店の前を二三度あつちこつちと行つたり歸つたりしてみたが、奥の方にもそれらしい姿は見えなかつた。もし御舟潟がゐないのなら、まだ會つた事もない内儀さんに出會つてつまらない耻さらしをするよりも、このまゝ歸つてしまつた方が好いのだが、などと考へると、益々入る勇氣がなくなつて、しばらく仲の町の通りをほんやりと眺めて突つ立つてゐた。然しもう決して自分の家には歸るまいと決心して出て來たことを考へ直すと、こんなことでどうするのだ、と自分で自分に勇氣をつけて、やつとの思ひで引手茶屋の店に入つたが、私の豫想した通り、御舟潟はまだ興行先から歸つて來てはゐなかつた。

人のよさうな内儀さんではあつたが、私は彼がいつ頃歸るのか聞く勇氣もなくなつて店を出



た。行く時にはまだ見た事もない吉原に對する好奇心や、御舟湯に會つて話をする時の事、それから自分の希望を聞き容れてくれた時の喜びなどを空想しながら勇氣をつけて歩いたのであつたが、私はもうすつかり落膽してしまつて、晝の遊廓を見物する勇氣もなく、呆然として大門を出た。さうしてこの上は姉に頼んで、無理にでも幾らかの金を作つて貰つて、とも角東京の土地を離れよう、と決心してまた葎町へ歸つて來た。

葎町の通りにはその時分、千束屋とか大黒屋とか云ふ口入屋があつた。朝になると店の前には黒山のように人がたかつてゐた。見世物の木戸番のやうな高い臺の上に乗つた男が、集つて來た人の名を呼んで、誰はどこそこ、彼はあそこ、と云ひながら札を渡すと、その人達が各自に小さな包みを抱えて出かけて行くのを、小僧の頃幾度か見たことがあつた。午過の店先には人もゐないで、番頭がほつねんと坐つてゐたが、私はその前を通るとふと心づいたので中へ入つて、

『どつか新聞配達か何かするところがあるでせうか』と尋ねた。

『さあ家ではどうもさう云ふものはやりませんから』と番頭は愛想氣もなく答へたのだつた。もとより大した希望を持つて尋ねに入つたのではなかつたが、斷られると尙一層つまらなくなつて來て、姉の店にほく／＼と歸つて來た。

『どうして、御舟湯は家にゐて』と姉は私の顔を見るとすぐに尋ねた。

『いゝえ、ゐなかつた』と答へながら、私はほんやりと店先に腰をかけてゐた。すぐに旅費を出してくれと云ふのが云ひ悪かつたのである。

『さうを、本當はね、さつきお母さんが入らつしやつたのよ』と云つて、姉は母の云ひ置きだと云つて、私にとも角、竹下のとこまで行け、と云ふのであつた。そして竹下にもすでに會つたが決して私の希望には無茶に反對はしないから、とも角自分の家まで來い。さうして善後策を講じたら好い、と云つてゐたと云ふ事だつた。私がつと意志が強くて、その儘新聞配達か何かになつてしまい、中學に入り、大學にでも進んでゐたら、餘計な苦勞はしないで濟んだかも知れなかつた。恐らく生活の形式だけでも變つてゐたらうし、或ひはもつと眞直に、自分の道に突き進むことが出來たかも知れなかつたのだ。けれども結局私は弱虫だつた。まだ十六位だつたのだから、と自分で時々慰めても見るが、昔からのえらい人達は十六位でも立派にやつてゐたようである。姉に色々心細さうな事を聞かされたり、どこへ行つたか判らなくなつたら、母が餘計に苦勞するだらうと云ふような事を云はれて、のめ／＼と竹下の家まで行つてしまつたのであつた。その當座は竹下も私には何とも云はなかつた。

『まあ好いから、當分僕の家に遊んでゐるが好い。そのうちには君の氣持も變つて來るだらうから』と云つて、私はその家にゐることゝなつてしまつた。

竹下の家には、中村と云ふ細君の弟と、柴田、加藤、などゝ云ふ青年がゐた。何れも私より二つ三つ上の年頃だつた。陰氣でじめじめした家から離れて、同じ年頃の人達と暮してゐることは愉快であつた。朝になつて彼等が學校へ行つてしまふと、私は部屋に閉ぢ籠つて本を讀んで暮してゐた。無理に學校へやつて貰はなくとも好い、かう云ふ日がせめて二三年もつゞいてくれたらば、私もきつと小説の一つ位は書けるようになるだらうが——とそんな事をいつも考へてゐた。

暮れももう僅かと云ふまでに押しつまつて來た時に、義兄が青梅からひよこりと出て來た。そして暮れから新年へかけて箱根へ行くのだから、その時に母を連れて行きたい。そしてその間に四谷の家へ行つて、母の代りに働けと云ふのであつた。私はあんな家へ誰が歸るものかと思つたが、母の代理と云ふので仕方なしに歸つて行つた。

三人の小さな弟妹と、矢釜しやの父を相手に、飯の支度から、家の掃除までをやるのは、私にとつてはつまらない骨の折れることだつた。煮奴を作る時に、砂糖を入れたと云つては怒られたり、子供達が欲がる汁粉を作るのに鹽の入れ方が少ないとか云つては怒られた。父に何か云はれる度毎に、一度家出をして歸つて來てゐる自分の身を耻かしく思つた。そしてまた、これも僅かの間だと思ひ直して、屈辱を忍ぶと云ふような心持になつて堪えてゐた。父は私には全く仇のようになつて思へなかつた。私は常に彼を心で呪つてゐたが、いつかの事を考へると、恥しさにも堪えなくなつたのだ。十七歳の正月と云ふものが、こんな風にして、陰氣な中に来てしまつた。

母が箱根から歸つて來て七草を終ると、私も竹下の家に歸つてしまつた。夕飯の時には先生と呼んでゐた竹下を真中に、細君から妹から、書生もみんな集つて食事をしてそれが終ると議論を始めた。竹下は私に、しきりと教會に行けとすゝめた。私はいつでも、

『先生は自分でも、信仰が出來ないつて云ふぢやありませんか』と云ひ返した。

『然し基督教の教義は確かに正しいと思ふ。僕はあの一夫一婦制から何からが、日本の〇〇から國民全體の上に行はれるようになれば、必ず皆んなが平和な楽しい日を送れるようになると思ひてゐる』と彼はその教義だけをいつも強調した。

『しかし僕には、父がなくつて生れた子なんて云ふものは信じる事が出來ないんです。それに第一、何でもあの奇蹟だの攝理だのつて云ふのが判らない。僕は時々キリストは密夫の子供ぢやなかつたかとさへ思ふのです』

と或る時、餘り押しつけて来る彼の態度に反抗して云つたことがあつた。

『密夫の子の云ふことでも、正しい事は正しいのだ』と云ふ勇氣はその時分の人にはなかつた。

『バカなことを云ふな、そんな事は青年の口にするこぢやない』とたゞ高壓的に罵つた。私には尙それが癪にさわつて、

『僕にはともかくそんなデタラメな事を云ふ宗教は信じられないのです。僕は信じるなら矢張り佛教を信じます』と私も強情に云ひ切つた。

『佛教など、云ふものは、徒らに難解なばかりで、研究したつてわかるものぢやない。それよりも平易で深奥なキリスト教が、一番我々の進む道に適してゐる』と向ふでも飽くまでキリスト教説を固執した。私はウロ覚えの眞宗の教義を無暗に喋舌つた。そしてやさしいものも好いか知れないが、むづかしいからと云つて避けるのでは尙いやだ、と云つた。

土曜日の講演の度毎にも、私は一番よく議論をした。

『宮島は文學なんかをやらうと思ふものだから、何んにも出来んくせに理窟ばかり云つていかん。それよりも、もつと實行の出来ることをよく考へて見たら好いのだ』と私はよく云はれた。恐らくこれは私の邪推かも知れないが——最初家出をした時に、小言も云はずに自分のところへ來

いと云つてくれた竹下の眞意は、私が彼の膝近く暮してゐる中に自らクリスチャンとなり、それがやがて文學などと云ふ、空想的なものから離れて行つて、もつと實利的な方面に働きたいと云ふ衝動を持つようになりはしないかと、考へたのではないかとも思つてゐる。——然し私はその年の四月になつたら、何處かの中學の二年でも三年にでも試験を受けて入りたいと思つてゐた。同じ部屋で暮してゐる柴田と云ふ男に語學を教はり、中村から數學を教へて貰つてゐた。

いやに道徳的であつたり常識ばかりを尊ぶような風習が、その頃の大きな思潮だつたに違ひない。竹下の家の生活も、變に妙な陰影があつた。義兄のアトリエであつた二階の書棚には、西鶴全集や何かゝあつた。義兄がゐる頃には私は公然とそれを讀んだ。然し、竹下がその家に來てからは、二階の扉には鍵が下されて、中には何があるのかも判らなかつた。時々何かの用事で呼びつけられて二階へ行くと、私達には讀むことを禁じられてある、色々な小説が、彼の机のそばや書棚のわきに轉がつてゐた。私は色々と工面して、新刊の小説類は讀んでゐたので、それ等の物の内容は大抵知つてゐた。それだけに私は彼のいやにむづかしい態度が可笑しかつた。

書生達の間にも、彼のいやにビュリタンがつた説教は、少しも重んじられてゐなかつた。誰れでもそれは心から反對してゐると云ふほどの事でもなかつたが、たゞそれだけでだん／＼に燃

えさからうとする青春の熱を押えることは出来なかつた。門の前の目白坂には朝夕、女子大學や女學校へ行ふ生徒達が群をなして通つた。私は柴田や中村と一緒に門のそこへ出で、たゞぢつとその若やいだ姿を眺めてゐるのが楽しみだつた。彼等もさう云ふ時は、いつも矢張り黙つてゐた。けれども眺めてゐる者の心の中では、互ひに何か理解し合ふものがあつたのだ。けれども私はその若い美しい娘達を眺めることが楽しみであると共に、これから苦學でもしなければならぬ自分は、その人達に戀したところで、どうなるものでもない云ふようなケチな諦めが私の心を寂しくした。——三月頃になると、椽先の下の南向の土手には、董や菜種の花が咲いてゐた。今のうちにまだ人家の建てこまない早稲田の邊りには、若荷畑や田圃が所々に残つてゐた。煙のようなくすもやがその上をかすかに白く蔽つてゐる。私は土手の若草の中に寝轉びながら、様々な空想に耽つたり、甘い憂鬱の中に閉ぢ籠つたりして日を暮した。泣董や有明や夜雨の詩を愛讀した頃のことである。バイロンは私の最も尊敬した詩人であつた。

四月になつたならば何うにかして、何をしてでも好いから學校に入りたいと思つてゐた。私は自分の希望を竹下にも幾度か話した。そしてしまひには文學に進むことがいけなければ、物理學校にでも好いから入りたいと妥協した。その頃によく讀賣などに書いてゐた、齋木仙醉(？)の文

章を私はいつも愛讀してゐたからであつた。まだ少年になりたての時分に、妙にこぢらかして入れてしまつた宗教に對する先入見が、どうしても私に神や佛には親しませなかつた。けれども矢張り青年らしい、第一義的に生きたいと云ふ要求は、哲學の方に私を導いた。書いたもの一つ讀んだわけではないが、カントとかヘーゲルとかスピノザとか云ふ人は、もう宇宙人生の眞義を隅から隅まで究め盡して、晏如としてこの人生を送つた人のように思はれた。そしてさういふ人々の本を讀んで、それがすつかり判りさへすれば、私もまた、彼等と等しく泰然として、この生を過すことが出来るように信じてゐた。今はたゞ、その書物が讀めない事や、讀んでも判らない事がいけないのだとばかり思ひつめてゐた。

今ははつきり覺えてゐないが、齋木と云ふ人の數理哲學のものを讀んでゐると、何となくその境地に入れるように思はれた。私はまづ高等數學をやりたくなつたのだ。三井にゐた頃に、小使の中に恐ろしく數學の好きな人がゐた。明けても暮れても、小使部屋でも店の先でも、彼は數學の書物を手にしてゐた。私はその人だけが、ほかの連中とはまるで別に、待遇が好いとか悪いとか云ふようなごたくにも巻き込まれずに超然として暮してゐたのが羨しかつた。そんな事が頭のどつか片隅にでも隠れてゐて、私にそんな氣を起させたのかも知れなかつた。私はとも角、そ

れ程文學をやつていけないと云ふのなら、物理學校を出て、どつかの教師にでもなつてからでも好い、自分の好きな事をやりたいと考へたのであつた。

けれどもそれは、物理學校だらうが商業學校だらうが、或ひはまた何の學校であらうが、私が苦學すると云ふことに、先輩達はみんな反對したのであつた。苦學と云ふことも一年や二年で済む事ではない。長い間には心のどこかに緩みが出て、必ず墮落するに極つてゐると云ふのが、彼等の強い信念であり、私に與へる鐵のような斷案だつた。私もその後澤山の苦學生や、苦學生上りに出くはして、本質的の性情はめちやくに損なはれ、智識的競争心やケチな物質的の誇りばかり發達してゐる人達が多いのを見た時には、彼等の言も案外に偽ではなかつた事を承認した。然し、本質と云ふものは、案外に先天的の力が強いものであり、また私の場合には、新聞配達風の苦學をしないまでも、自分の心にもない事を先づ修めて、それから自分の本道に歸れと云ふことは、苦學以上に骨の折れる、目的の遠いことだつた。その時分だかそれより一年ばかり後だけに、中村吉藏が苦學生の群を描いた小説を読んで、教師になる目的のある者や、法律に志してゐる者の中に、文學に志した青年が交つてゐて、自分はいつになつたら自分の目的と云ふものが達せられるのか、その目的と云ふものは、法律家になれば濟むと云ふように劃然としたものでない

のを嘆いてゐるのを見て、私も自分の目的が辯護士や教師や醫者のように、どこかでくぎりのついてゐるものでない事に苦んだ。然しそれにしても、自分の目的に進みながら墮落したものは、自分で諦めも慰めもするよすがもある。けれどもただ、徒らに迷ひの多い道に踏み込んだのは、苦勞のし甲斐のない苦勞が多かつた。

私はさうして自分の希望を主張したり、色々と將來のことについて論じ合つてゐる中に、四月の入學期も遂に過ぎてしまつた。最もその頃、祕密に入學試験だけ受けて見ようかと企て、みたが、願書の何のと云ふ小而倒な手續がうまく行かない中に、とうとう駄目になつてしまつた。

私が今かうして書いてゐても、どうしてあの頃はかうまでも、下らない學校など云ふものに執着してゐたのか不思議になる位だ。そしてこのごろになつて、夕方の丸の内邊をぶらついてゐると、會社とか新聞社などの給仕の人達が、頭に學生帽を被り金釦をつけて、如何にも學生らしく見て貰ひたさうな風を見ると、あの頃の私も、あの位の量見ではなかつたのかと思つて冷々する事がある。けれども、何もえらさうに辯解するわけではないが、私はその後も決して自分で學生の風を強て装つた事はなかつた。それから二三年経つてから神田の方で、角帽を被り袴をはいて豆腐屋をしてゐる奴を見た時に、苦學を賣り物にするを奴の面に唾でもぶつかけてやりたい程に

思つた位だ。少し前では交換局へ行く女の人達でも、いやに女學生のようにしてゐたことがあつた。私はあの給仕諸君や交換手諸君を見るたびに、どうして自分であゝまで學生がえらいと思ふのか判らなかつた。給仕だつて交換手だつて、自分で勉強して自分でえらくなりさへすれば好いのである。それも結局、學校へでも行つて、つまらない教師の教へを受けた人間だけが、人間らしく取扱はれた、世の中の反映と思へば尙更にいやになるのだ。――

がまあ、私のこの學校生活に對する變な憧憬も漸く終りに近づいて來た。入學期が過ぎて、それに對する希望が當分の間でも失はれてしまふと、私の背々した氣持も少しづつ靜まつた。さうして何うにかしてゝも、たゞ勉強の出来る所を選び出した。

竹下と云ふ人には、何を話したところでも駄目だと私は心に諦めてゐた。そこへ遊びに來る友人と云ふのを見ても、校長をやめて水菓子屋を始めて見たり何かする、實利と獨立にばかり急な人のみであつた。義兄に話してみたところで、とても駄目だと云ふことも判つてゐた。私はこの竹下の家からも、もうそろ／＼出かけなければならなくなつた事を考へた。その頃になつて青梅にゐた義兄がまた一度東京へ出直してくる事になつて、竹下の家もよそに移らなければならなくなつた。それで柴田と云ふ男は、米國へ行くと云つて、先にその家を出てしまつた。

家の事で青梅から出て來た義兄に會つた時、

『どうだね、何かほかの事をする氣になつたか』と義兄は私に尋ねた。

『いゝえ、別になりません』と答へると、

『さうかね』と義兄も困つたような顔をしてゐた。義兄と竹下とも私の事に就て何か相談したらしかつた。義兄が青梅に歸ると、竹下も家に移らなければならなくなつた事情や何かを知らせて來て、どうせ文學をやりたいなら、寫眞屋か齒醫者の技術でも修めたらどうかと思ふ。どつちも短日月の中に覺えることも出来るし、免狀を取る事も出来れば、また獨立してやる事も出来る、これが今自分の考へた最上の策と思ふからやつて見たらどうか、齒科醫になる考へなら、自分の友人に中島と云ふ人が淺草の方にゐるから、その人に聞き合せてやる――と云つて來た。文學をやりたいと云つても、その頃の私には、文學者と云ふものが何うして生活してゐるのかも、本當によく知らなかつた。新聞に出てゐる文章とか、また單行本とかを見ても、それがどんな工合に金になるのか、またさう云ふ人達が、新聞社に勤めて生活してゐることなども一向に知らなかつた。――實際その頃は、可なり有名な人達でも、新聞社に勤めでもしなければ、満足に生活は出來ないらしかつた。

文學者になりたいと云ふ要求は、可なり熾烈なものがあつたが、文學そのものに依て生活することが出来るものか否かの問題が、私には未知であり解決されないことであつた。——それが遠因となつたのかどうか、今日でも文筆による生活と云ふ事に對しては、可なりな疑問と不安とを持つてゐるが——生活に對する不安は矢張り私の心を苦しめた。義兄の手紙を見てから、私の心はだん／＼に動いて來た。寫眞屋か齒科醫か、その何れを選ばうか、それともまたこのほかに、何か私の性情に適した職業があればと、色々に考へた。そして結局齒科醫となることに志しを決めてしまつた。齒醫者を始めた處で、流行らなくても好いのである。たゞ喰つて行くことさへ出來て、それから先は自分の好きなことに没頭することが出來さへすれば好いのだ——と考へたからであつた。それには齒科醫が一番適當らしく思つたのであつた。

竹下にもそのことをすぐに話した。竹下は私の考へが大いに好いと云つて賛成した。そして口腔衛生の發達しない日本には、進歩した齒科醫がどんなに必要で大切であるか、と云ふようなことに就て、その意見を滔々と聞かせてくれた。私は何も口腔衛生學の大家にならうとも考へてはゐなかつたが、彼の云ふことを黙つて聞いてゐた。義兄のところへも、齒科醫の所へ行くと云ふ返事を出したら、すぐに紹介狀を入れた手紙を送つて來た。

六月頃のことだつた。その日も矢張り雨が降つてゐた。私は淺草の鳥越に住んでゐた、中島と云ふ人を訪ねて行つた。會つてみるとその人は若い人で、免狀も此の頃取つたばかりなので、まだ開業する運びにならない中を、箱を抱えて巡回治療をして歩いてゐるのだと云ふことだつた。私はその人に、齒醫者の免狀を取るのは、餘程困難なことなのかどうか尋ねた。

『なほに、誰だつて書生をしながら勉強して免狀を取るのですもの、大してむづかしいわけはありませんよ、たゞ大事なのは實地です。これをしつかりやつておかないとね、開業をしてからそれは困る事になるんです。この間だ大下さんからお手紙があつたんで、私の先生だつた富安と云ふ人に話してみたら、いつ來ても好いと云ふことでしたから、今日でも行つて見ますか』と中島は氣サクらしく、さつさと話を進めてくれた。

『え、ともかく一度連れて行つて下さい』

と私も頼んだ。小雨がしよ／＼降る中を、私は中島のあとについて、鳥越から日本橋の藥研堀まで歩いて行つた。

その途中で中島は、富安の家には患者が澤山來ることだの、また現在の齒科醫の中では、あれほど進歩した機械を持つてゐる人は少い、と云ふようなことを話してくれた。私はその話を聞き

ながら、まるで別なことを考へてゐた。普通學の智識の足りない私は、その家に行つたら、物理とか化學とかまた生理だの藥物だのと云ふ學問は自然に覺えることになるだらう。さうすれば、それだけでも二年は勉強する甲斐があるのだ、と思つて自分を慰めてゐた。

その日はたゞ富安と云ふ人に、一寸會つたゞけで歸つてしまつた。門口から入つて行つた時、石炭酸の匂が一番強い心となつて、色々な藥品の交り合つた匂が鼻を打つて來たとき、妙に物悲しい氣になつた。恐らく幼い時分よく醫者へ連れられて行つた時の事を、それとははつきり判らないで憶ひ出してゐたのかも知れなかつた。

富安の塾——と云つてゐた——へ入塾するには、保證人が必要だと云ふので、二三日たつてから私はまた、竹下と一緒に改めて出掛けて行つた。そこで何だか妙な契約證書のようなものを取られてしまつた。その文句にも、七ヶ年は貴下の塾に必ずゐること、もし中途自分勝手の理由で退塾した場合には、その日まで世話になつた経費を辨償しなければならぬと云ふことが書いてあつた。餘程後になつてから解つたことであつたが、この塾でも塾生達が、受験の目的で勉強することは喜ばれてゐなかつた。それは漸く技術も覺え込み、治療の代理も出来るようになった頃に獨立してしまはれると云ふことが苦痛であつたからであらう。現に私の世話をした、中島と云

ふ男なども、何かそんな原因から争つて塾を出て後に、勉強して試験を受けてしまつたのだと云ふことだつた。それにしても、向ふで世話になつてゐる間と云ふのが、朝から晩まで身を休める暇もないほど、働き通しに働かなければならないので、世話と云ふのはこんな事を意味してはゐないだらうが、こちらの事に對しては少しも注意を拂つてはなかつたのであつた。

契約書を入れる時に、富安は竹下に

『いやこんなものはほんの形式だけの事ですから』と云つて、お互ひに『あは、』と笑つてゐたが、この『たゞほんの形式』が、その後どれだけ私の心を苦めることになつたか知れなかつたのだ。

然しその時は、そんな事にも心づかないで私はそれこそ本當に世話になつてゐるような境遇を心苦しく思つてゐた、竹下の家から出る事が出來たのを喜んでゐた。竹下と云ふ人は、決して悪い人ではなく、相當に親切氣もあり、また私達に對するには充分な智識もあつたのであつたらうが、人生の根底に突き込んで行く、洞察力や熱意までは持たない人だつた。たゞ何事も表面的な道徳で片をつけて、いやに大きな事を云つては満足してゐるような所が、私とはいつもそりが合はなかつた。私には彼の好意は心から感謝しつゝも、どこかで反撥したくつて堪らない點があつ



た。それがやがて、彼の家に世話になつてゐることを、私に心苦しくさせたのであつた。

富安の家は藥研堀にあつた。それは私が砂糖屋にゐた頃、本所から小舟町まで、使ひの往き來に通つた道である。少時の間だ離れてゐた、下町の生活がこんどは變つた色彩を持つて尙鮮かに私の心に映つて來た。表面だけを妙に道徳的に嚴肅に裝つてゐるような、竹下の家から、艶かしい色彩の勝つた土地に來たとき、私はそれだけでも何となく解放されたような氣になつたのであつた。

二階の治療室には、藥液の匂が一杯に籠つてゐて、磨き立てた金屬の小さな機械が、冷たい光を放つてゐる。それが隣の待合室に待つてゐる、下町風の人達のアタリ抜けのした粹な姿と不思議な對照となるのであつた。十人近くゐた塾生とも最初の間は親みも薄いので、治療室に人氣のなくなつた時にでも、私は二階に居残つて、小さなバルコニーのついた西洋窓から首を出して、小僧の時分色々な空想に耽りながら毎日のやうに通つた道を眺めながら、三四年の間に色々變つて來た自分の過去を顧みては、薄暗い追想に耽つてゐた。どんよりとした、濁り水のようにごちや／＼した想念の中に、悲しげに沈んでゐる母の顔ばかりがいつもはつきりと浮び上つて來た。『勉強して早く齒醫者の免狀を取つてしまひたい。さうして獨立してしまへば』と考へると、何

か未來には楽しげな光が少しづつ射して來るやうにも思へるのだつた。けれどもそれも全くの幻想にしか過ぎなかつた。本質的な要求を壓へ抑へ、強て逆な方面に進まうとし始めてゐた私は、それから後の私の生活を、益々こぢれた、わけのわからないものとしてしまはふとしてゐたのであつた。初めて砂糖屋の小僧に出た時は、無意識でもあり、そしてまた形骸の上の流浪に一步を踏み出した時だつた。そしてこの齒醫者の家に出て來たのは、更に心の上に於て、當途もない迷亂の旅に登るべく、一步を進めたことであつた。憂暗な物思ひに閉ぢられた頭に光つた楽しげな幻想は、電車のボールから閃いてくる、スパークのように頼りなく消ゆべきものであつた。事實は却つて光も何もないトンネルのような暗い道が、知らない間に私の前途にちやんと待ち受けてゐたのであつた。

大正十一年十月二十七日印刷  
大正十一年十一月十五日發行

定價金壹圓八拾錢



自叙傳

著作者  
發行者  
印刷者  
印刷所

宮島資夫  
神田豐穗  
寺田國太郎  
早稻田印刷株式會社  
東京牛込早稻田區卷町三六二

發行所

東京市神田區表神保町十番地  
春秋社

振替東京二四八六一番  
電話神田二一三八番

# 加藤一夫著作集

第參編 (短小小説)    第肆編 (長編小説)    第五編 (論文集)

## 響かぬ鐘

百一十頁・價壹圓六拾錢・送料八錢

加藤氏が懐嚮と波瀾多  
き實生活を赤裸々に披  
瀝せる短篇六種を收む

## 幻滅の彼方へ

紙數四百餘頁・價壹圓八拾錢・送料拾錢

信仰と戀に迷ふ一少女  
の魂の記録にして著者  
が博大なる人道的精神  
全卷に透徹す。

## 自由人の生活意識

紙數三百頁・價壹圓二拾錢・送料八錢

著者が統卒せし自由人  
聯盟の精神を宣明せる  
長論文也

宮島資夫自叙傳

第二卷 (印刷中)

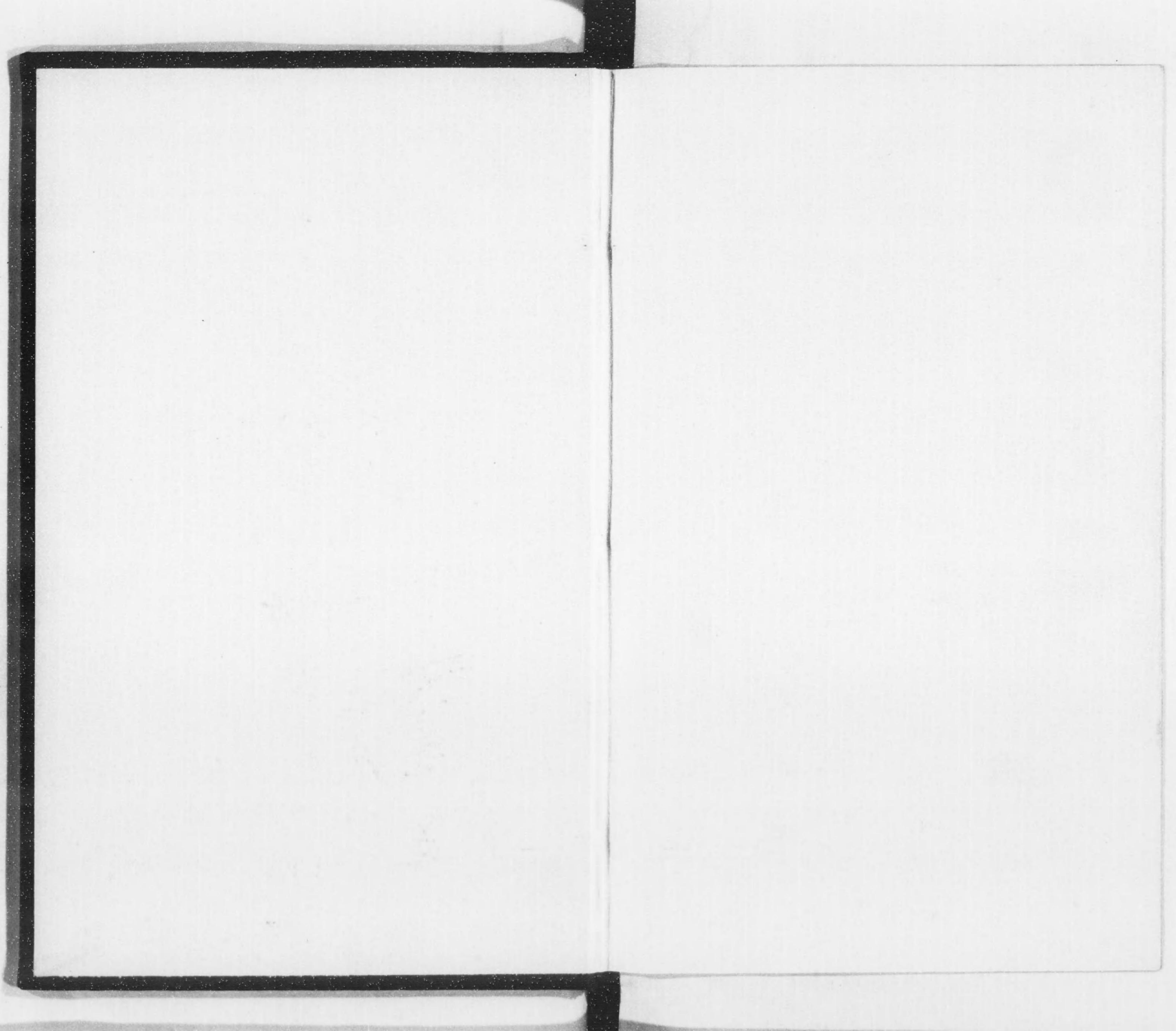
第三卷 (近刊)

——全三卷にて完結——

# トルストイ名著名集

トルストイの思想を全世界に流布せしめしに就いては、フリー・エーヴ・プレスの効を没すべからず。益に吾邦曠古の大出版たりしトルストイ全集を完成せし吾社は、茲に江湖の熱需に促されて該全集中の名篇を選出し、茲に極めて簡素低廉の小冊子として頒布す。

1	宮島新三郎譯	人 生 論	四六版假綴	定價金八拾錢	送料金八錢
2	木村 毅譯	藝術とは何ぞや	四六版假綴	定價金一圓	送料金拾錢
3	細田源吉譯	私 の 懺 悔	四六版假綴	定價金四拾五錢	送料金八錢
4	福永挽歌譯	短 篇 三 種	四六版假綴	定價金七拾錢	送料金八錢
5	春秋社譯	神の國は爾曹の衷にあり	四六版假綴	定價金壹圓八拾錢	送料金拾四錢
6	木村 毅譯	家庭のための物語	四六版假綴	定價金壹圓參拾錢	送料金拾錢
7	加藤一夫譯	宗教とは何ぞや	四六版假綴	定價金七拾錢	送料金八錢
8	飯田敏雄譯	國 民 傳 説	四六版假綴	定價金六拾錢	送料金八錢
9	春秋社譯	民 話	四六版假綴	定價金八拾錢	送料金八錢
10	福永挽歌譯	家庭の幸福	四六版假綴	定價金七拾五錢	送料金八錢



終